

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第201集

ひら やま しも ぼる
平 山 下 原 遺 跡
Hirayamashimobaru Site

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

2011年

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区全景（南から路線を望む）



平山下原遺跡周辺地形（北西から）



第2次調査区 礫群と集石遺構



第2次調査出土縄文土器



第3次調査区全景



第3次調査出土縄文土器



第3次調査出土石器

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した平山下原遺跡は、平成20年から平成22年にかけて発掘調査が行われ、後期旧石器時代の石器群や礫群、縄文時代早期の土器や石鏃、集石遺構や土坑等が確認されました。後期旧石器時代や縄文時代早期の遺物については、第1次・第2次調査で出土した黒曜石と、第3次調査において出土した黒曜石産地が南九州や北部九州に分かれること、出土した土器においてもそれぞれ南九州や北部九州に由来することがわかりました。このように調査区により影響を受けた地域が異なっているという特徴が明らかとなりました。また弥生時代や近世、近代の遺物も確認され、当地域が長い期間利用されていたことが発掘調査により明らかになりました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 森 隆 茂

例言

- 1 この報告書は東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した都農町下原遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関係するものである。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡名について、発掘調査当初は字名から下原遺跡と呼称していたが、都農町内に同名の遺跡が存在していた。また、遺跡の周辺では下原という地名ではなく、遺跡西方の平山地区の名が周知されている。よって本報告書作成にあたり、遺跡名を下原遺跡から平山下原遺跡へと名称変更を行った。
- 4 現地での実測図作成、図版撮影について第1次調査は田中達也、安藤利光、土屋雄毅、第2次調査は田中達也、石貫弘泰、橋口由佳、第3次調査は川俣唱子、谷口めぐみを中心に行った。
- 5 平山下原遺跡第2次調査では草・竹木等刈払粉砕を（有）永友建設、空中写真撮影を九州航空（株）、測量委託を（有）久保田測量、自然科学分析をバリノ・サーヴェイ（株）、石器実測委託を（株）九州文化財研究所に委託して行った。
第3次調査では測量委託を（有）河野測量設計事務所に委託して行った。
なお、第VI章に掲載した自然科学分析の成果は、成果報告に若干体裁を替えて掲載した。
- 6 本書に利用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の1/25,000図（都農）を利用した。また遺跡周辺地形図等は西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所提供の1/2,500図を基に作成した。
- 7 遺構・遺物の実測図、トレース図作成は、整理作業員の補助を得て田中、川俣、久保田陽香が行った。
- 8 土層断面、遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局/監修の『新版標準土色帖』に拠った。
- 9 本書で用いた標高は海拔絶対高である。また方位は座標北（G.N.）を基本とするが、遺構実測図などの一部に磁北（M.N.）を用いた。
- 10 本書で用いた遺構・火山灰の略号は、次のとおりである。
SC：土坑 SI 礫群・集石遺構
K-Ah：鬼界アカホヤ火山灰 Kr-Kb：霧島小林軽石 AT：始良 Tn 火山灰
- 11 遺物実測図の縮尺は、第1次・第2次調査は石鏃・細石刃・細石刃核1/1、その他石製品・石核・剥片は2/3、台石1/4、縄文土器1/3、弥生土器1/3、鉄器2/3、陶磁器類1/3（一部1/4）に統一した。
第3次調査は石鏃1/1、石斧・蔽石・剥片2/3、台石1/4、土器2/3（一部1/3）に統一した。
また、遺構実測図については縮尺を礫群・集石遺構・土坑1/30、炭焼窯1/80としている。
- 12 本書の執筆は田中（第I章～第IV章、第VI章～第VII章）・川俣（第V章、第VII章）・石貫（第IV章第7節の一部）が分筆し、編集は田中・川俣が行った。
- 13 出土品および諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

目次

本文目次

第 I 章 はじめに	
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の組織	1
第 II 章 遺跡の環境	
第 1 節 地理的環境	2
第 2 節 歴史的環境	2
第 III 章 調査の方法と経過	
第 1 節 調査の概要	6
第 2 節 発掘調査の経過	6
第 3 節 整理作業の経過	7
第 4 節 普及活動	7
第 IV 章 第 1 次・第 2 次調査の記録	
第 1 節 基本層序	9
第 2 節 遺物包含層の認識	9
第 3 節 石材の分類基準	10
第 4 節 調査の概要と遺物	16
第 5 節 後期旧石器時代の遺構と遺物	21
第 6 節 縄文時代早期の遺構と遺物	53
第 7 節 その他の遺構と遺物	84
第 8 節 小結	92
第 V 章 第 3 次調査の記録	
第 1 節 調査の概要	94
第 2 節 基本層序	97
第 3 節 遺物包含層の認識	97
第 4 節 石材の分類基準	97
第 5 節 縄文時代早期の遺物	98
第 6 節 小結	107
第 VI 章 自然科学分析の成果	
第 1 節 自然科学分析の目的	108
第 2 節 試料と分析方法	108
第 3 節 分析の結果	109
第 4 節 小結	110
第 VII 章 総括	
第 1 節 後期旧石器時代	116
第 2 節 縄文時代早期	116
第 3 節 考察	119

挿図目次

第 1 次・第 2 次調査	
第 1 図 西ノ部第 2 遺跡出土遺物	3
第 2 図 周辺遺跡分布図	4
第 3 図 平山下部遺跡と周辺地形との高低差 (日向麓から)	4
第 4 図 東九州自動車道(日向-都農間) 既設遺跡位置図	5
第 5 図 平山下部遺跡調査範囲およびグリッド図	8
第 6 図 土層断面図(1)	11~12
第 7 図 土層断面図(2)	13~14
第 8 図 第 2 次調査区調査範囲	15
第 9 図 平山下部遺跡遺構全体図	17
第 10 図 第 1 次調査遺物実測図(1)	18
第 11 図 第 1 次調査遺物実測図(2)	19
第 12 図 後期旧石器時代遺構分布図	20
第 13 図 第 2 次調査区 a 層・次 a 層遺物分布図	23
第 14 図 第 2 次調査区 a 層遺物実測図	24
第 15 図 第 2 次調査区 a 層・b 層遺物分布図	25
第 16 図 第 2 次調査区 b 層・b 層遺物分布図	26
第 17 図 第 2 次調査区 a 層・b 層遺物実測図	27
第 18 図 第 2 次調査区 b 層遺物実測図	28
第 19 図 第 2 次調査区 b 層遺物実測図	29
第 20 図 雑草分布図(S I 2~S I 4)	30
第 21 図 雑草実測図(S I 2~S I 4)	33
第 22 図 第 2 次調査区 b 層遺物分布図 (須賀岩・須賀岩)	34
第 23 図 第 2 次調査区 b 層遺物分布図 (ホルンフェルス・黒曜石)	35
第 24 図 第 2 次調査区 b 層遺物分布図 (チャート・尾崎山酸性岩類)	36
第 25 図 第 2 次調査区 b 層遺物(砂岩・水晶) 層断面分布図	37
第 26 図 第 2 次調査区 b 層遺物実測図(1)	38
第 27 図 第 2 次調査区 b 層遺物実測図(2)	39
第 28 図 第 2 次調査区 b 層遺物実測図(3)	40
第 29 図 第 2 次調査区 b 層遺物実測図(4)	41

第30回	第2次調査V層遺物実測回(5)	42	第56回	第2次調査V層遺物実測回(2)	76
第31回	第2次調査V層遺物実測回(流紋岩)	43	第57回	1～Ⅴ層遺物実測回(1)	77
第32回	第2次調査V層遺物実測回(流紋岩・緑頁岩)	44	第58回	1～Ⅴ層遺物実測回(2)	78
第33回	第2次調査V層遺物実測回 (緑頁岩・尾跡山酸性岩類)	45	第59回	1～Ⅴ層遺物実測回(3)	79
第34回	第2次調査V層遺物実測回(尾跡山酸性岩類)	46	第60回	1～Ⅴ層遺物実測回(4)	82
第35回	第2次調査V層遺物実測回 (尾跡山酸性岩類・黒曜石・チャート・砂岩)	47	第61回	その他の時代遺構分布回	83
第36回	第2次調査V層遺物実測回	52	第62回	土坑分布回(5C1、5C3、5C4)	84
第37回	縄文時代早期遺構分布回	54	第63回	土坑実測回(5C1)	85
第38回	集石遺構分布回	55	第64回	土坑実測回(5C3、5C4)	85
第39回	縄文時代早期土坑分布回	55	第65回	灰窯実測回	87
第40回	集石遺構実測回(5I1)	56	第66回	灰窯構築過程の復元回	87
第41回	土坑実測回(5C2)	56	第67回	その他の時代遺物実測回(1)	89
第42回	土坑実測回(5C5、5C6、5C7)	57	第68回	その他の時代遺物実測回(2)	90
第43回	縄文土器分布回	59	第69回	都農町における旧日本軍作戦配備回	91
第44回	縄文時代早期土器実測回	60	第3次調査		
第45回	第2次調査V層遺物分布回 (流紋岩・緑頁岩)	64	第70回	第3次調査区調査範囲回	94
第46回	第2次調査V層遺物分布回 (黒曜石・その他の石材)	65	第71回	第3次調査土層断面回	95～96
第47回	第2次調査V層遺物実測回(1)	66	第72回	第3次調査縄文時代早期土器分布回	99
第48回	第2次調査V層遺物実測回(2)	67	第73回	第3次調査縄文時代早期遺物実測回(1)	100
第49回	第2次調査V層遺物実測回(1)	69	第74回	第3次調査縄文時代早期石器石材別分布回	102
第50回	第2次調査V層遺物実測回(2)	70	第75回	第3次調査縄文時代早期遺物実測回(2)	103
第51回	第2次調査V層遺物実測回(3)	71	第76回	第3次調査縄文時代早期遺物実測回(3)	104
第52回	第2次調査V層遺物実測回(4)	72	第77回	第3次調査縄文時代早期遺物実測回(4)	105
第53回	第2次調査V層遺物実測回(5)	73	自然科学分析		
第54回	第2次調査V層遺物分布回	74	第78回	垂乱物組成および火山ガラス比	112
第55回	第2次調査V層遺物実測回(1)	75	第79回	火山ガラスの屈折率(1)	112
			第80回	火山ガラスの屈折率(2)	113
			第81回	新方輝石の屈折率(1)	113
			第82回	新方輝石の屈折率(2)	114

挿表目次

第1次・第2次調査		第8表	観音一覧表	33
第1表	西ノ部第2遺跡出土遺物計測表	第9表	V層遺物計測表(1)	48
第2表	平山下原遺跡周辺遺跡一覧表	第10表	V層遺物計測表(2)	49
第3表	平山下原遺跡基本層序と遺物包含層	第11表	V層遺物計測表(3)	50
第4表	石器石材分類表	第12表	V層石器遺物計測表	52
第5表	第1次調査遺物計測表	第13表	集石遺構一覧表	58
第6表	Ⅴa層・Ⅴb層・Ⅴc層遺物計測表	第14表	縄文時代早期土坑一覧表	58
第7表	V層遺物計測表	第15表	縄文土器観察表	62

第16表	石器分類表	63
第17表	V層遺物計測表	67
第18表	VI層遺物計測表	80
第19表	IV層遺物計測表	81
第20表	1～Ⅲ層遺物計測表(1)	81
第21表	1～Ⅲ層遺物計測表(2)	82
第22表	1～Ⅲ層縄文土器観察表	82
第23表	その他の時代土坑一覧表	84
第24表	その他の時代遺物観察表(1)	90
第25表	その他の時代遺物計測表	90
第26表	その他の時代遺物観察表(2)	90

第27表	第1次・第2次調査石器出土数・重層一覧表	93
------	----------------------	----

第3次調査

第28表	縄文土器観察表	100
第29表	石器計測表	106
第30表	第3次調査石器出土数・重層一覧表	106

自然科学分析

第31表	重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定結果一覧表	111
第32表	宮崎市内出土の早期無文土器集成表	118

図版目次

巻頭図版目次

巻頭図版1	調査区全景(南から路線を望む)
巻頭図版2	平山下降路跡周辺地形(北西から)／第2次調査区 礎石と集石遺構
巻頭図版3	第2次調査出土縄文土器／第3次調査区全景
巻頭図版4	第3次調査出土縄文土器／第3次調査出土石器

巻中図版目次

写真1	整理作業石器実測作業風景	7
写真2	整理作業トレー作業風景	7
写真3	整理作業レイアウト作業風景	7
写真4	昭和22年 米軍撮影空中写真(都島町上空)	91
写真5	軽鉱物・重鉱物・火山ガラス	115

巻末図版目次

第1次・第2次調査

図版1	2-1区土層断面／VI層遺物出土状況①	121
図版2	VI層遺物出土状況②／VI層遺物出土状況③	122
図版3	S12検出状況／S13検出状況／S14検出状況／S14構成磚 接合状況／S11検出状況／S11平載状況／S11完備状況	123
図版4	S C 2平載状況／S C 2完備状況／S C 5平載状況／S C 5完備状況／S C 6平載 状況／S C 6完備状況／S C 7完備状況／S C 1平載状況	124
図版5	S C 1完備状況／S C 3平載状況／S C 3完備状況／S C 4平載状況／S C 4完備 状況／炭層検出状況／炭層平載状況／炭層完備状況	125
図版6	第1次調査遺物①／第1次調査遺物②／Ⅸa層遺物①／Ⅸa層遺物②／Ⅸa 層・Ⅸb層遺物／Ⅸb層遺物／Ⅸ層遺物／VI層旧石器遺物①	126

図版7	VI層旧石器遺物②／VI層旧石器遺物③／VI層遺物炭灰層／VI層遺物硝子貝殻／ VI層遺物接合資料	127
-----	--	-----

図版8	接合資料①／接合資料②／接合資料③／VI層遺物尾跡山麩性岩類／VI層遺物尾跡 山麩性岩類、炭層石、チャート／V層旧石器遺物／縄文土器Ⅰ類／縄文土器Ⅱ類	128
-----	--	-----

図版9	縄文土器Ⅲ類／V層縄文時代遺物①／V層縄文時代遺物②／VI層縄文時代 遺物①／VI層縄文時代遺物②／VI層縄文時代遺物③／VI層縄文時代遺物④ ／IV層縄文時代遺物①	129
-----	---	-----

図版10	IV層遺物②／1層～Ⅲ層遺物①／1層～Ⅲ層遺物②／1層～Ⅲ層遺物③／ 1層～Ⅲ層遺物④／その他の時代①土器・石器・貝器／その他の時代②陶器 器類・ガラス類／その他の時代③鉄制(軍用)陶器	130
------	---	-----

第3次調査

図版11	調査前現地地形／チャートブロック／黒曜石ブロック／B区土層境／縄文土器	131
------	-------------------------------------	-----

図版12	石器／石斧・磨石・台石／ネムンフェルス、砂岩、炭酸岩、尾跡山麩性岩類遺 物／安山岩系遺物／チャート遺物／西九州産黒曜石遺物／石枕／接合資料	132
------	--	-----

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道(日向～都農間) 19.7kmについて県文化財課は、平成17年度、32遺跡、306,700㎡の分布調査結果を提示した。その後、当該区間は、平成17年度末までに関係市町との設計協議等が終了し、平成18年度末には用地買収に着手している。この間、当区間の平成26年度併用開始が公表され、用地取得およびそれに続く埋蔵文化財調査にとって時間的に厳しい状況となった。また、平成19年11月には発掘調査対象面積の見直しが行われ、暫定2車線261,400㎡と面積が減少している。

平成20年7月1日、東九州自動車道関連としては初の『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道路株式会社九州支社長と県知事との間で締結された。この協定書では、発掘調査の範囲や体制、全体の実施計画、費用の概算額等が提示された。その後、用地の取得状況が進展しないながらも同年10月17日付で『埋蔵文化財発掘調査委託契約』を結び、着手できる可能性がある10遺跡3,500㎡の発掘調査に着手した。平成21年1月には、用地取得や文化財調査の進展を条件に平成25年度の併用開始が努力目標となったが、関係者の努力により平成22年10月末現在、32遺跡中15遺跡は完全に調査を終了、未着手は3遺跡を残すのみとなっている(第4図)。

平山下原遺跡の調査は平成20年11月25日から12月12日まで400㎡を対象に第1次調査を、平成21年6月8日から翌年2月8日まで6,680㎡を対象に第2次調査を、平成22年5月24日から平成22年7月26日まで910㎡を対象に第3次調査を行った。

第2節 調査の組織

平山下原遺跡の発掘調査・整理報告は以下の組織で実施した。

【調査主体】

宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

福永 展幸(平成20・21年度)

森 隆茂(平成22年度)

副所長

加藤 悟郎(平成20年度)

北郷 泰道(平成22年度)

副所長兼総務課長

長友 英詞(平成20・21年度)

総務課長

矢野 雅紀(平成22年度)

主幹兼総務担当リーダー

高山 正信(平成20・21年度)

副主幹兼総務担当リーダー

長友 由美子(平成22年度)

調査第一課長

長津 宗重(平成20～22年度)

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹(平成20～22年度)

【第1次調査】

(調査・報告書担当)

調査第一課調査第二担当

主事 田中 達也(平成20～22年度)

(調査担当)

調査第一課調査第二担当

主査 安藤 利光(平成20年度)

主査 土屋 雄毅(平成20年度)

【第2次調査】

(調査・報告書担当)

調査第一課調査第二担当

主事 田中 達也(平成21・22年度)

(調査担当)

調査第一課調査第二担当

主事 石貫 弘泰(平成21年度)

主事 橋口 由佳(平成21年度)

【第3次調査】

(調査・報告書担当)

調査第一課調査第二担当

主事 川俣 唱子(平成22年度)

(調査担当)

調査第一課調査第二担当

主事 谷口 めぐみ(平成22年度)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

平山下原遺跡は都農町大字川北字下原・字寺下に所在する。遺跡が立地する都農町は宮崎平野の北端に位置し、町の北西には九州脊梁山脈から続く山々が続き、標高1405mの尾鈴山がそびえ、東は日向灘に面する。町は尾鈴連山から日向灘に向かい傾斜しており、山岳部、山麓部、平野部に大きく分けられる。また、尾鈴連山から流れる名貫川や都農川、心見川等の河川による扇状地がつくられ、その扇状地が開析されることにより、新旧数段の河岸段丘が形成されている。都農町は山麓部や河岸段丘などの上に集落があり、起伏に富んだ地形となっている。

遺跡は都農町の北側を流れる心見川左岸の丘陵上に位置し最高所は標高約109mに位置する(第2図)。

『土地分類基本調査』都農1/50,000によると、本遺跡の土壌は多湿クロボク土壌、表層地形は、新第三紀の火山岩類熔結凝灰岩Ⅱで、尾鈴山酸性岩類の堆積分布となる。地形は山麓の低起伏部で傾斜は3度以上8度未満に位置づけられている。

調査区から北方を望むと谷を挟んで、内野々第4遺跡、内野々第2遺跡を、北側に広がる征矢原の尾根向こうには日向灘を遠望できる。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

都農町における旧石器時代の遺跡は近年まで発掘調査が行われず、その存在は大野寅夫氏採集資料「黒萩」出土の尖頭器や、1987年の分布調査により又猪野原遺跡、京塚遺跡で採集された剥片のみであった。しかし、東九州自動車道建設に伴う発掘調査により本報告書遺跡を始め俵石第1遺跡、尾立第2遺跡、尾立第3遺跡、朝草原遺跡、立野第5遺跡、立野第2遺跡とそれぞれA T下位から上位にかけて、旧石器時代の遺構・遺物が出土し、旧石器時代の様相が明らかになりつつある。

第1図は、平山下原遺跡の南に隣接する東九州自動車道により調査された西ノ郡第2遺跡から出土したものである。1は黒曜石製の細石刃剣である。側面を中

心に縦長剥片素材を剥離させている。2は流紋岩製の搔器で自然面を残す幅広い縦長剥片を素材とし、端部に剥離面を弧状に並列させながら刃部を成形している。

縄文時代

縄文時代になると、遺跡は標高20m以上に立地するようになる。開析谷により形成された河川、台地上に遺跡が立地し、そのほとんどが早期に位置づけられる。集石遺構に用いられる礫はほぼ全て尾鈴山酸性岩類であり、敲石や磨石などにも利用されている。後期の遺跡では新別府下原遺跡から貝殻条痕文土器や磨製石斧等が、新別府川原遺跡では堅穴建物跡が1軒確認されている。また、東九州自動車道の調査においても内野々遺跡では後期と考えられる堅穴建物跡が4軒と縄文土器が伴い検出されたと報告されている。

弥生時代

発掘調査が行われた遺跡には、中期から終末期に新別府下原遺跡、後期後半に境ヶ谷第一遺跡、後期に白水遺跡の集落跡がある。都農町の分布調査においても弥生時代とされる遺跡が複数あり、今後の調査によりこの時代の様相が明らかになるものと考えられる。

古墳時代

都農町では海岸部を中心に県指定古墳が12基あり、前方後円墳が2基、円墳が10基である。12基とも全て積石塚である。積石塚は県内でも珍しく、都農町に集中して築造される。海岸部以外では新別府川原、木戸平、舟川中原に円墳がそれぞれ1基ずつである。

古代～近世

古代以降の遺跡は都農町では確認されていないが、律令制の頃に大宰府から日向国府を結ぶ官道が通り、駅が設けられた。都農町は「去飛」駅に比定されるが、詳細な位置は未だ明らかではない。

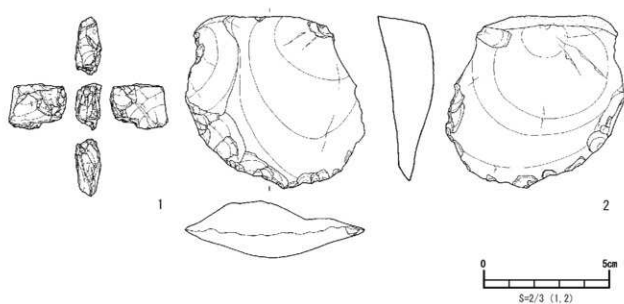
日向国は古来より馬の名産地として知られ、『延喜式』(927年)によると、兵部省に朝廷管轄の官牧を設置した際に、馬牧として日向国都農野という記述がある。

また高鍋藩は1609年に現在の都農町に岩山牧を設けた。都農町岩山には、県指定史跡「旧藩都農牧駒馬追込場跡」がある。岩山牧の面積は五百町歩とされる。現在でも都農小学校の一部に堤の跡があり、町内には

牧内などの地名が残る。

神社仏閣では、日向国の式内社の一つ都農神社があり日向一ノ宮ともいわれる。このように、都農町は奈

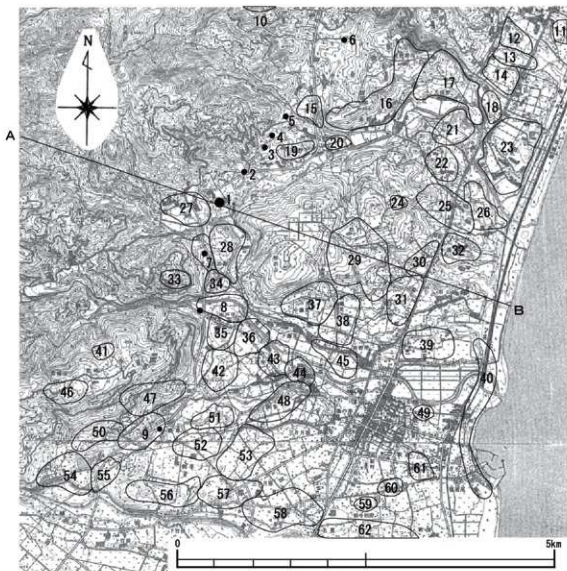
良から江戸時代にかけて、日向国の主要な役割を担った地域である。



第1図 西ノ郡第2遺跡出土遺物

第1表 西ノ郡第2遺跡出土遺物計測表

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	計測				備考
				長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	
1	-	細石刀核	Ob2	2.40	1.40	3.00	9.90	左側面に上部より縦長剥片素材を剥離。一部自然面を残す。
2	-	掻器	Ryu	6.90	7.10	2.30	94.80	幅広剥片素材。上部に自然面を残す。

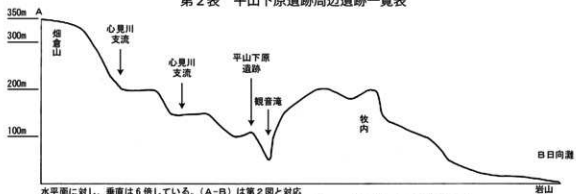


第2図 周辺遺跡分布図

S=1/50,000

1 平山下原遺跡	2 内野々第4遺跡	3 内野々第3遺跡	4 内野々第2遺跡	5 内野々遺跡	6 舟川第2遺跡	7 西ノ郡第2遺跡
8 木戸平第2遺跡	9 磐石第1遺跡	10 舟川立遺跡	11 寺道下原遺跡	12 宮川遺跡	13 山本大原第2遺跡	14 山本大原第1遺跡
15 舟川中原遺跡	16 長野遺跡	17 又塘野原遺跡	18 心見庄上遺跡	19 内野遺跡	20 内野下原遺跡	21 田牧跡第2遺跡
22 田牧跡第1遺跡	23 心見遺跡	24 白石第2遺跡	25 白石第1遺跡	26 上黒部遺跡	27 平山遺跡	28 西ノ郡第1遺跡
29 白水遺跡	30 境ヶ谷第2遺跡	31 境ヶ谷第1遺跡	32 久次平田遺跡	33 井ヶ平遺跡	34 川神田遺跡	35 木戸平第1遺跡
36 上庄生遺跡	37 京塚遺跡	38 黒石遺跡	39 中津遺跡	40 都原古墳跡	41 庄生高立第2遺跡	42 高塚口遺跡
43 鹿谷田遺跡	44 田代原遺跡	45 柳沢田遺跡	46 庄生高立第1遺跡	47 磐石第2遺跡	48 中河原遺跡	49 森遺跡
50 龍立遺跡	51 遠平田遺跡	52 都原原遺跡	53 榎土平遺跡	54 立野遺跡	55 電ヶ平第2遺跡	56 電ヶ平第1遺跡
57 下原遺跡	58 新羽府川原遺跡	59 新羽府遺跡	60 新羽府肥遺跡	61 稲原尾遺跡	62 新羽府下原遺跡	

第2表 平山下原遺跡周辺遺跡一覧表



第3図 平山下原遺跡と周辺地形との高低差 (日向灘から)



*太字は平成22年10月末現在の終了遺跡。

第4図 東九州自動車道(日向～都農間)関連遺跡位置図

第三章 調査の方法と経過

第1節 調査の概要

平山原下遺跡の調査対象面積は18,900㎡を測る。このうち土地の買収が終了した箇所より、平成20年度より都合計3回に分けて調査を実施した。各調査における名称は、平成20年度に実施した調査を第1次調査、平成21年度に実施した調査を第2次調査、平成22年度に実施した調査を第3次調査とそれぞれ呼称した。

第1次・第2次調査は調査対象地の南半分について調査を実施し、第3次調査は北半分を対象に調査を実施した(第5図)。

第2節 発掘調査の経過

第1次調査は平成20年11月に調査を行った。調査にあたって調査区を便宜上1～5区に区分けし、計45箇所のトレンチを設定し、400㎡を対象に調査を実施した。

調査により、削平を受けている箇所があるものの、広い範囲において後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺物包含層が確認され、剥片や石鏃などの石器類が出土した。

また調査区周辺において多数の表採遺物が認められた。

第2次調査は平成21年6月8日から平成22年2月8日までの144日間、面積6,680㎡を対象に調査を行った。調査にあたって、排土置き場の確保等から便宜上調査区を1～5区、2区と4区は更に二つに区分けを行った。よって、調査区を都合計7つに区分けし調査を実施した。調査は2-1区→2-2区→1区→3区→4-1区→4-2区→5区の順に終了した。

調査区は国土座標に準じた10m×10mのグリッドを西から東にA～O、南から北に1～22とした。また、調査中にあたってはこのグリッドを5m×5mに四分割し、小グリッドとした。各グリッドについてはH11GrあるいはH11aGr等と呼ぶこととした。小グリッドは北西角を基準とし、a～dの4分割としている(第5図)。

調査は1区から4-2区では、堆積状況を確認しながら

II層まで重機で除去した。第1次調査で確認した堆積状況より、1区、2-1区、3区、4-2区ではII層下よりIII層を、2-2区、4-1区ではII層下よりIV層を確認した。各調査区ともに、IV層上面で遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。そのためIV層を人力掘削し、V層以下の包含層掘削を行った。

5区は重機の進入ができないため、人力によりII層まで除去した後、IV層及びX層を検出した。

調査の結果、III～IX a層の包含層で遺物が確認された。4-1区では土坑7基、5区ではVI層より礫群3基、集石遺構1基を検出した。

第3次調査は平成22年5月24日から7月26日まで面積910㎡を対象に調査を行った。

調査にあたり現状の道路、河川などから調査区を便宜上A～Dの4つに分け、調査を実施した。

調査は重機でII層(造成土)までを掘削し、その結果からIII層以下が残存している箇所について、III層での遺構検出を行った後に、人力による掘削を行った。

調査の結果、各層において遺構は検出されなかったが、B区にて第3次調査基本層序(第67図)IV層、V層において土器及び石器類の集中箇所が認められた。調査はA→C→D→B区の順に終了した。

なお、第3次調査では当初グリッドを設定していなかった。そのため本報告書作成にあたり、第2次調査区からグリッドを延長し、それを用いて報告を行っている。

各調査において検出された遺構については縮尺を1/10で、土層断面図は縮尺を1/10、または1/20にて図化を行った。

第3節 整理作業の経過

第1次調査および第2次調査の整理作業は、平成22年2月より埋蔵文化財センター内で開始し、水洗、注記、接合、実測、トレースを経て、平成22年12月で終了した。

第3次調査の整理作業は、平成22年8月より埋蔵文化財センター内で開始し、水洗、注記、計測、接合、実測、トレースを経て、平成22年11月で終了した。

第4節 普及活動

県民の埋蔵文化財センター業務への理解や埋蔵文化財への愛着、保護思想の高揚を図るため、平山下原遺跡では、以下のような教育普及活動に取り組んだ。

発掘調査報告会

当センターの事業として毎年行っているもので、前年度に発掘調査を行った遺跡を対象に実施している。

本遺跡では平成22年9月17日に宮崎県立図書館にて行われた「ここまでわかったひむかの歴史2010」において、第1次調査および第2次調査の内容について「狩りと台所」というテーマで、出土した狩猟具や磨石、台石などの石器類、土器から判明した特徴などについて田中が報告を行った。

巡回展

発掘調査報告会と同じく、当センターが毎年行っている事業で、主に遺物の公開や遺跡概要のパネル展示などを行っている。

本遺跡のものについては、宮崎県立図書館にて平成22年9月13日から9月29日までの期間で行った。



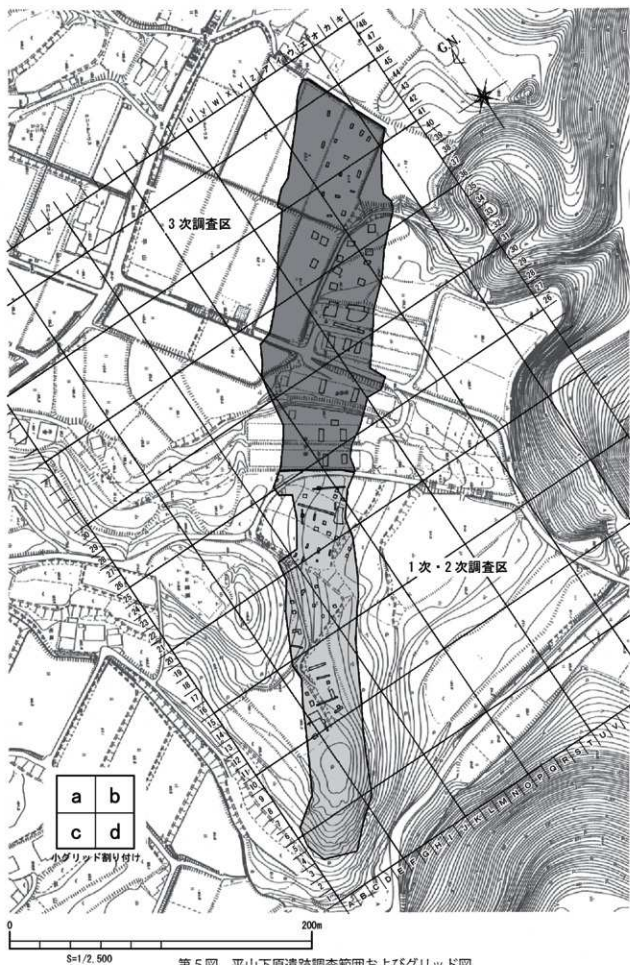
写真1 石器実測作業風景



写真2 トレース作業風景



写真3 レイアウト作業風景



第5図 平山下原遺跡調査範囲およびグリッド図

第四章 第1次・第2次調査の記録

第1節 基本層序

基本層序を設定するにあたり、最も堆積状況の良いJ16aGrの北壁を土層観察用の壁面として利用し、土層は色調や土質によりⅠ～Ⅻまでの層に分層した。各層の詳細は次項に示している。

本遺跡の第1次調査および、第2次調査区の現地形は、近年の造成により畑地や栗林、竹林として利用されていた。しかし、調査の結果より本遺跡の旧地形は、東西に延びる3つの尾根が広がる地形であり、現地形では確認できない尾根の起伏が明らかとなった。また遺跡は尾根から東方向へ下る斜面であり土層の堆積状況は一定ではない状況である。そのため、土層確認を行うためにトレンチを11箇所を設定し（第6図）、土層の堆積状況を確認した。

各層における色調、土質は以下の通りである。

- Ⅰ層：耕作土
- Ⅱ層：造成土
近年の造成土でⅢ層からⅫ層まで様々な土を含む。
- Ⅲ層：黒色土 (Hue7.5YR2/2)
層厚およそ30cmを測る。しまり、粘性ともに弱い。
- Ⅳ層：橙色土 (Hue7.5YR6/8)
鬼界アカホヤ火山灰
層厚は5cmほどで、Ⅲ層及びⅤ層のブロックを含む。
- Ⅴ層：暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
しまりがあり、粒子は細かい。
シルト質土
- Ⅵ層：褐色土 (Hue7.5YR5/6)
しまりはⅤ層よりやや弱く、若干粘質である。
シルト質土
- Ⅶ層：褐色土 (Hue7.5YR3/4)
しまり、粘性がやや強い。白色粒子をごくわずかに含む。1～2mm程度の黄褐色土および2～3mm程度の赤褐色土を粒状に含む。
- Ⅷa層：暗褐色土 (Hue7.5YR4/4)

しまりはあるが、粘性は弱い。5mm程度の橙色ブロックを少量含む。

- Ⅷb層：暗褐色土 (Hue7.5YR4/4)
粘性、しまりはⅧa層と同様。1cm程の軽石を含み、白色および橙色粒子を多く含む。
- Ⅸa層：暗褐色土 (Hue10YR4/6)
しまり、粘性がやや強い。白色および橙色粒子を多く含む。
- Ⅸb層：暗褐色土 (Hue10YR4/6)
しまり、粘性が強い。5mm程度の橙色ブロックを含む。
- Ⅸc層：暗褐色土 (Hue10YR4/6)
しまりはやや強く、粘性は強い。1cm程の軽石を含む。
- X層：明褐色土 (Hue10YR6/8)
しまりはやや強く、粘性は強い。2～3cm程の軽石を含む。
- XI層：橙色土 (Hue10YR7/8)
しまり、粘性ともに強く、3cm～人頭大の尾鈴山酸性岩類を含む。
- XII層：黄褐色土 (Hue10YR7/8)
しまり、粘性ともに強い。5～10cm程の尾鈴山酸性岩類の風化礫を多く含む。
- XIII層：黄褐色土 (Hue10YR8/6)
しまり、粘性が非常に強い。5～10cm程の尾鈴山酸性岩類の風化礫を密に含む。

第2節 遺物包含層の認識

本遺跡の発掘中および発掘直後の層位と遺構・遺物の認識は以下の通りであった。

- Ⅳ層：縄文土器、石鏃、剥片、砕片など。
K-Ah（鬼界アカホヤ火山灰層）で遺跡全体に堆積している。調査区各11Gr以南ほど堆積状況は良好である。L19Gr周辺で土坑3基が検出された。
- Ⅴ層：縄文土器、石鏃、石斧、石核、剥片、砕片など。縄文時代早期相当層で各11Gr以北の全域に堆積する。
- Ⅵ層：縄文土器、石鏃、ナイフ形石器、細石刃、尖頭器、剥片尖頭器、石核、細石刃核、剥片、砕片など。

調査区はほぼ全域に遺物が分布しており、縄文時代早期、後期旧石器時代の遺構・遺物が混在している。

VI層上部より集石遺構1基、および土坑4基、下部より礫群が検出された。

VII層：石核、剥片、砕片など。

1区と2区の北部のみ検出。VI層の漸移層と考えられる。

VII a層～VII b層：細石刃、ナイフ形石器、石核、剥片、砕片など。

VII a層は2区のみで検出した。VII b層の漸移層と考えられる。VII b層は2区～4区で検出され、その範囲は13Grから20Grの範囲に広がる尾根のみ堆積している。

IX a層、IX c層：石核、剥片、砕片など。

IX b層は遺物を含まない。IX a～IX c層ともに遺跡全体に堆積している。

第3表 平山下原遺跡基本層序と遺物包含層

層位名	層名	包含層	一次
I	表土		I
II	達成土		
III	クロボク		II
IV	鬼舞アカホヤ火山灰(K-Ah)		IV
V	暗褐色土	縄文時代早期包含層	V
VI	褐色土	後期旧石器時代～縄文時代早期包含層	VI
VII	褐色土		
VII a	暗褐色土		
VII b	暗褐色土	後期旧石器時代包含層	VII
IX a	暗褐色土		
IX b	暗褐色土		
IX c	暗褐色土		
X	明褐色土		IX
XI	橙色土		
XII	黄橙色土	地山	
XIII	黄褐色土		

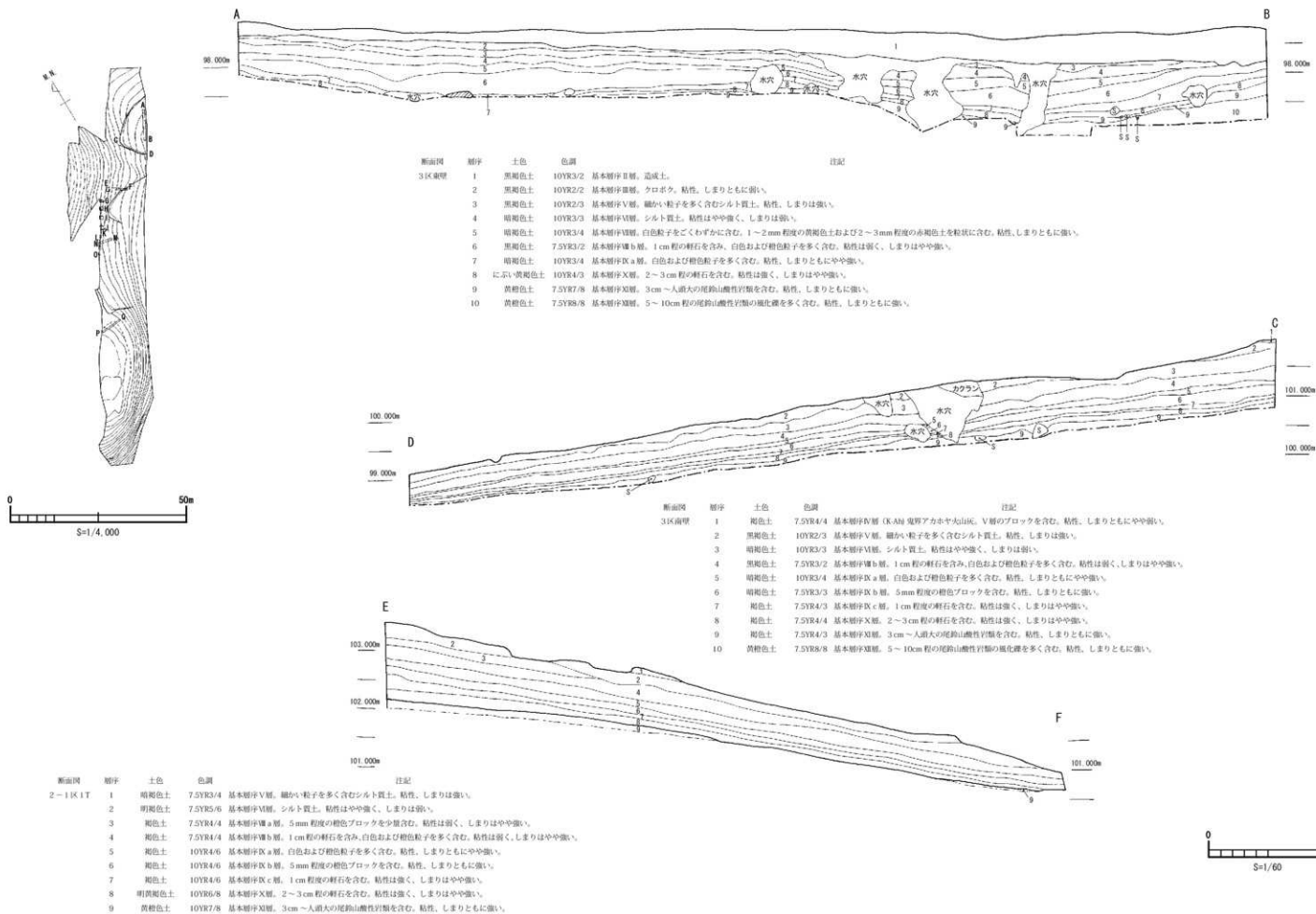
第3節 石材の分類基準

石器石材は色調、稜面の特徴、手触り、風化の状況などを重視し、分類を行った。また遺物平面分布等の検討には第4表に示す石材分類名称を用いた。石材名称に関して、第3次調査はもとより、周辺に立地する内野々第4遺跡と石材名称が異なることを極力避けて分類を行った。

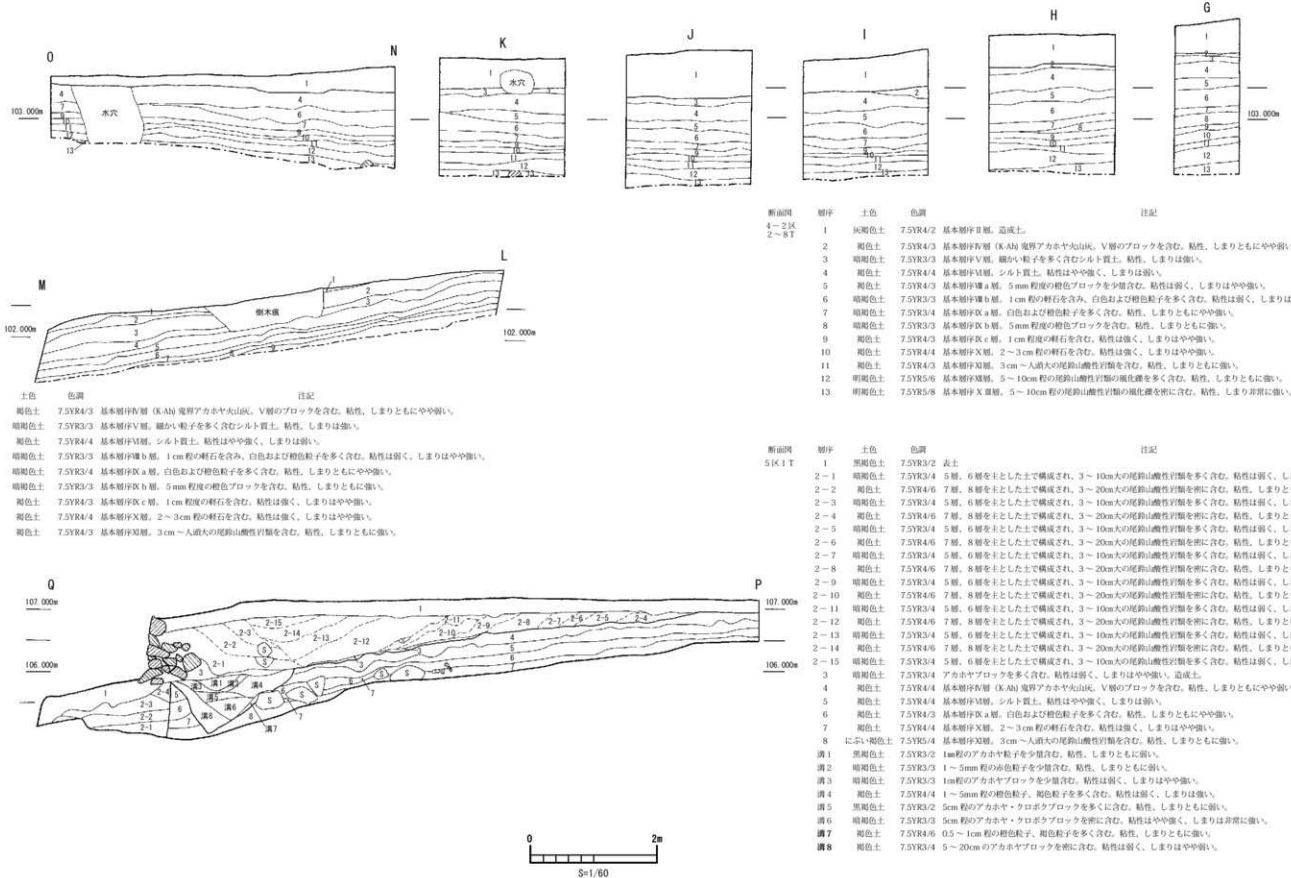
黒曜石は肉眼により観察される特徴を元に黒曜石産地分類を行った。分類の結果、黒曜石I類は人吉桑ノ木津留産、黒曜石II類は大口日東産、黒曜石III類は樋脇上牛鼻産、黒曜石IV類は腰岳産、黒曜石V類は針尾産、黒曜石VI類は姫島産とした。その他、産地不明なものはVII類とした。

第4表 石器石材分類表

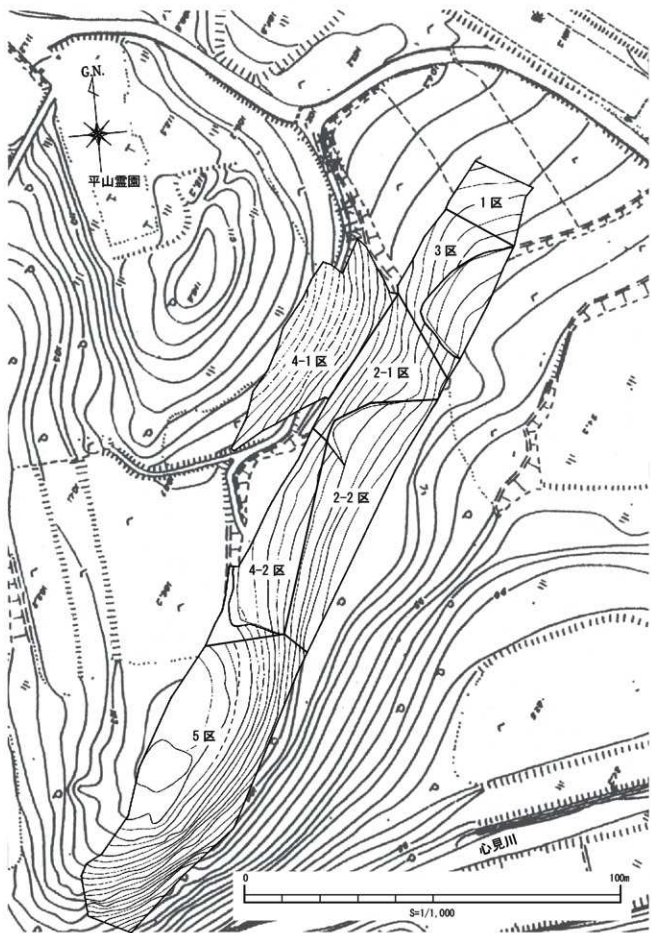
石材名	小分類	略称	石器石材の特徴
流紋岩	—	Ryu	白色に風化し、流線構造が観察されるものもある。風化にはツヤがあるもの、粉を吹くものがある。
珩質頁岩	—	SH	黒灰色を中心とし、薄い層状に剥離する。ホルンフェルス化したものは層状の剥離をしないものもある。
ホルンフェルス	—	Hol	風化面は黄色をし、粉を吹いたかのような状態となる。風化すると同様に剥離する傾向が強い。
チャート	—	Ch	青色、白色、赤色などバリエーションがある。表面には光沢を持つものもあり、薄く剥離したものは半透明となる。
砂岩	—	Sn	青灰色や灰色を呈する。硬質緻密で重量がある。稜面は滑らかなものが多く、形状は楕円あるいは円形の塊。
水晶	—	Cry	無色のもの、不純物を含み、やや黄色がかったものもある。
安山岩	I類	An1	手触りがザラザラとする。やや風化している。
	II類	An2	剥離した面は薄く半透明になる。【姫島産】
	III類	An3	ザラザラとした手触りがある。薄く灰白色に風化している。無珩質安山岩。
尾鈴山酸性岩類	—	Os	新鮮面は灰白色を呈し、白色あるいは黄色に風化する。良質なものには緻密で稜面は滑らかである。良質でないものは、脆く崩れやすく、稜面はごつごつしている。
ガラス質溶結凝灰岩	—	Aso-Tu	剥離面は透過性のない黒曜石に類似しているが、全体的に風化が激しく進行しているため、表面がザラザラとしている。【阿蘇象ヶ鼻産】
黒曜石	I類	Ob1	透過性が高く、暗色を呈する。わずかに白色の不純物や気泡を含むものもある。稜面は鮫肌状にザラザラするものと、研磨されたように滑らかなものがある。【人吉桑ノ木津留産】
	II類	Ob2	黒色で透過性が低いもの、黄白色の不純物を多く含む、薄い剥片状のものも透過性を持つ。【大口日東産】
	III類	Ob3	前面が風化し、光沢がない。新鮮面は透過性のない黒灰色。【樋脇上牛鼻産】
	IV類	Ob4	透過性が低いもの。【腰岳産】
	V類	Ob5	透過性が全くなく、光沢もない。【針尾産】
	VI類	Ob6	乳白色を呈し、1mm以下の赤い粒子が認められるもの。【姫島産】
	VII類	Ob7	黒褐色で透過性が低いもの。不純物を含まれず、薄い薄片状のものは透過性を持つ。【産地不明】



第6図 土層断面図(1)



第7図 土層断面図(2)



第8図 第2次調査区調査範囲

第4節 調査の概要と遺物

1. 第1次調査の概要と遺物

本遺跡の第1次調査は、第5図のようにトレンチを45箇所に設定し実施した。

第1次調査は、調査対象地の南側について調査を実施した。調査は2m×2mを基本としたトレンチをT1～T45までの計45箇所に設定した。調査は調査区の現況から、道路や畑の単位で便宜上1区から5区に分けし調査を実施した。

1区は調査区の西側に位置し、西から東へ下る斜面地を畑地として利用していた。1区の堆積状況は南側ほど堆積が良好で、K-Ahが残存していた。遺物はVI層中より剥片・砕片が出土した。

2区は1区より続く斜面地を利用した栗林である。調査中も栗の木が残っていたため、その木を避けてトレンチを設定し調査を実施した。2区の堆積状況は良好であり、III層からVIII層にかけての包含層中より、石核や剥片、砕片が出土した。

3区は畑地である。畑地の東半分が調査対象地であり、畑周辺では剥片や赤化礫など多数の遺物を表採された。第1次調査において最も良好な堆積であり、IV層上面やVI層中より多数の剥片や砕片が出土した。

4区は畑地であるが、東側の竹林から伸びる竹根があり、重機による表土除去が困難であった。堆積は北西側で削平を受けていたが、南側はIV層以下の堆積が残存しており、剥片や砕片を中心とした石器類が出土した。

5区は畑地である。この畑地は緩やかな斜面地にある。堆積状況は、調査区北西側では削平を受けており、X層以下の堆積が表土下で確認できる箇所が多いが、南側においてはIV層からVI層が良好な状態で確認でき、剥片・砕片が出土した。

遺物（第10図3～13、第11図14～17）

第1次調査において出土した遺物は以下の通りである。第1次調査では縄文土器片も出土しているが、小片で風化が激しいため、今回は第1次調査で出土した石器のみを報告する。

石鏃（第10図3）

3はチャート製の石鏃である。縦長剥片を素材と

し、両辺および端部を調整し、刃部を成形している。

二次加工剥片（第10図4）

4はチャート製の二次加工剥片である。横長剥片を素材とし、微細な剥離面を繰り返して成形している。

削器（第10図5～6）

5は流紋岩製の削器で縦長剥片を素材とし、その両辺に背面から細かい剥離を連続させて刃部を成形している。6は硅質頁岩製の削器である。幅広い縦長剥片を折り取り、その両辺に細かい剥離を背面より連続させ刃部を成形している。

剥片（第10図7～12）

7～12は剥片である。7、9は流紋岩製の縦長剥片で、8はチャート製の縦長剥片である。10は尾鈴山酸性岩類製の縦長剥片で、両面に剥離面が残る。11、12は流紋岩製の横長剥片で、11は石刃、12は搔器の未製品と考えられる。

石核（第10図13）

13は黒曜石製の石核である。両辺に微細な剥離面が観察できる。

磨石（第11図14、17）

14は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。表面のみに磨面が観察できる。17は尾鈴山酸性岩類製の磨石で、表面に磨面が観察できる。

凹石（第11図15）

15は尾鈴山酸性岩類製の凹石で表面中央が敲打痕により窪んでいる様子が観察できる。

台石（第11図16）

16は尾鈴山酸性岩類製の台石で、表面に磨面が観察できる。

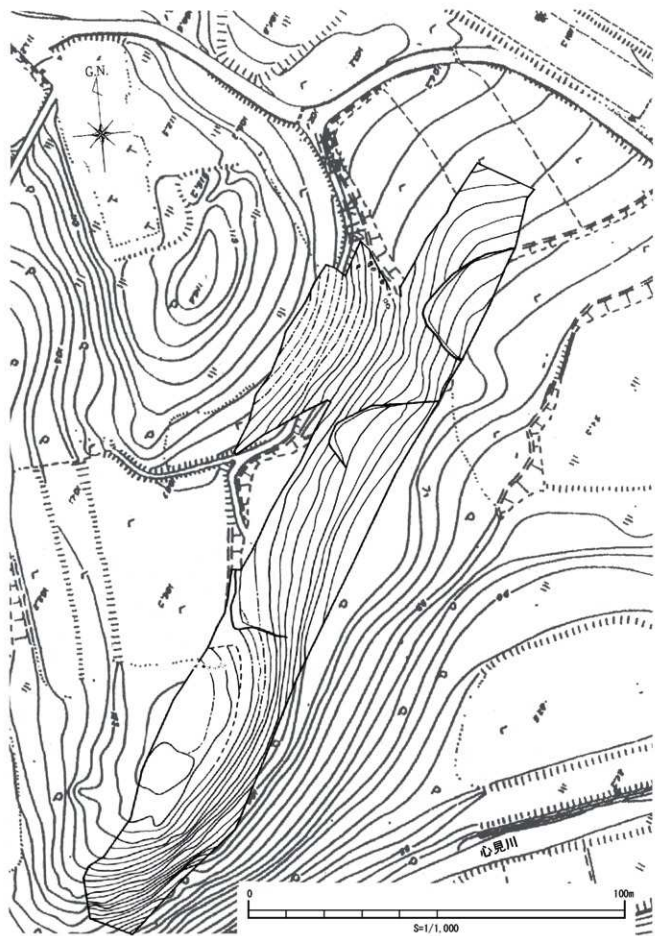
第1次調査と第2次調査の重複箇所は以下の通りである。

第1次調査1区→第2次調査4-1区西側。

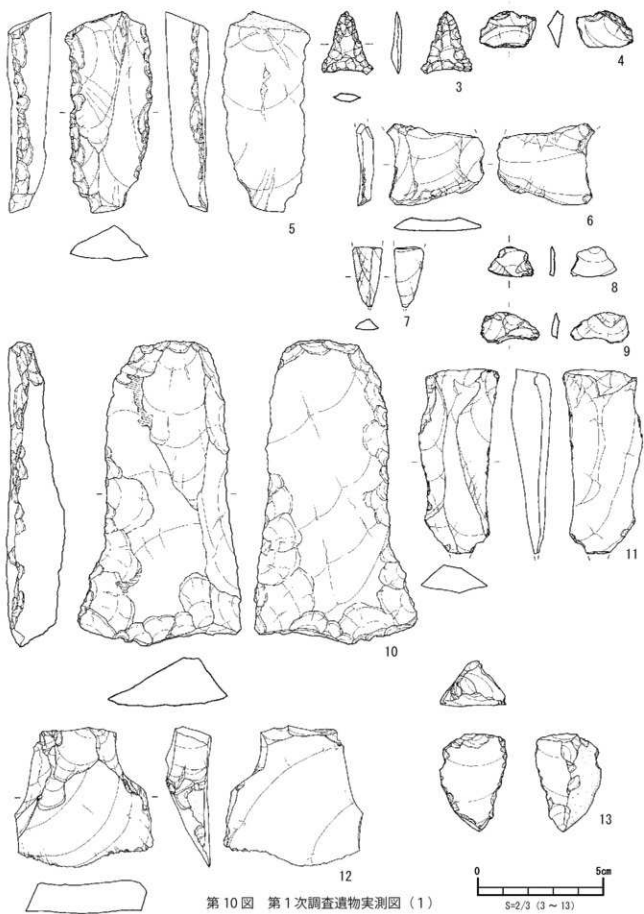
第1次調査2区→第2次調査2-2区、4-1区東側。

第1次調査4区→第2次調査4-2区。

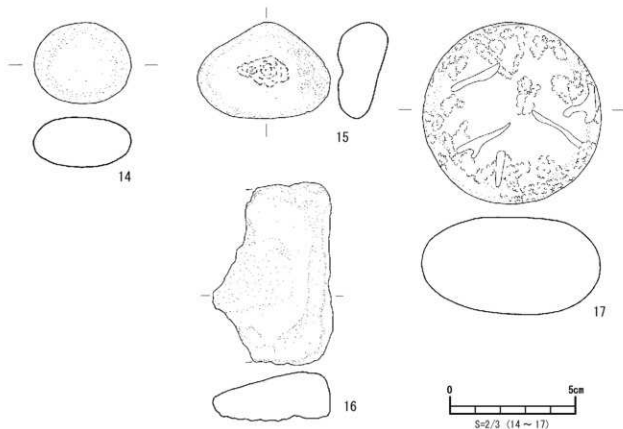
第1次調査5区→第2次調査1区。



第9図 平山下原遺跡遺構全体図



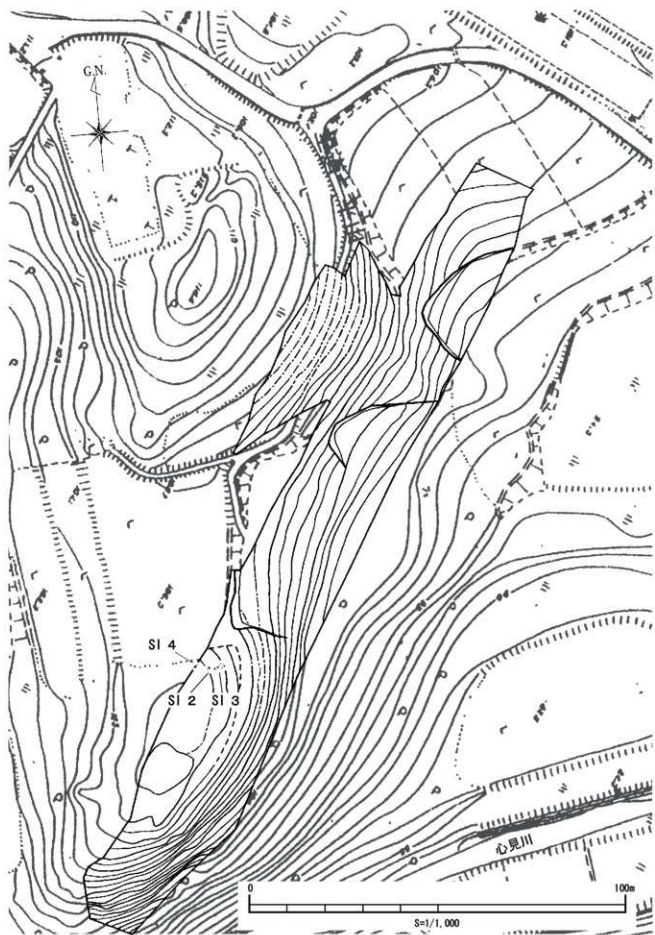
第10圖 第1次調査遺物実測図(1)



第 11 図 第 1 次調査遺物実測図 (2)

第 5 表 第 1 次調査遺物計測表

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
3	-	石眼	Ch	1.70	1.40	0.30	0.50	縦長剥片素材。二等辺三角形。
4	-	二次加工剥片	Ch	1.40	2.30	0.70	1.60	横長剥片素材。下部に二次加工痕。
5	-	削器	Ryu	8.00	3.50	1.80	47.20	縦長剥片素材。左右に刃部調整。
6	-	削器	SH	3.20	3.90	0.70	7.90	縦長剥片素材。左右に刃部調整。
7	-	剥片	Ryu	1.40	1.20	0.40	1.20	縦長剥片。
8	-	剥片	Ch	1.20	1.80	0.20	0.45	縦長剥片。
9	-	剥片	Ryu	1.30	2.30	0.30	0.70	縦長剥片。
10	-	剥片	Os	12.20	6.50	2.40	141.80	縦長剥片。
11	-	剥片	Ryu	7.30	3.20	1.60	29.50	横長剥片。
12	-	剥片	Ryu	5.60	5.60	1.80	48.50	横長剥片素材。削器未製品。
13	-	石核	Ob3	3.90	2.60	1.80	17.60	上部に打点。縦長剥片素材を取ったとみられる。一部自然面を残す。
14	-	磨石	Os	3.25	3.85	2.00	37.40	表面に磨面。
15	-	凹石	Os	7.70	10.50	4.00	370.60	表面に敲打痕あり。敲打痕以外は自然面を残す。
16	-	台石	Os	19.30	12.85	5.20	1771.00	表面に使用面あり。左部は欠損。
17	-	磨石	Sn	7.20	7.10	3.90	282.00	表面に磨面。



第 12 図 後期旧石器時代遺構分布図

2. 第2次調査の概要

第2次調査は、第1次調査と調査範囲が重複する6,680㎡を対象に調査を行った。調査区は大きく7つの区に分けて調査を行った。それぞれの調査前の現況は以下の通りである。

1区の現況は畑地で第1次調査の5区と重複する。表土下はⅡ層造成土があり、Ⅲ層クロボクおよびⅣ層アカホヤ火山灰が互層状に盛られている。堆積は西から東の低地部分を造成する状況が確認された。Ⅱ層下層からはⅢ層以下の堆積が確認されたが、調査区北側に関しては削平を受けており、Ⅵ層が確認された。

2-1区は第1次調査2区と重複する。現況は栗林が伐採され、草が茂った状況である。2-1区はⅢ層以下の堆積が良好に残存していた。

2-2区は2-1区東側に位置する。現況は段々畑で上部は削平を受けており、南側はⅪ層が露出する状況であった。調査区西側に関しては、Ⅲ層以下の残存が認められた。北側は民家跡地でⅩⅢ層まで削平を受けており、堆積は非常に悪く、直径2m程の水穴が数箇所確認された。

3区の現況は畑地および民家跡地で畑地部分はⅢ層以下の堆積が確認された。しかし、民家部分は2-2区同様に削平をうけ、東側にはⅧb層を確認したが、西側はⅩⅢ層まで削平を受けている状況であった。1区と3区の境界付近には2-2区同様の水穴が2箇所確認された。

4-1区は第1次調査1区および2区と重複する。現況は草地である。南側程堆積状況が良く、北西側はⅨa層まで削平を受けている状況であった。その他の部分はⅣ層以下の堆積を確認した。調査区北東側で土坑7基が確認された。

4-2区は第1次調査4区と重複し、現況は畑地であった。南西側で一部削平を受けⅨa層が検出されたが、その他の部分についてはⅢ層およびⅣ層以下の堆積を確認した。

5区は調査区南に位置し、現況は休耕地および杉林であった。北側はⅩ層まで削平し、平坦面になっていた。また削平時に平坦な畑地を造成しており、削平土を盛土として利用している状況が確認された。

盛土は部分的に2mを越えており、土留めとして石

垣が作られていた。調査区北側は盛土下よりⅣ層以下の堆積を確認した。またⅥ層からは集石遺構1基と礫群3基が検出された。

第5節 後期旧石器時代の遺構と遺物

1. 概要

Ⅵ層以下の調査は、グリッドを5m×5mの小グリッドとし、この小グリッドごとでの掘削を中心として実施した。

遺物としては遺跡全域より製品を含む石器類が出土している。しかし、石核や剥片を中心とした遺物がほとんどであるが、接合される遺物は数点にとどまっている状況であった。出土した遺物に関してはトランシットを使用した点上げを行った。

2. Ⅸa層出土遺物の概要と分布状況(第13図)

Ⅸa層の分布は、ほぼ全域に広がるが、多くは4-2区から5区にかけての範囲に集中する。この部分より出土した石器の多くは剥片・砕片である。

Ⅸa層以下の堆積であるⅨb層、Ⅸc層などから数点の石器が確認されたが、Ⅸb層、Ⅸc層ともに石器が確認された箇所は上部から水穴がとおり、本来は上層にあった遺物が混入したと考えられる。このことからⅨa層が本遺跡における遺物包含層の最下層に位置付けられる。

Ⅸa層礫分布(第13図)

Ⅸa層より出土した礫の分布は、Ⅵ層同様にF12GrからG11Grの範囲に集中がみられる。しかし、他のグリッドでは石器ほどの分布はみられない。Ⅸa層から出土する礫は集中する箇所はあるが、礫群として認定できるものはなかった。

Ⅸa層石器

ナイフ形石器(第14図18)

18は流紋岩製の縦長剥片を利用した基部加工である。加工は基部の両側縁に背面から細かな剥離が施されている。背面構成はボジ面となる。刃部の上端部に細かな剥離がみられる。

石核 (第14図19)

19は水晶製の石核である。水晶製の製品は出土していないが、この石核を含め砕片が数点出土している。

剥片 (第14図20～23)

20はチャートの横長剥片である。21は尾鈴山酸性岩類の縦長剥片、22、23は硅質頁岩の縦長剥片である。

敲石 (第14図24)

24は砂岩製の敲石である。下部は欠損しているが、上端部には敲打痕が残る。また、右側縁には複数の剥離があり、敲石と利用していたものを石核として転用した可能性がある。

台石 (第14図25～26)

25、26は尾鈴山酸性岩類の台石である。25は欠損しているが、右半面に磨面がある。また左面には複数の剥離がみられる。よって台石として利用したものを石核として転用したとみられる。

26は裏表面の両面に敲打痕が残る。表面は大きな敲打痕が多い半面、裏面は小規模な敲打痕が多くあり、使い分けをしたとみられる。

3. VII a 層・VII b 層出土遺物の概要と分布状況 (第15図)

VII a 層より出土した石器は同層が確認された4-1区から2-1区にかけての斜面に集中している。この部分より出土した石器は剥片・砕片のみである。2-1区では数点規模の集中箇所がみられる。

VII a 層の石器は少なく、堆積状況からVII b 層の漸移層と考えられる。VII b 層はVII a 層と比べると堆積を確認できる範囲が広く、石器の分布も広がる傾向が見られる。特に集中がみられるのは4-2区北側で、堆積状況よりVII b 層の堆積する尾根の谷部がある部分である。

VII b 層より出土した石器には細石刃と、ナイフ形石器がともに出土しているが、層の上下など明確な区別がつかない状況での出土であった。しかし、VII b 層の主体としては細石刃よりもナイフ形石器にあると考えられる。

掲載の順番に関しては古相から新相に向かうように掲載している。なお、剥片などは区別がつかないため、一括して掲載している。

VII b 層礫分布 (第16図)

VII b 層より出土した礫と石器の分布は重なるが、IX a 層に比べ極端にその総数は減少する。尾鈴山酸性岩類の石器出土数もこの層では減少しており、全体的にその使用

量は低下しているものと思われる。また、この層の礫出土数は少なく、集中もみられないことから礫群として認定できるものはなかった。

VII a 層遺物

剥片 (第17図27)

27はVII a 層から出土した硅質頁岩製の横長剥片である。

VII b 層遺物

細石刃 (第17図28～30)

28～30は細石刃である。28は流紋岩製で上辺、下辺が並行しており折り取られたものとみられる。29は黒曜石製で上辺、下辺が折り取られている。30はチャート製で他の2つに比べ大きい細石刃である。上端部には打面が残っているが、下端部は折り取られている。

ナイフ形石器 (第17図31～33)

31～33はナイフ形石器である。31は硅質頁岩製で縦長剥片を利用した基部加工である。加工は基部を中心に背面から剥離が施され、刃部は加工されていない。

32は流紋岩製で横長剥片を利用している二側縁加工である。基部および右側縁に背面から剥離され、刃部は未加工である。

33はチャート製で縦長剥片を利用した二側縁加工のナイフである。基部および右側縁に剥離が施されている。

二次加工剥片 (第17図34)

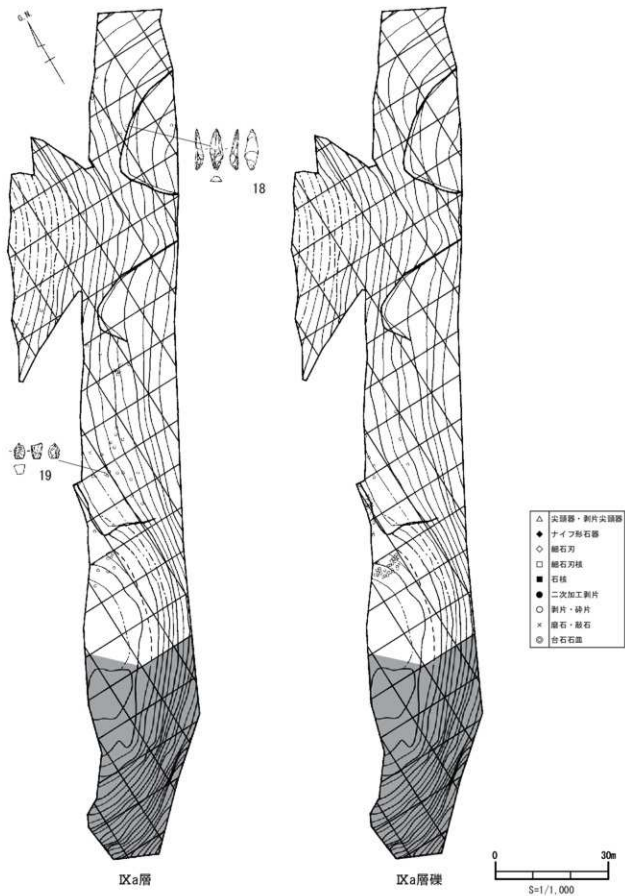
34は縦長剥片を利用した硅質頁岩製の二次加工剥片である。右側縁に剥離が施されている。

剥片 (第17図35～41)

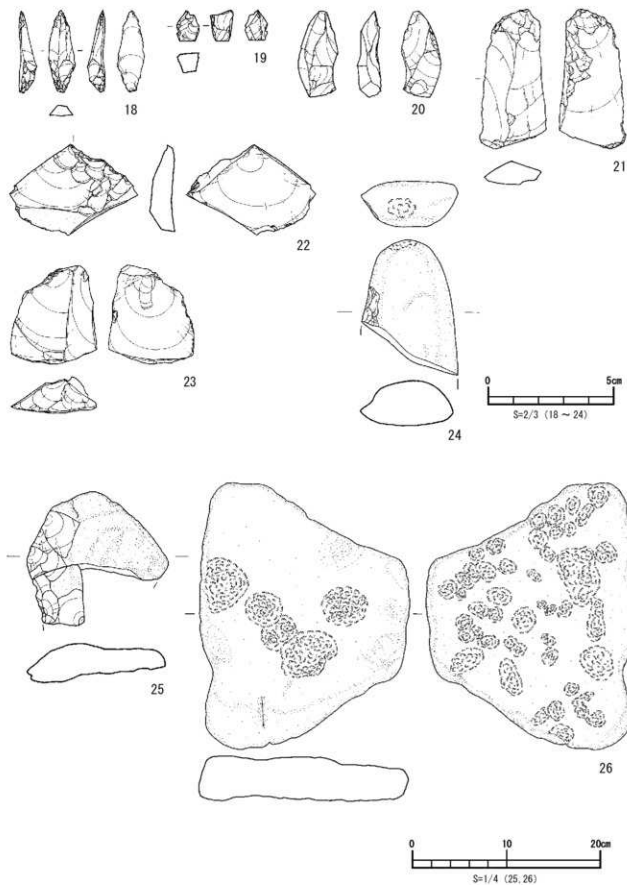
35～41は剥片である。石材をみると35、36は流紋岩製、37～40は硅質頁岩製、41は尾鈴山酸性岩類製である。剥片はいずれも縦長剥片である。

石核 (第18図42)

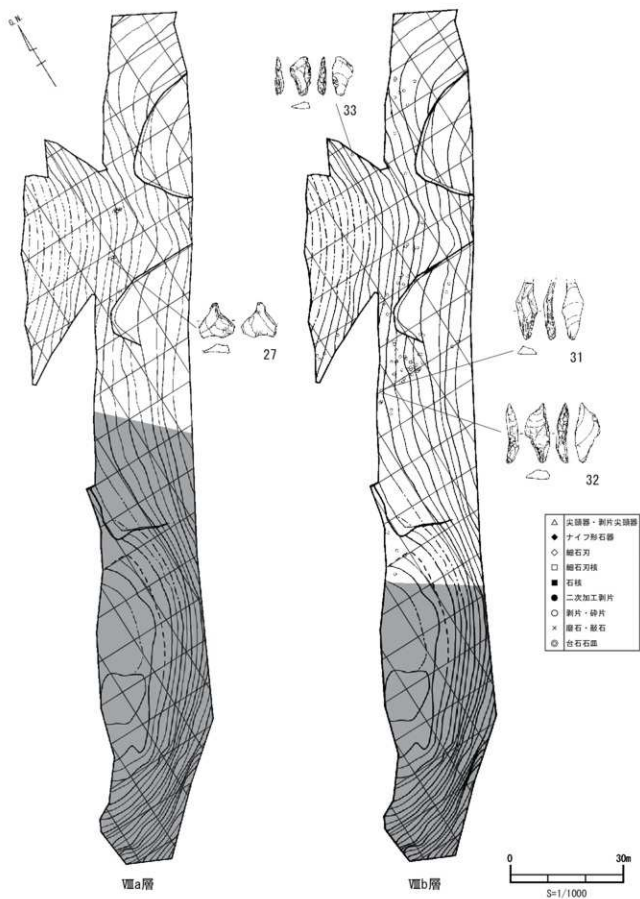
42は尾鈴山酸性岩類の石核である。右側面、下部に自然面を残す。



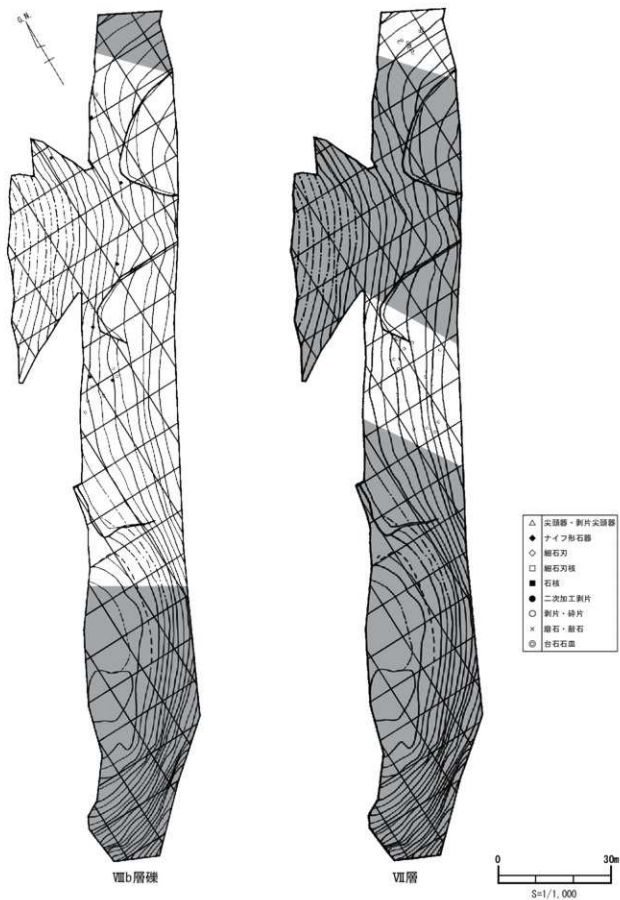
第13図 第2次調査IXa層・IXa層礫分布図



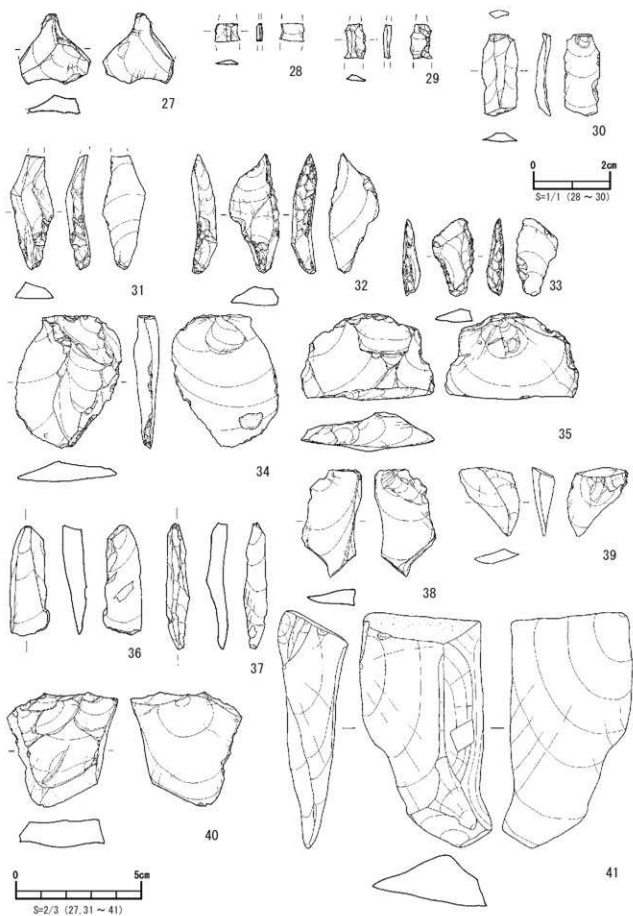
第 14 図 第 2 次調査 IX a 層遺物実測図



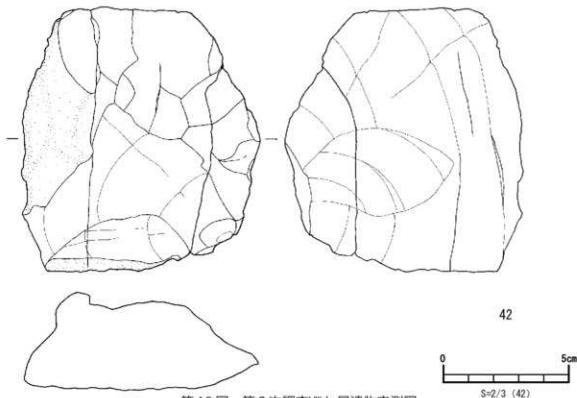
第 15 図 第 2 次調査 VII a 層・VII b 層遺物分布図



第 16 図 第 2 次調査 VII b 層様・VII 層分布図



第17図 第2次調査VII a層・VII b層遺物実測図



第18図 第2次調査VIIb層遺物実測図

第6表 IX a層・VII a層・VII b層遺物計測表

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長		厚	重	備考
				(cm)	(cm)			
18	959	ナイフ形石器	Ryu	3.30	1.10	0.70	1.40	縦長剥片素材。基部加工。
19	1260	石核	Cry	1.20	0.90	0.90	0.90	縦長剥片素材を剥離。
20	1570	剥片	Ch	3.50	1.50	0.95	4.40	幅広剥片。
21	943	剥片	Os	5.60	2.70	1.00	14.70	縦長剥片。
22	955	剥片	SH	3.60	5.10	1.10	15.90	幅広剥片。
23	1281	剥片	SH	3.90	3.40	1.50	16.30	縦長剥片。
24	1484	敲石	Sn	5.40	3.90	1.80	48.20	上部。側面に敲打痕。
25	1256+1264	台石	Os	10.60	11.30	3.10	307.60	上部に磨面。左側面に剥離痕。
26	1195	台石	Os	28.50	22.20	5.30	5000.00	裏面に敲打痕。
27	243	剥片	SH	2.80	2.80	0.80	3.90	横長剥片。
28	194	細石刃	Ryu	0.60	0.90	0.10	0.20	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
29	207	細石刃	Ob1	0.90	0.60	0.20	0.13	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
30	1499	細石刃	Ch	2.20	1.00	0.40	0.69	縦長剥片素材。上部に打点を残す。
31	1160	ナイフ形石器	SH	4.60	1.70	1.00	4.80	縦長剥片素材。基部加工のみ。
32	1077	ナイフ形石器	Ryu	4.80	2.00	1.00	6.50	横長剥片素材。二側縁加工。
33	1343	ナイフ形石器	Ch	3.10	1.70	0.70	2.90	縦長剥片素材。二側縁加工。
34	954	二次加工剥片	SH	5.30	4.20	1.00	17.90	縦長剥片素材。
35	197	剥片	Ryu	3.40	5.30	1.60	24.90	横長剥片。
36	1502	剥片	Ryu	4.40	1.60	1.00	6.70	縦長剥片。
37	221	剥片	SH	5.10	1.00	0.80	3.40	縦長剥片。
38	1024	剥片	SH	4.30	2.50	1.00	7.20	縦長剥片。
39	1498	剥片	SH	3.70	2.40	0.60	3.40	縦長剥片。
40	1115	剥片	SH	4.50	4.50	1.30	23.20	縦長剥片。
41	538	剥片	Os	9.40	5.20	2.80	105.60	縦長剥片。
42	196	石核	Os	10.60	9.40	3.90	391.30	縦長剥片素材を剥離。一部自然面を残す。

4. VII層出土遺物の概要と分布状況(第16図)

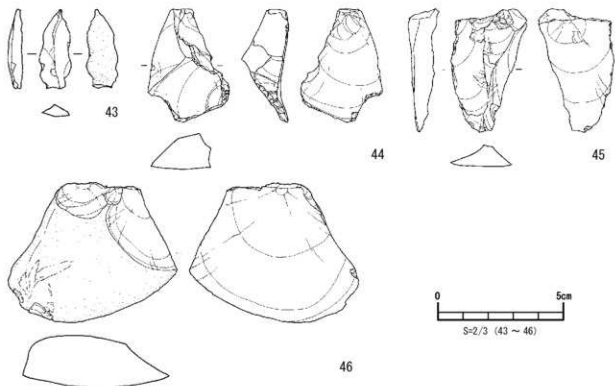
VII層より出土した遺物は剥片・砕片のみである。その分布はVII層が検出された1区と2-2区に限られる。1区では数量的には少ないながらも剥片・砕片の集中がみられる。

土層の色調、土質を比較するとVI層の漸移層と考えられることから、遺物においてもVI層由来の遺物と考えられる。

剥片(第19図43~46)

VII層より出土した遺物は剥片のみである。石材をみると43、44は流紋岩、45、46は硅質頁岩である。

43は裏面に自然面を残している。44は右側縁に細かな剥離があり、二次加工剥片とみられる。45は縦長剥片である。左側縁には細かな調整の剥離があり、二次加工剥片とみられる。46は礫面を残す剥片であり、石核からの調整剥離とみられる。



第19図 第2次調査VII層遺物実測図

第7表 VII層遺物計測表

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
43	54	剥片	Ryu	3.20	1.30	0.60	2.10	縦長剥片。背面に自然面を残す。
44	59	剥片	Ryu	4.50	3.30	1.90	14.00	縦長剥片。
45	193	剥片	SH	4.90	3.50	1.20	11.50	縦長剥片。
46	150	剥片	SH	5.60	6.80	2.50	83.80	縦長剥片。一部自然面を残す。

5. VI層出土遺構・遺物の概要

VI層は後期旧石器時代の石器と縄文土器片や石鏃が出土することから後期旧石器時代および縄文時代早期の包含層として認識しているが、堆積層としての明確な区別ができず、後期旧石器時代の石器類が縄文時代早期の遺物と混在する状況となっている。

VI層より検出された遺構は礫群が3基あり、ほぼ一箇所から集中して検出された。礫群は調査区南側のF9グリッドを中心とした範囲で礫群を3基検出した(第20図)。また後述する集石遺構S11がS12の西側で検出されたが、集石遺構とレベル差があり、VI層上部より検出したS11を集石遺構、VI層下部より検出したものを礫群として認定している。

礫群

S12 (第21図)

調査区南側のF9aGrからF9cGrの境より検出された。掘り込みは認められない。径1.0mの範囲内に収まり、構成礫の個体数は21個で、大きさは概ね長さ10cm、幅6cm前後の礫が多い。全て尾鈴山酸性岩類で構成されている。

接合状況を見ると、S12はS11や周辺から検出された赤化礫と接合するものが3個体あり、接合点数は3点となっている。

S13 (第21図)

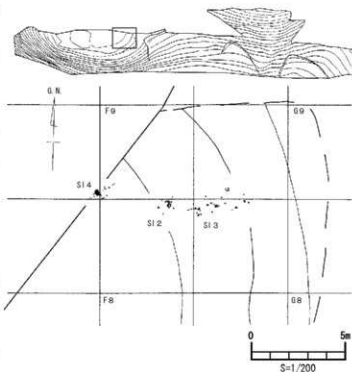
S12の東側F9bGrからF9dGrの境より検出された。掘り込みは認められない。この礫群は本遺跡の中では、範囲は最も広く、径3.2m×1.4mとなる。構成礫の個体数は23個で、大きさは概ね長さ15cm、幅10cm前後の礫が多い。またS12同様全て尾鈴山酸性岩類で構成されている。

S13では接合される礫はなく、周辺の赤化礫なども接合するものがなかった。

S14 (第21図)

S12の西側のE9bGrからF9aGrの境より検出された。掘り込みは認められない。径1.0mの範囲内で収まる。構成礫の個体数は43個で、大きさは概ね長さ10cm、幅5cm前後の礫が多い。全て尾鈴山酸性岩類で構成されている。

接合状況では、18点が接合して1つの礫となった。しかし礫群のみならず周辺の礫なども接合を試みたが、接合はS14内の礫のみであった。このことからS14は一つの礫を割り、礫群の礫として利用していると考えられる。



第20図 礫群分布図 (SI 2～SI 4)

VI層礫分布 (第25図)

VI層より出土した礫は尾鈴山酸性岩類を主体とし、その分布は同石材の石核・剥片とはほぼ一致する分布となっている。同石材では、5区において礫群との接合がみられた他は、数点の接合がみられるのみである。この分布から特に集中する箇所として流紋岩や珪質頁岩などと同様にF12GrからG11Grの範囲に多く集中する。

この周辺には後期旧石器時代の礫群や、後述する縄文時代早期の集石遺構などの尾鈴山酸性岩類を主体とする遺構があり、遺構の礫と接合する礫も含まれることから関連性は極めて高いと考えられる。しかし、これらの礫については出土状況から礫群として認定できるものは上記の3基のみであった。

またF12Gr周辺では、調査区西側の調査範囲外より赤化礫などが多数表採される。この部分は第1次調査の3区であり、調査時の結果では堆積が良好に残存しており、

第2次調査では調査範囲外であったが周辺の赤化礫や遺物の密度から遺構が存在する可能性が高いと考えられる。

VI層の遺物分布状況

VI層の旧石器は1区から5区までの広い範囲に分布し、全包含層中最も遺物出土数の多い層である。遺物の詳細をみるため、石材別の分布図を用いて考察を行った。石器は細石刃やナイフ形石器、スクレイパー、石核、剥片、破片等が出土している。

石材別の分布は以下の通りである。

流紋岩 (第22図)

流紋岩はほぼ全ての範囲より出土するが、1区、3区、4-2区に集中している。特に4-2区西側では石核や剥片、破片の集中が認められる。製品としては細石刃やナイフ形石器、角錐状石器などが出土している。

硅質頁岩 (第22図)

硅質頁岩は流紋岩よりも広範囲になり、1区から5区にかけての全ての区で出土が確認されている。特に集中が見られるのは1区、4-2区である。1区の集中箇所では、石核は集中箇所より若干離れて存在し、剥片や破片が同一箇所に集中する状況で検出された。4-2区の集中箇所では流紋岩同様に石核と剥片、破片が同一箇所より出土している。製品としては、細石刃やナイフ形石器などが出土している。

ホルンフェルス (第23図)

ホルンフェルスは数量的に少ないが、流紋岩、硅質頁岩とほぼ同一の分布を示す。出土傾向では1区、3区では剥片、破片のみ出土し、4-2区では石核と剥片、破片が同一箇所より出土している。

製品としては剥片尖頭器が出土している。

黒曜石 (第23図)

VI層から出土する黒曜石は比較的数量が少ない。分布に関しては、1区、3区からの出土数が多いが、上記の石材のような集中箇所はなく全域にまばらに拡散している傾向がある。剥片や破片が多いが、製品としては細石刃やナイフ形石器、細石刃核が出土している。

チャート (第24図)

チャートの分布は1区、3区、4-2区からの出土に限定される。出土傾向は黒曜石よりも集中する傾向があり、4-2区に多く出土している。剥片や破片が多いが、製品としては細石刃が出土している。

尾鈴山酸性岩類 (第24図)

尾鈴山酸性岩類の分布は4-2区からの出土が大部分を占める。分布域はホルンフェルスと酷似している。出土遺物としては剥片や破片もあるが、石核が多く出土している特徴がある。また台石や破石も出土しており、台石に関しては本遺跡で出土した台石全てが尾鈴山酸性岩類に分類される。風化するのと脆い石材だが、その利用度は高いものと考えられる。

砂岩・水晶 (第25図)

砂岩や水晶は全体的な出土数が少ない。水晶は破片がほとんどで製品は出土していない。しかし、砂岩については剥片尖頭器や削器などの製品が出土している。

VI層の出土遺物

第26図～第35図は、VI層より出土した石器である。VI層から出土した石器は前述しているとおり、縄文時代早期と後期旧石器時代の遺物が混在しており、分層による両時代の区別がつかない状況である。

よって報告する石器は主にVI層下部より出土した石器を中心に報告を行う。

VI層ではⅧb層と同様に細石刃とナイフ形石器が同一の層から出土している。細石刃については縄文時代に属するものか後期旧石器時代に属するものかの区別ができないため、出現期である後期旧石器時代の石器として掲載する。また、掲載の順番はレベル差や出土状況から区別が出来ないため、新相から古相にかけての順で、スクレイパーや石核、剥片などは一括して報告した。

細石刃 (第26図47～63)

47～63は細石刃である。55、56は上端に打点を残すが、それ以外の細石刃については上端に打点を残さないこと、上辺と下辺が並行していることから、上部および下部を折り取られたものとみられる。

石材で見ると47、51、53、54、58、61、62は流紋岩製、48、49、50、52、56、59、60、63は黒曜石製、55は砂岩製、57は硅質頁岩製となっている。石材ごとの細石刃に大きさの差はなく、ほぼ平均した大きさと製作されている。

細石刃核 (第26図64)

64は黒曜石製の細石刃核で、一部に自然面を残す。表面には複数回の細石刃剥離作業面があり、細かく連続的に剥ぎ取られた痕跡が残る。

ナイフ形石器 (第26図65～71)

65～71はナイフ形石器で、縦長剥片を利用し、二側縁加工のものである。65、67は基部と左側縁部を加工し、刃部には調整の剥離はみられない。

66は基部に剥離が集中し、刃部は一部のみ加工である。上部は欠損している。68は基部と右側縁部に加工がみられ、刃部に加工はみられない。上部が欠損している。

69は左側縁の基部付近、右側縁の上端部分に加工がみられる。刃部となる部分には加工はみられない。

70は両側縁の基部および刃部に加工がみられる。71は基部および右側縁と一部刃部に加工がみられる。上部は欠損している。

石材をみると65、71は硅質頁岩製、67は黒曜石製、66、68、69、70は流紋岩製である。

剥片尖頭器 (第27図72～74)

72～74は剥片尖頭器である。72は砂岩製で大型の縦長剥片を利用している。基部は両側縁の背面より丸みを作るように調整される。左側縁は基部の調整のみで、刃部は剥片のまま未調整だが右側縁は背面からの調整により尖頭を成形している。

73はホルンフェルス製である。風化が著しいが、基部や刃部の調整は残存している。基部は両側縁ともに背面から調整を行い、刃部部分は左側縁のみ背面より連続した剥離面による尖頭を成形している。

74は硅質頁岩製である。基部は両側縁の背面より剥離を行い、すぼんだ形に成形している。刃部は主に左側縁を背面より剥離し、尖頭を成形している。右側縁は部分的な剥離を背面より微調整を施している。上部は欠損している。

角錐状石器 (第27図75)

75は流紋岩製の角錐状石器である。両側縁を背面より剥離し成形をしている。基部部分は両側縁に剥離がみられるが、自然面を残す。

尖頭器 (第27図76)

76は黒曜石製の尖頭器基部である。両側縁に剥離面が見られすぼんだ形を成形している。上部は欠損している。

スクレイパー (第27図77)

77は流紋岩製のスクレイパーで横長剥片を利用している。下部には半円に刃部を成形する剥離がみられる。

削器 (第27図78、第28図79～80)

78～80は削器である。78は砂岩製の削器で厚めの縦長剥片を利用している。刃部は背面より下部から右側縁部にかけて剥離を施し成形されている。

79、80は硅質頁岩製の縦長剥片を利用した削器である。79は右側縁を背面腹面の両面より剥離を施し、刃部を成形している。80は右側縁を背面より剥離を施し、刃部を成形している。

二次加工剥片 (第28図81～84)

81～84は二次加工剥片である。81、82は流紋岩製で、縦長剥片を利用し加工をしている。81は右側縁に僅かな加工が、82は左側縁に加工がみられる。

83、84は硅質頁岩製の縦長剥片を利用している。83は両側縁に刃部を成形するような剥離がみられ、削器の未製品の可能性がある。84は76と調整が類似しており、尖頭器基部の可能性が高い。

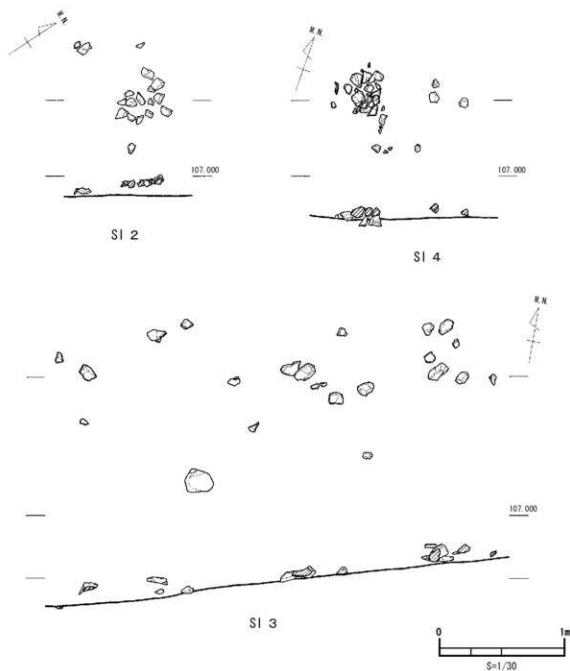
石核 (第28図85～88、第23図89～90、第24図91～92)

85～92は石核である。85、86は縦長、横長剥片を利用し、そこから新たに剥片を成形している、86の下部には自然面が残る。

87はホルンフェルス製で、円礫を半分に割り、剥離の方向は様々だが、円礫の周囲より中心に向かい縦長剥片を削り取っている痕跡がみられる。88は流紋岩製で、全ての面に剥離痕がみられる。

89、90は硅質頁岩製の石核である。89は全面に大小の剥離がみられ、連続的に縦長、横長剥片の剥離作業を行っていたとみられる。90も89同様に連続した剥離面から縦長、横長剥片の剥離作業を行っていたとみられる。

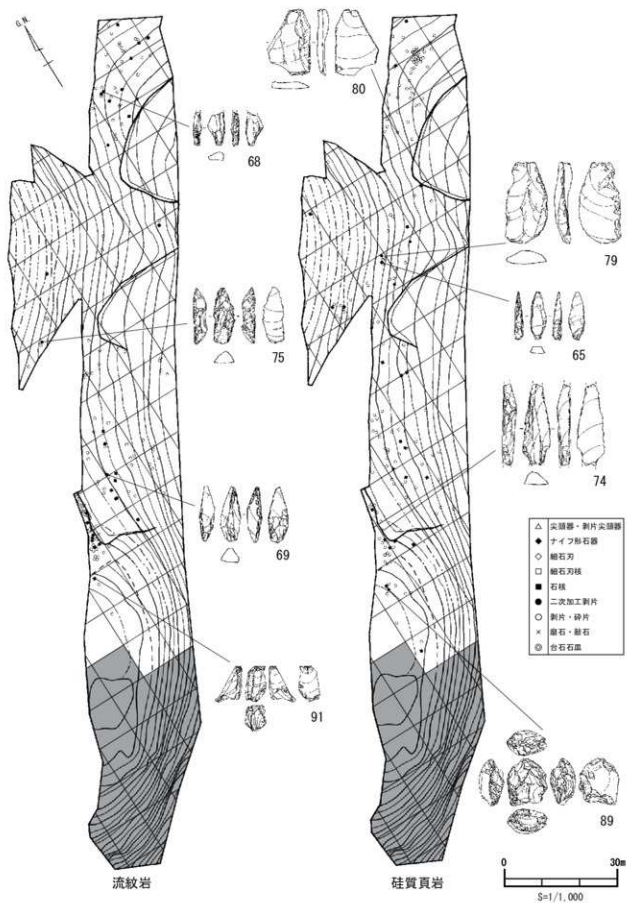
91は流紋岩製である。厚めの縦長剥片を利用しており、背面は一面の打面だが、その他の面は連続して縦長剥片の剥離作業をした痕跡が残る。



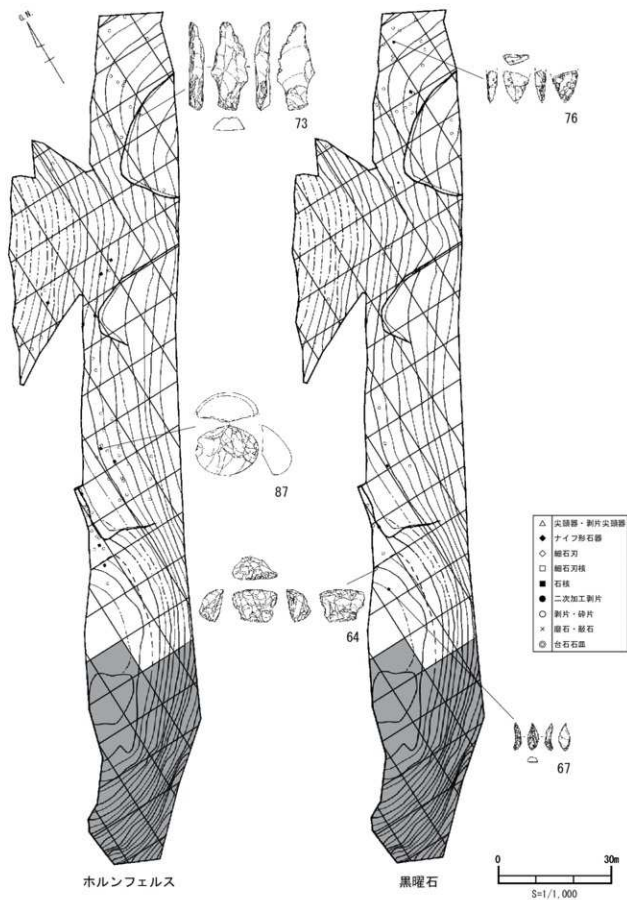
第 21 図 礫群実測図 (SI 2 ~ SI 4)

第 8 表 礫群一覧表

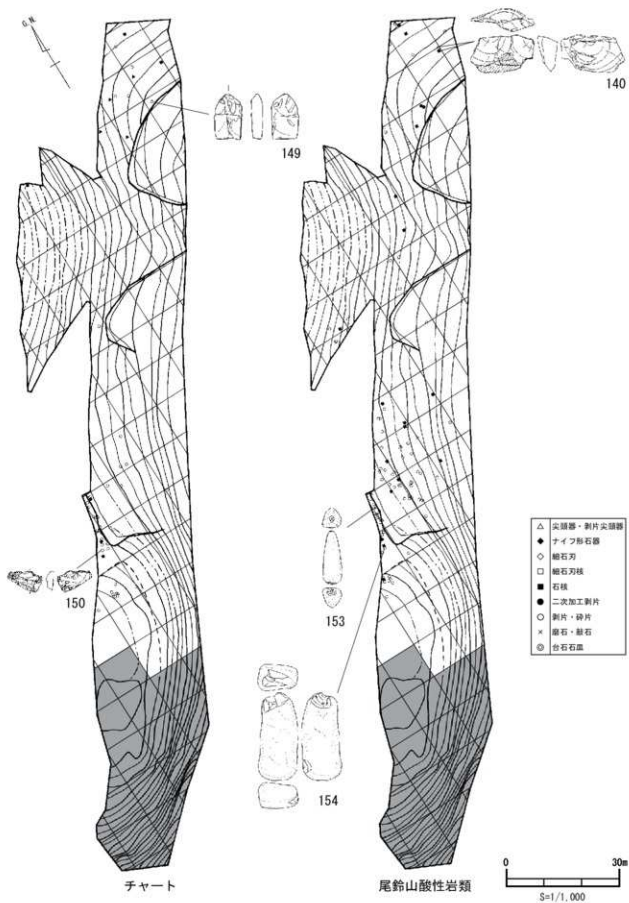
遺構 No.	検出層	Gr	長 (m)	幅 (m)	掘り込み (m)	総重量 (g)	総礫数 (個)	平面形態 構成度	観察所見
SI 2	VI層	F10	1.00	1.00	—	21	5,224.2	円・密	VI層下部より検出。全て破砕礫で構成され、赤化が激しい。
SI 3	VI層	F10	3.20	1.40	—	23	16,393.7	散・疎	VI層下部より検出。全て破砕礫で構成され、少数だが赤化礫を含む。
SI 4	VI層	E10	1.00	1.00	—	43	11,296.5	円・密	VI層下部より検出。破砕礫および円礫から構成される。赤化礫を多く含む。



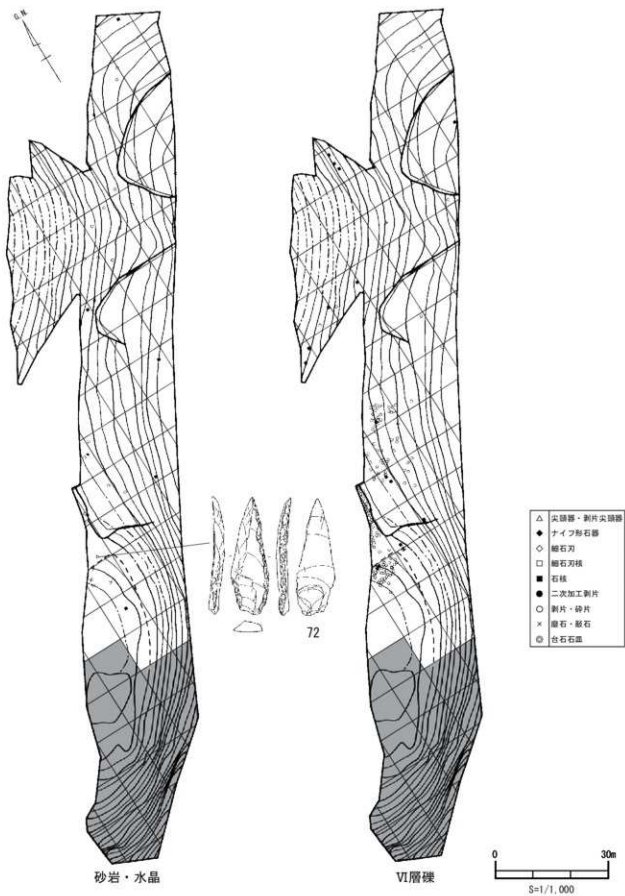
第 22 図 第 2 次調査VI層遺物分布図（流紋岩・硅質頁岩）



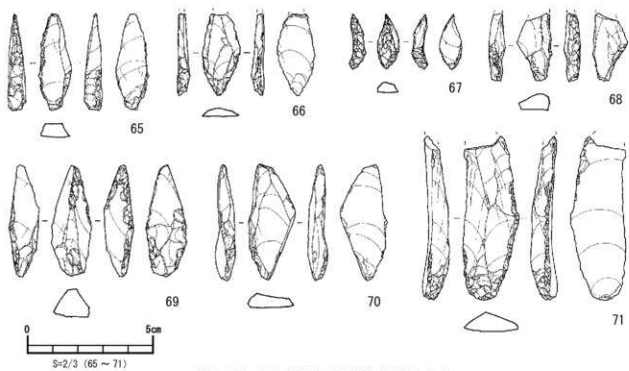
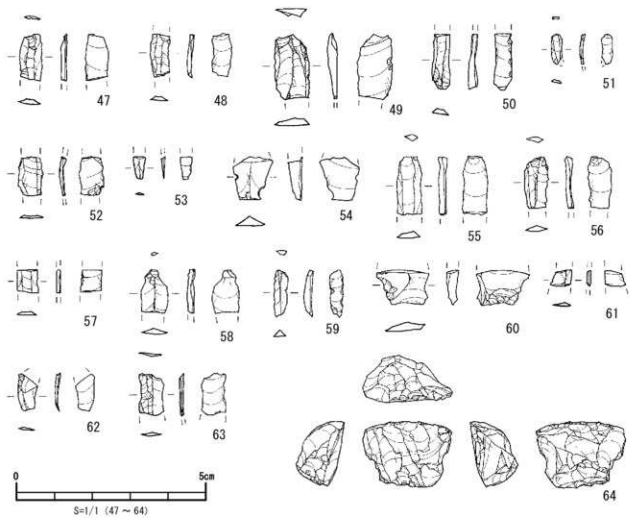
第 23 図 第 2 次調査VI層遺物分布図 (ホルンフェルス・黒曜石)



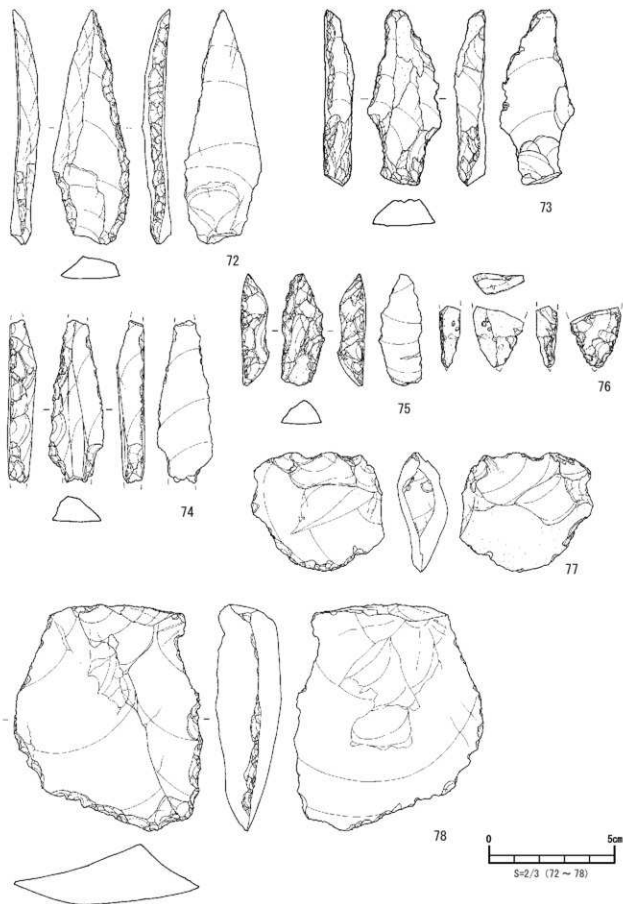
第24図 第2次調査VI層遺物分布図（チャート・尾鈴山酸性岩類）



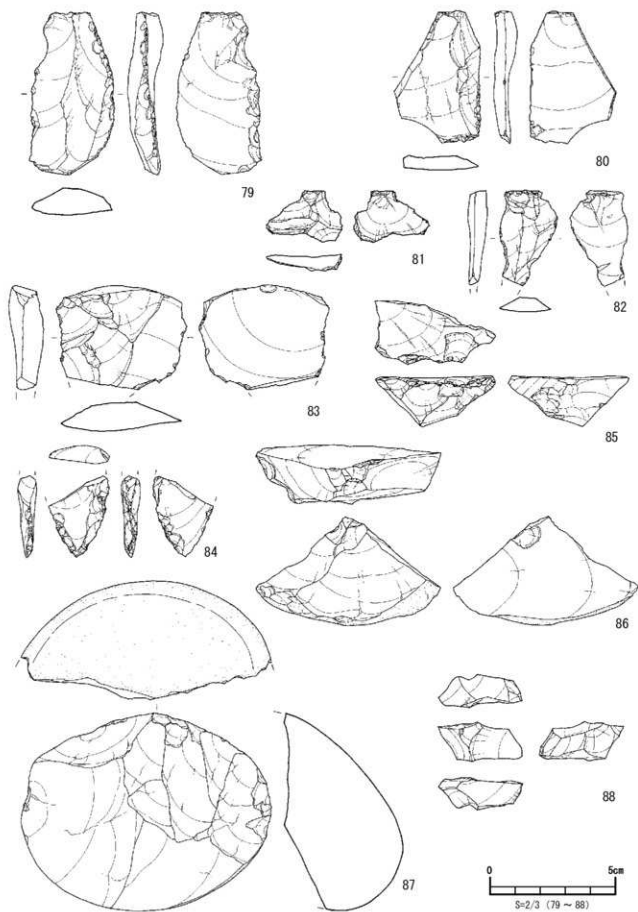
第 25 図 第 2 次調査 VI 層遺物 (砂岩・水晶)・VI 層礎分布図



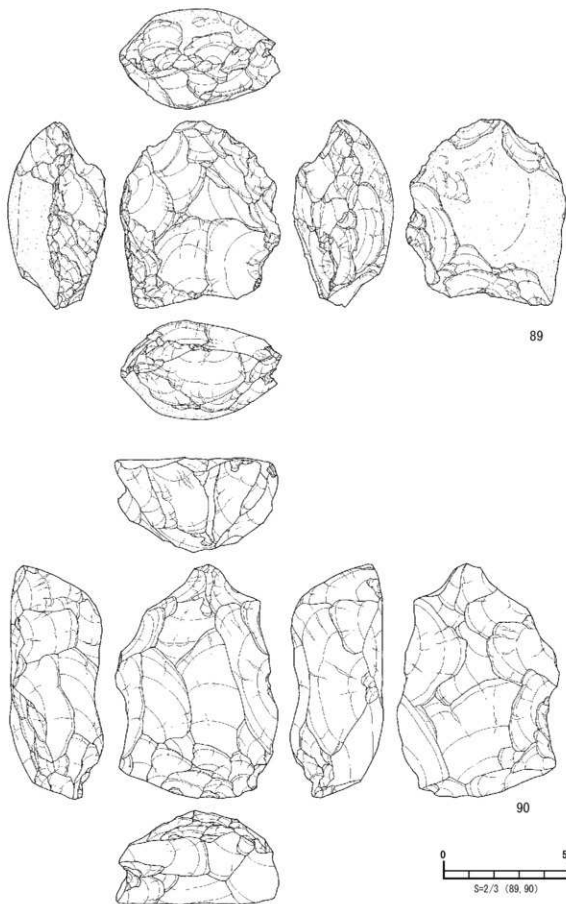
第 26 图 第 2 次調査VI層遺物実測图 (1)



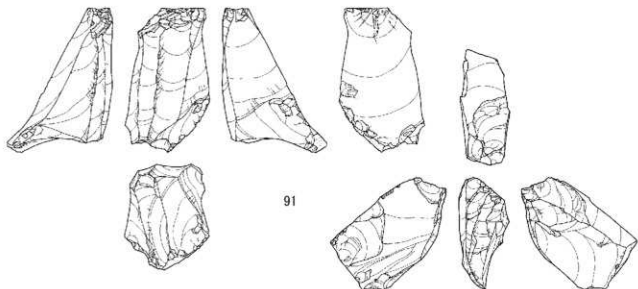
第 27 図 第 2 次調査VI層遺物実測図 (2)



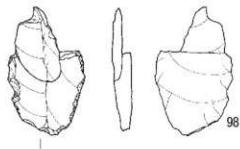
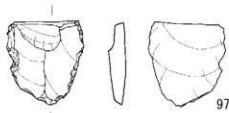
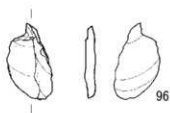
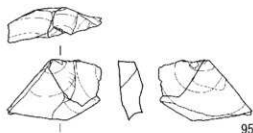
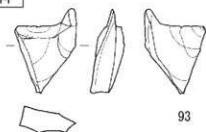
第28图 第2次調査VI層遺物実測図(3)



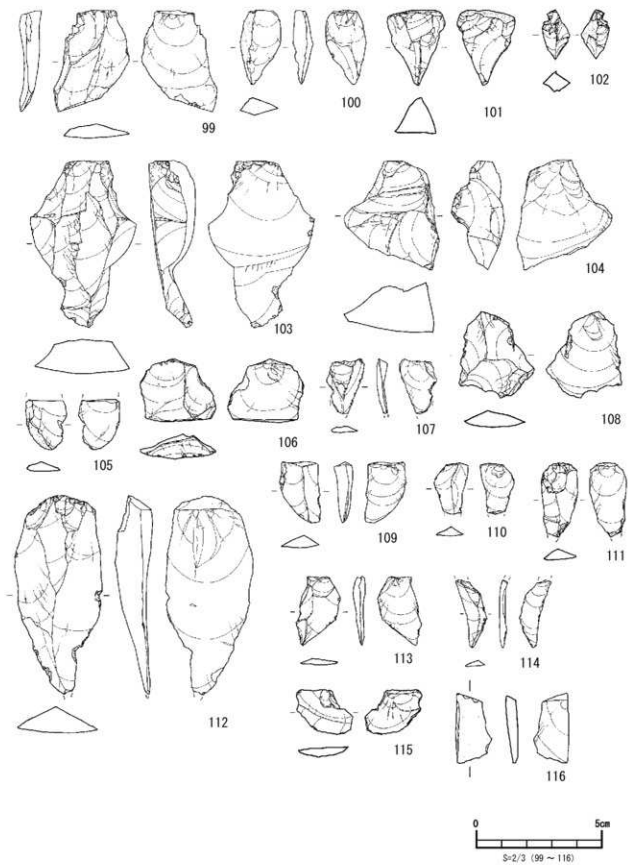
第29图 第2次調査VI層遺物実測図(4)



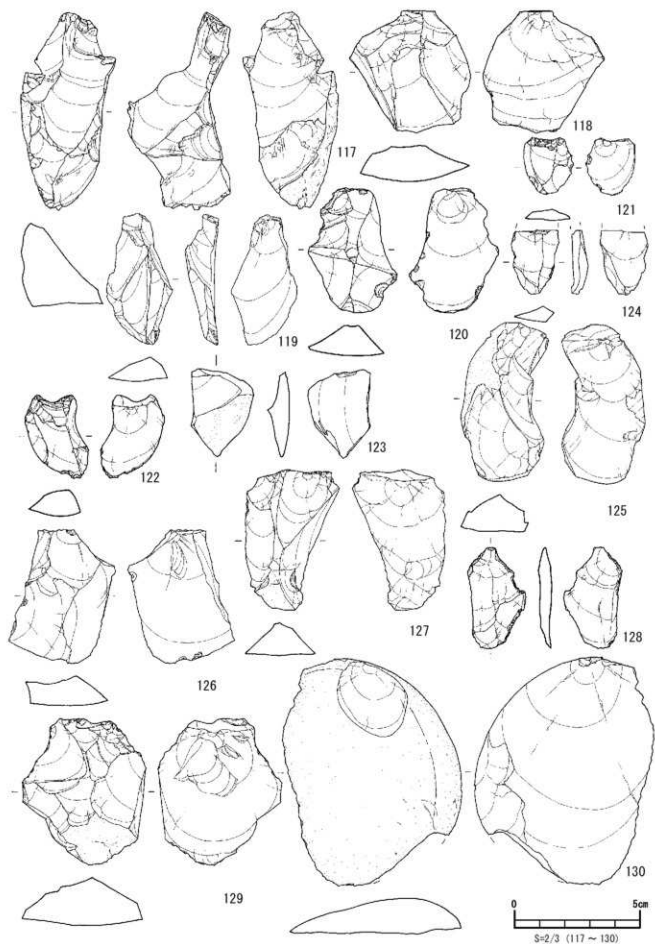
接合資料



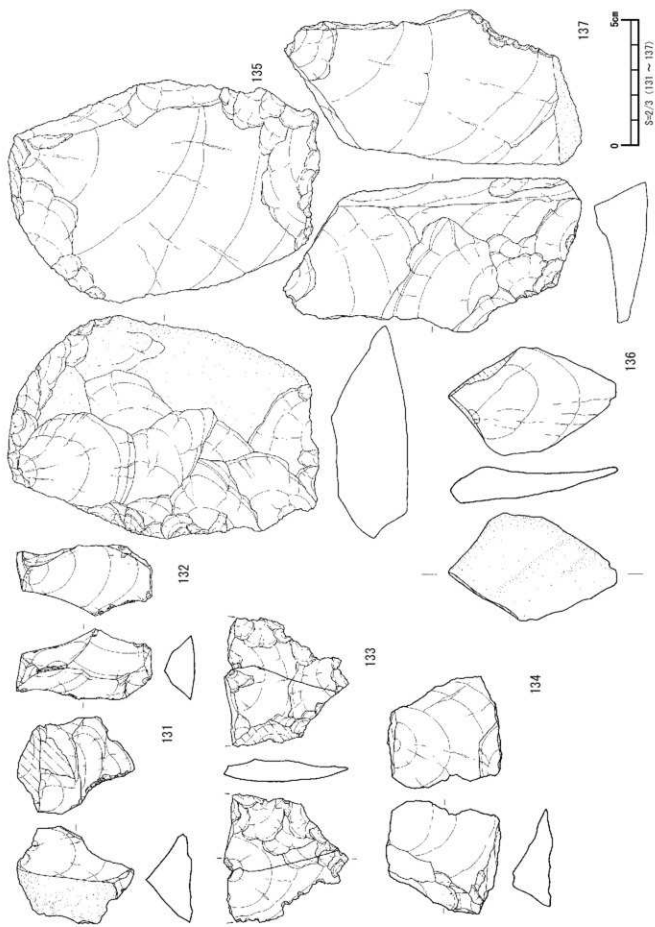
第30图 第2次調査VI層遺物実測図(5)



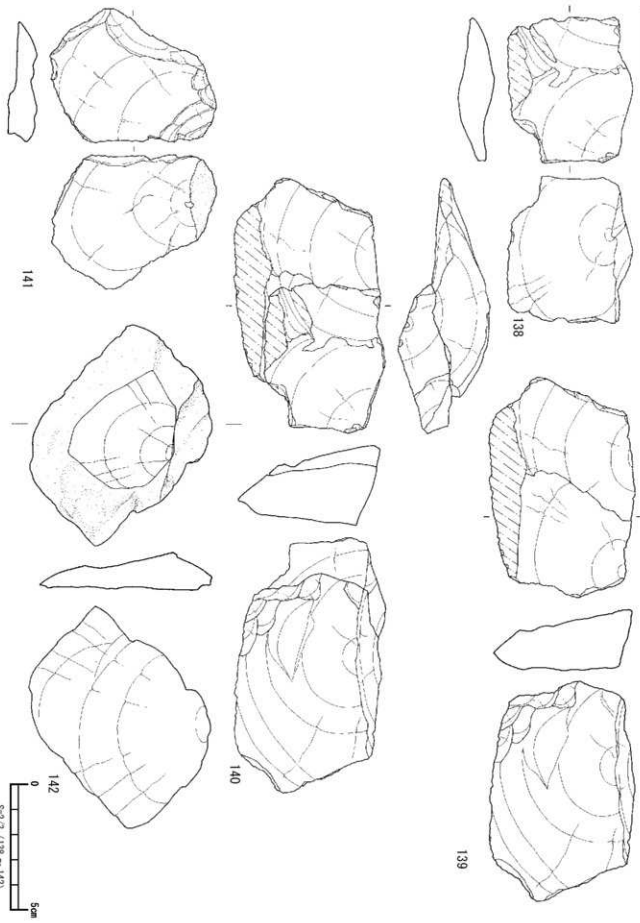
第 31 図 第 2 次調査VI層遺物実測図 (流紋岩)



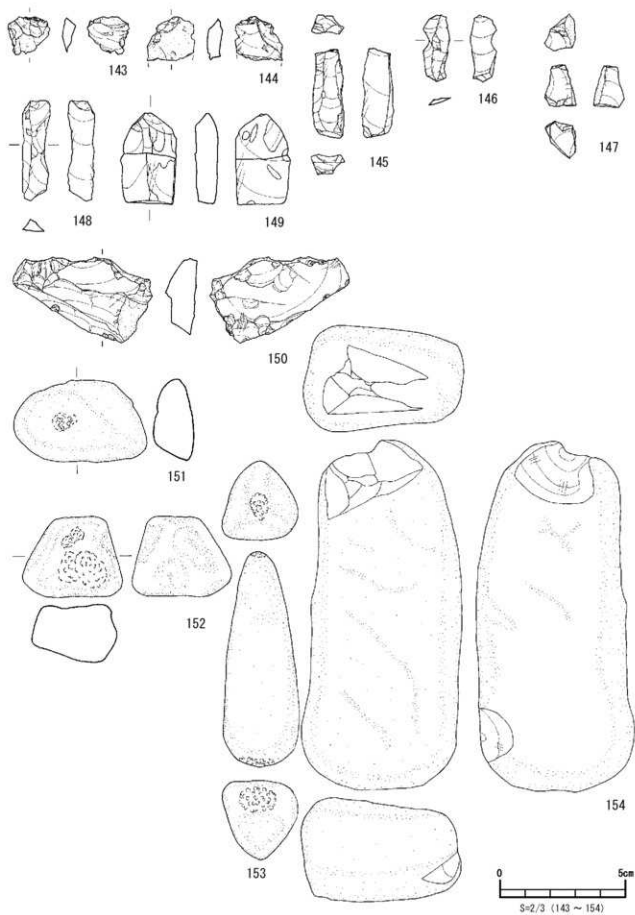
第32圖 第2次調査VI層遺物実測図（流紋岩・硅質頁岩）



第 33 図 第 2 次調査VI層遺物実測図 (硅質頁岩・尾鈴山酸性岩類)



第 34 図 第 2 次調査Ⅵ層遺物実測図 (尾鈴山酸性岩類)



第35図 第2次調査VI層遺物実測図 (尾鈴山酸性岩類・黒曜石・チャート・砂岩)

第9表 VI層遺物計測表(1)

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
47	100	細石刃	Ryu	1.30	0.70	1.20	1.18	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
48	113	細石刃	Ob1	1.20	0.60	0.20	0.14	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
49	261	細石刃	Ob1	1.70	1.00	0.30	0.45	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
50	264	細石刃	Ob1	1.50	0.50	0.30	0.20	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
51	416	細石刃	Ryu	0.80	0.30	0.10	0.03	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
52	498	細石刃	Ob1	1.00	0.70	0.20	0.09	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
53	569	細石刃	Ryu	0.60	0.30	0.10	0.02	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
54	634	細石刃	Ryu	1.20	1.00	0.40	0.29	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
55	757	細石刃	Sn	1.60	0.70	0.20	0.26	縦長剥片素材、上部に打点を残す。
56	859	細石刃	Ob1	1.40	0.60	1.20	0.17	縦長剥片素材、上部に打点を残す。
57	860	細石刃	SH	0.60	0.60	0.10	0.07	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
58	877	細石刃	Ryu	1.10	0.70	0.20	0.15	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
59	906	細石刃	Ob1	1.20	0.40	0.30	0.10	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
60	1135	細石刃	Ob1	0.90	1.40	0.30	0.35	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
61	1371	細石刃	Ryu	1.00	0.50	0.10	0.05	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
62	1489	細石刃	Ryu	0.50	0.60	0.15	0.03	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
63	-	細石刃	Ob1	1.10	0.70	0.15	0.09	縦長剥片素材、上下部は折り取り。
64	1026	細石刃核	Ob2	3.40	2.20	3.00	13.30	上部に打点。縦長剥片素材を取ったとみられる。一部自然面を残す。
65	246	ナイフ形石器	SH	3.80	1.30	0.70	3.70	縦長剥片素材、二側縁加工。
66	905	ナイフ形石器	Ryu	3.30	1.50	0.50	2.00	縦長剥片素材、二側縁加工。上部は欠損。
67	912	ナイフ形石器	Ob1	2.20	0.90	0.60	0.90	縦長剥片素材、二側縁加工。
68	934	ナイフ形石器	Ryu	2.70	1.40	0.70	2.10	縦長剥片素材、二側縁加工。上部は欠損。
69	1239	ナイフ形石器	Ryu	4.40	1.60	1.20	6.90	縦長剥片素材、二側縁加工。
70	1207	ナイフ形石器	Ryu	4.60	1.80	0.80	5.40	縦長剥片素材、二側縁加工。
71	9	ナイフ形石器	SH	6.50	2.20	1.10	12.80	縦長剥片素材、二側縁加工。上部は欠損。
72	684	剥片尖頭器	Sn	9.30	3.10	1.20	23.50	縦長剥片素材、二側縁加工。
73	789	剥片尖頭器	Ho1	7.00	2.90	1.20	15.30	縦長剥片素材、二側縁加工。
74	1357	剥片尖頭器	SH	6.50	2.20	1.10	14.80	縦長剥片素材、二側縁加工。上部は欠損。
75	991	角縁伏石器	Ryu	4.50	2.70	1.10	7.60	縦長剥片素材、二側縁加工。
76	8	尖頭器	Ob2	2.40	2.10	0.80	3.10	縦長剥片素材、尖頭器基部。上部は欠損。
77	292	スクレイパー	Ryu	4.70	5.30	2.00	44.30	縦長剥片素材、下部に刃部調整あり。一部自然面を残す。
78	-	削器	Sn	9.00	7.60	3.60	152.30	縦長剥片素材、下部から右側縁に刃部調整あり。
79	293	削器	SH	6.50	3.40	1.40	26.10	縦長剥片素材、左側縁に刃部調整あり。
80	922	削器	SH	5.30	3.50	0.90	14.70	縦長剥片素材、右側縁に刃部調整あり。

第10表 VI層遺物計測表(2)

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
81	924	二次加工割片	Ryu	2.00	3.00	0.70	2.20	縦長割片素材。上部に加工痕。
82	854	二次加工割片	Ryu	3.80	2.00	0.80	5.20	縦長割片素材。上部および左側縁に加工痕。
83	234	二次加工割片	SH	4.10	5.20	1.40	32.00	縦長割片素材。右側縁部に加工痕。
84	-	二次加工割片	SH	3.20	2.40	0.80	4.50	縦長割片素材で下部に加工痕。上部は欠損している。尖頭器未製品か。
85	1306	石核	Ryu	2.00	4.80	2.50	16.50	上部より幅広割片の剥離痕。
86	683	石核	SH	4.40	7.40	2.40	62.90	上部より縦長割片素材の剥離痕が残る。
87	611	石核	HoI	7.90	10.00	4.80	361.00	上部より縦長割片素材、左右より横長割片素材の剥離痕が残る。
88	1105	石核	Ryu	1.60	3.30	1.30	6.50	上下方向に縦長割片素材、横方向に横長割片素材の剥離痕が残る。
89	733	石核	SH	7.50	6.40	4.00	199.40	上下方向に縦長割片素材、横方向に横長割片素材の剥離痕が残る。
90	1419	石核	SH	9.30	6.50	3.70	248.00	上下方向に縦長割片素材、横方向に横長割片素材の剥離痕が残る。
91	1528	石核	Ryu	5.70	3.40	4.20	56.90	上部より縦長割片素材の剥離痕が残る。
92	1341	石核	SH	4.40	2.00	4.60	32.30	上部より縦長割片素材。左右より横長割片素材の剥離痕が残る。
93	1153	割片	SH	2.40	3.40	1.30	7.37	No. 75 と接合。
94	1152	二次加工割片	SH	1.80	2.20	1.00	3.00	No. 74 と接合。
95	1152+1153	二次加工割片	SH	2.40	3.70	1.00	10.37	上部より幅広割片素材の剥離痕を残す。
96	1303	割片	Ryu	3.00	1.80	0.40	2.20	縦長割片。
97	1278	割片	Ryu	3.30	3.10	0.70	7.80	No. 77 と接合。左右側縁に二次加工。
98	1278+1303	接合資料	Ryu	5.20	3.10	0.85	10.00	左右側縁に二次加工を持つ縦長割片。
99	978	割片	Ryu	4.00	3.00	0.60	7.30	縦長割片。
100	893	割片	Ryu	3.00	1.60	0.70	2.70	縦長割片。
101	369	割片	Ryu	3.00	2.20	1.80	10.10	横長割片、上部に自然面を残す。
102	269	割片	Ryu	1.90	1.10	0.80	1.20	縦長割片、背面に自然面を残す。
103	1258	割片	Ryu	6.70	4.20	1.90	37.00	縦長割片。
104	137	割片	Ryu	4.40	3.80	2.10	22.80	縦長割片。
105	1009	割片	Ryu	2.00	1.60	0.40	1.50	縦長割片。
106	968	割片	Ryu	2.50	3.00	0.90	6.50	縦長割片。
107	1410	割片	Ryu	2.20	1.50	0.40	0.80	縦長割片。
108	374	割片	Ryu	3.50	3.00	7.50	6.20	縦長割片。
109	496	割片	Ryu	2.40	1.60	0.80	2.10	縦長割片。
110	679	割片	Ryu	2.00	1.40	0.50	1.00	縦長割片。
111	1123	割片	Ryu	2.90	1.50	0.40	1.90	縦長割片。
112	348	割片	Ryu	7.90	3.50	1.10	28.30	縦長割片。
113	265	割片	Ryu	2.70	1.80	0.50	1.40	縦長割片。
114	1012	割片	Ryu	2.70	1.20	0.30	0.50	縦長割片。

第11表 VI層遺物計測表(3)

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
115	916	割片	Ryu	1.80	2.30	0.40	1.20	縦長割片。
116	980	割片	Ryu	2.80	1.50	0.60	2.40	縦長割片、自然面を残す。
117	127	割片	Ryu	7.90	3.80	4.10	72.10	縦長割片。
118	1348	割片	Ryu	4.90	4.80	1.50	31.20	縦長割片。
119	1233	割片	Ryu	5.20	2.60	1.30	11.00	縦長割片。
120	635	割片	Ryu	5.00	3.60	1.40	15.90	縦長割片。
121	-	割片	SH	2.30	2.00	0.50	2.30	縦長割片。
122	764	割片	SH	3.30	2.50	1.20	8.20	縦長割片。
123	1121	割片	SH	3.50	2.50	0.90	7.20	横長割片。
124	1231	割片	SH	2.50	1.90	0.60	2.60	縦長割片。
125	1321	割片	SH	6.30	3.50	1.70	37.40	縦長割片。
126	1046	割片	SH	5.30	4.30	1.40	28.90	縦長割片。
127	135	割片	SH	5.60	3.80	1.60	25.00	縦長割片。
128	883	割片	SH	4.00	2.30	0.50	4.60	縦長割片。
129	1328	割片	SH	5.80	5.00	1.90	53.70	縦長割片、一部自然面を残す。
130	591	割片	SH	9.10	7.20	1.60	95.80	縦長割片、表面は自然面を残す。
131	736	割片	SH	4.60	3.90	2.00	24.30	縦長割片、一部自然面を残す。
132	786	割片	SH	5.40	2.90	1.50	17.50	縦長割片。
133	1022	割片	Os	4.90	5.20	1.00	20.90	縦長割片、上部の打点から半分に割れている。
134	1133	割片	Os	4.60	4.60	1.60	30.40	縦長割片。
135	1061	割片	Os	12.40	9.00	3.50	370.00	縦長割片。
136	1373	割片	Os	6.70	4.30	1.50	31.90	縦長割片、一部自然面を残す。
137	1359	割片	Os	11.90	6.20	2.30	153.60	縦長割片。
138	429	割片	Os	5.50	5.90	1.60	44.60	幅広割片。No.120と接合。
139	452	割片	Os	5.80	8.80	2.50	111.40	幅広割片。No.119と接合。
140	429+452	接合資料	Os	6.00	10.20	3.70	159.00	上部から縦長割片素材、右側縁より横長割片素材の剥離を残す。
141	412	割片	Os	6.60	5.40	2.00	42.20	縦長割片。
142	750	割片	Os	7.30	8.80	1.60	89.40	縦長割片。
143	492	割片	Ob2	1.50	1.70	0.60	1.00	縦長割片。
144	367	割片	Ob2	1.80	1.90	0.60	1.80	縦長割片。
145	473	割片	Ob2	2.40	0.90	0.50	0.80	縦長割片。細石刀の未製品か。
146	259	割片	Ob1	1.80	0.70	0.20	0.30	縦長割片。細石刀の失敗品か。
147	12	割片	Ob6	1.70	1.20	1.50	2.00	縦長割片。一部自然面を残す。
148	1183	割片	Sn	3.60	2.20	0.90	8.90	縦長割片。
149	790	割片	Ch	2.70	0.75	0.30	0.70	縦長割片。細石刀の未製品か。
150	1305	割片	Ch	3.50	5.60	1.30	24.40	幅広割片。
151	-	凹石	Os	6.55	10.60	3.15	291.60	表面に敲打痕。
152	1228	凹石	Os	6.40	8.00	4.60	319.60	表面に敲打痕、背面に磨面あり。
153	1422	敲石	Os	8.60	3.10	3.10	81.90	上下部に敲打痕。
154	1118	敲石	Os	14.00	6.30	4.20	469.30	上部の敲打部分が割れている。

92は硅質頁岩製である。全面に連続して縦長剥片の剥離作業をした痕跡が残る。

接合資料（第30図93～98、第34図138～140）

95は剥片1点（93）、石核1点（94）からなる接合資料である。石材は硅質頁岩である。出土地点は4-1区で、5m以内に出土している。出土層はともにVI層である。両面を剥ぎ取った際に衝撃により中央部分で割れた痕跡が残っている。

98は剥片2点（96、97）による接合資料である。石材は流紋岩である。出土地点は4-2区で5m以内より出土している。出土層はVI層である。96、97の観察より、97の両側縁に細かい剥離面があり、尖頭器などの石器を加工中、96を剥ぎ取る際に97が折れたものとみられる。

140は剥片1点（138）、石核1点（139）からなる接合資料である。石材は尾鈴山酸性岩類である。出土地点は1区で、5m以内に出土している。出土層はともにVI層である。140の状態から138を剥ぎ取ったものとみられる。

剥片（第31図99～116、第32図117～130、第33図131～137、第34図141～142、第35図143～150）

99～120は流紋岩製の剥片である。VI層で出土した同石材の剥片は縦長剥片主体であり、横長剥片は119の1点のみ確認された。121～132は硅質頁岩製で、133～139、143は尾鈴山酸性岩類の剥片である。

144～148は黒曜石製、149は砂岩製、150はチャート製の剥片である。

凹石・敲石（第35図151～154）

151、154は尾鈴山酸性岩類の凹石である。151は表面のみに敲打痕があり、裏面は利用されていない。152の表面は、はっきりとした敲打痕がみられるが、裏面の敲打痕について確認できるのはわずかである。

153、154は尾鈴山酸性岩類の敲石である。153は両端部に敲打痕がみられる。154は敲打部分が欠損している。

6. V層出土の遺物

第36図の石器は、V層より出土した細石刃やナイフ形石器、彫器である。V層は調査区全域より検出されるが、2-2区南西側ではV層の堆積が希薄となり、後期旧石器時代の石器が混在していた。そのため、後

述する縄文時代早期の石器類と区別するため、この部分より出土した後期旧石器時代の石器をV層出土として報告する。また掲載順については、新相より古相の順に報告する。

細石刃（第36図155～162）

155～162は細石刃である。157、159、160はそれぞれ黒曜石製、チャート製、硅質頁岩製であり、それ以外は全て流紋岩製である。

157、158は上端に打点を残すものである。157のみ下端の湾曲部分が残る。158は下部が欠損もしくは折り取られたものとみられる。

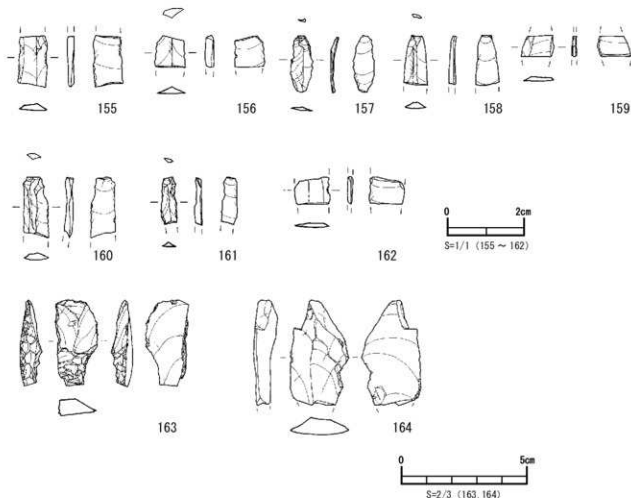
155、156、159、160、161、162については上端に打点が認められない。また上辺と下辺がそれぞれ平行していることから、上端、下端ともに折り取られたものとみられる。

ナイフ形石器（第36図163）

163は硅質頁岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を利用している。調整は刃部に加える調整は少ないが、その半面基部と基部付近に重点的に調整を加えている。

彫器（第36図164）

164は流紋岩製の彫器である。縦長剥片を利用したものである。左面下部に刃部を成形する剥離面が確認できる。



第 36 図 第 2 次調査 V 層遺物実測図

第 12 表 V 層旧石器遺物計測表

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
155	31	細石刃	Ryu	1.40	0.80	0.20	0.29	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
156	44	細石刃	Ryu	0.80	0.80	0.20	0.18	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
157	55	細石刃	Ob1	1.50	0.60	0.20	0.10	縦長剥片素材。上部に打点を残す。
158	92	細石刃	Ryu	1.50	0.60	0.20	0.10	縦長剥片素材。上部に打点を残す。
159	116	細石刃	Ch	1.30	0.80	0.20	0.19	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
160	205	細石刃	SH	0.50	0.70	0.20	0.07	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
161	804	細石刃	Ryu	1.30	0.40	0.20	0.10	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
162	839	細石刃	Ryu	0.80	0.90	1.00	0.13	縦長剥片素材。上下部は折り取り。
163	427	ナイフ形石器	SH	3.40	1.70	0.90	4.20	縦長剥片素材。二側縁加工。
164	88	形器	Ryu	4.20	1.60	0.90	7.20	縦長剥片素材。右側縁部に刃部。

第6節 縄文時代早期の遺構と遺物

1. 概要

縄文時代早期の遺構は、集石遺構1基、土坑4基を抽出した。

遺物は、貝殻文・無文・押型文等の土器が出土しているが、そのほとんどが小片であり完形に復元できるものはなかった。石器は打製石鏃、石斧未製品、敲石、磨石、右石等が出土している。

本遺跡の縄文時代早期包含層は、V層およびVI層上部である。VI層からは前節で述べたとおり、後期旧石器時代の遺物も出土しており、旧石器時代と縄文時代において明確な区別ができなかった。

V層およびVI層は、遺跡のほぼ全域で堆積が認められるが、後世の削平を受けた部分ではその堆積が認められない箇所がある。

2. 遺構

集石遺構

本遺跡より抽出された集石遺構は1基あり、S12(礫群)と同一箇所より抽出された。抽出層はVI層上部で、S12(礫群)とは上下関係となる(第38図)。

S11(第40図)

S11は、調査区南側のF9aGrからF9cGrの境より抽出された。掘り込みを持ち、規模は1m×1m×0.25mとなる。S11の構成礫の個体数は89個で、その個体の大きさは、大きいもので長さ30cm、幅15cm前後、小さいものは長さ3cm、幅2cmの礫で構成されている。この構成礫は全て尾鈴山酸性岩類である。また掘り込みはX層上面まで掘り込まれており、X層に含まれている尾鈴山酸性岩類の風化礫が露出する状況であった。

接合状況は同一個体が1個体、接合点数は2点となっている。この接合された礫はS12(礫群)の構成礫と接合されている。抽出位置が上下関係はあるものの1m程の距離であり、S12で使用されていた礫を再利用されたものと考えられる。

土坑

本遺跡で抽出された土坑は7基あるが、遺物を含む土坑は無く、堆積状況などからその内4基を縄文時代早期と位置づけた。抽出箇所はJ20GrからK19Grの範

囲に集中して抽出された。検出面は上部を削平されている部分もあり、検出面はV層からVI層である(第39図)。

SC2(第41図)

SC2はK20cGrより抽出された。検出面はV層上面である。SC2の規模は1.0m×0.6mで掘り込みの深さは0.6mである。埋土は斜面堆積を成し、上部に若干アカホヤ粒を含むが、土層の5層以下の堆積はVIII層などの特徴を持つ。SC2はVIII層まで掘り込まれている状況が確認された。

SC5(第42図)

SC5はK19bGrより抽出された。検出面はVI層上面である。SC5の規模は1.1m×0.6mで掘り込みは0.45mである。傾斜に対し垂直に軸を向けている。埋土は斜面堆積を成し、IX層～X層をブロック状に含んでいる。SC5は基本層序X層まで掘り込まれている状況が確認された。

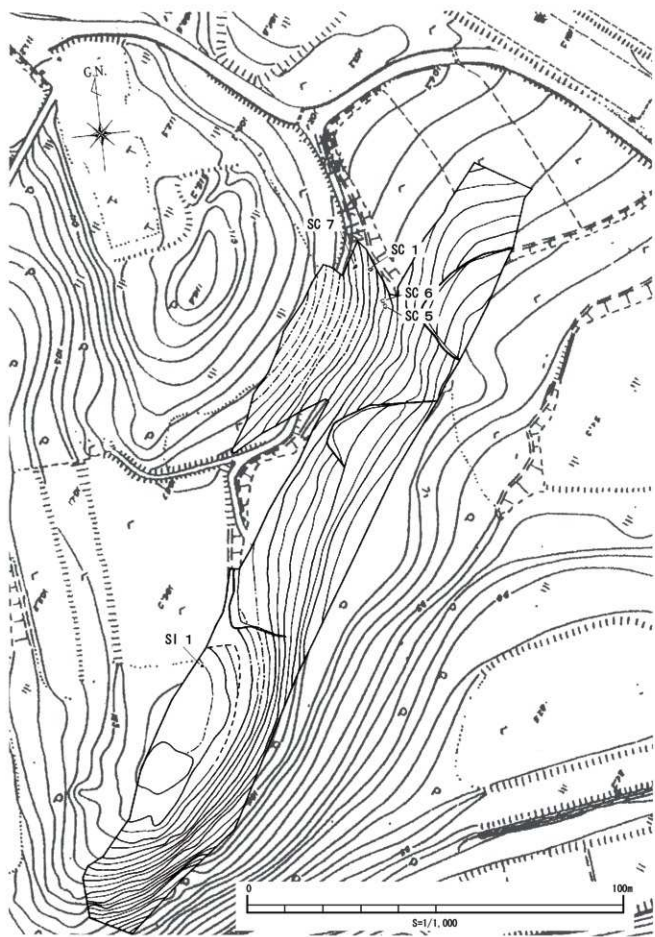
SC6(第42図)

SC5と同様にK19bGrより抽出された。検出面はVI層上面である。SC6の規模は0.8m×0.7mで、掘り込みは0.3m程である。埋土にはSC5同様の堆積が認められた。

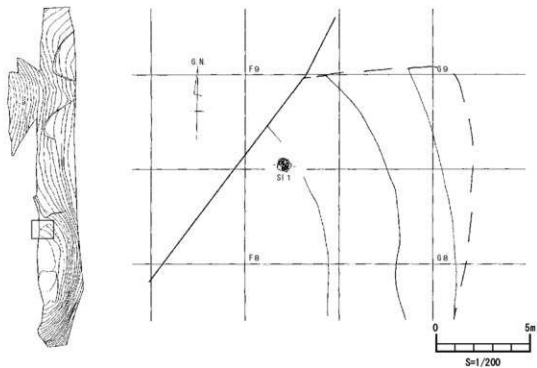
SC6は基本層序XI層まで掘り込んでいる状況が確認され、完掘後の底面はXI層の尾鈴山酸性岩類の風化礫が露出している状態であった。

SC7(第42図)

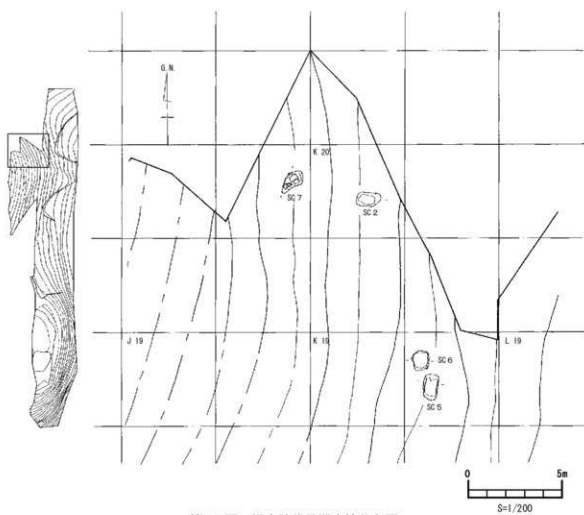
SC7はJ20bGrから抽出された。検出面はVI層上面である。SC7の規模は1.15m×0.6mで、掘り込みは0.5mである。斜面堆積で埋没した後、アカホヤ降灰により、完全に埋没した状況が確認された。掘り込みは基本層序VIII層まで掘り込まれている状況が確認されたが、10層は水穴の埋土である。



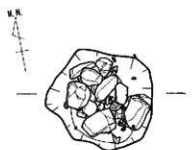
第 37 图 縄文時代早期遺構分布図



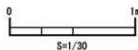
第 38 図 集石遺構分布図



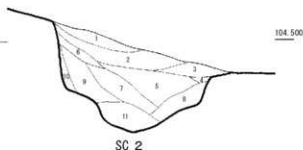
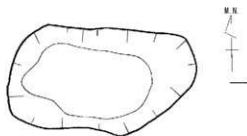
第 39 図 縄文時代早期土坑分布図



遺構名	層序	土色	色調	注記
S I 1	1	暗褐色土	10YR5/4	5mm程の焼土をわずかに含む。粘性、しまりともに非常に強い。
	2	褐色土	10YR4/4	5mm程の焼土を少量、1cm未満の炭化物を少量含む。粘性はやや強く、しまりは強い。
	3	にぶい黄褐色土	10YR5/4	0.5～1cmの焼土を多く含み、5mm程の炭化物を少量含む。しまり、粘性ともに非常に強い。



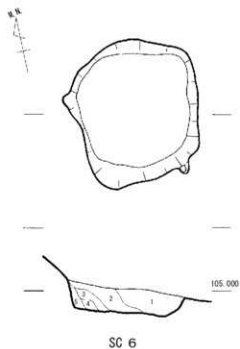
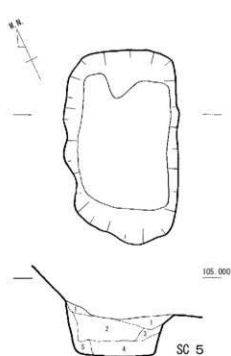
第40図 集石遺構実測図 (S I 1)



遺構名	層序	土色	色調	注記
S C 2	1	褐色土	7.5YR4/3	1mm程の褐色粘土、白色粘土を少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	2	暗褐色土	7.5YR3/3	1cm程のアカヤ粒を少量含む。粘性は弱く、しまりはやや強い。
	3	暗褐色土	7.5YR3/3	1mm程の白色粘土を多く含む。粘性は弱く、しまりはやや強い。
	4	暗褐色土	7.5YR3/3	2cm程のアカヤ粒を少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	5	暗褐色土	7.5YR3/3	1～5mm程の白色粘土を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	6	暗褐色土	7.5YR3/3	1mm程の白色粘土を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	7	暗褐色土	7.5YR3/4	1mm程の白色粘土を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	8	黒褐色土	7.5YR3/2	1mm程の褐色粘土、白色粘土を少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	9	黒褐色土	7.5YR3/1	1mm程の白色粘土を多く含む。粘性、しまりともにやや強い。
	10	暗褐色土	7.5YR3/4	1cm程の褐色粘土を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	11	黒褐色土	7.5YR2/2	1mm程の白色粘土を多く含む。粘性は強く、しまりはやや強い。

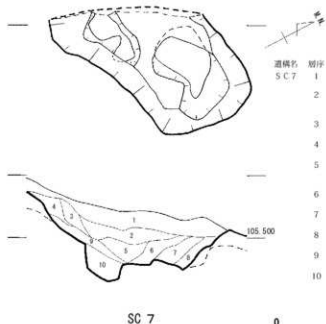


第41図 土坑実測図 (S C 2)



遺構名	層序	土色	色調	注記
SC 5	1	暗褐色土	10YR3/3	2~3mm程のぶい黄褐色粒子を多く、2~3mm程の暗褐色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	2	暗褐色土	10YR3/3	2~3mm程のぶい黄褐色粒子を多く、5mm程の暗褐色粒子、明黄褐色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	3	暗褐色土	10YR3/4	2~3mm程のぶい黄褐色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	4	褐色土	10YR4/6	2~3mm程のぶい黄褐色粒子をわずかに含む、5mm程の小礫、3cm程の小礫をわずかに含む。粘性、しまりともにやや強い。
	5	暗褐色土	10YR4/4	白色粒子をまばらに含む、0.5~1cm程の小礫をわずかに含む。粘性は強く、しまりは強い。

遺構名	層序	土色	色調	注記
SC 6	1	暗褐色土	10YR3/3	2~3mm程のぶい黄褐色粒子を多く、2~3mm程の暗褐色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	2	暗褐色土	10YR3/4	2~3mm程のぶい黄褐色粒子をわずかに含む、2~3mm程の暗褐色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	3	暗褐色土	10YR3/4	2~3mm程のぶい黄褐色粒子をわずかに含む、2~3mm程の暗褐色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	4	褐色土	7.5YR4/4	2~3mm程の黄褐色粒子をわずかに含む。粘性はやや強く、しまりは強い。
	5	褐色土	10YR4/6	5mm程の黄褐色土をブロック状に多く含む、2~3mm程の暗褐色粒子をわずかに含む。粘性はやや強く、しまりは強い。



遺構名	層序	土色	色調	注記
SC 7	1	暗褐色土	7.5YR3/4	IV層アカヤ (K-AH)
	2	暗褐色土	7.5YR3/3	1mm程の白色粒子を少量含む、暗褐色ブロックを多く含む。粘性は強く、しまりは強い。
	3	褐色土	7.5YR4/4	1mm程の白色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	4	褐色土	7.5YR3/4	1~2mmのアカヤブロックを少量含む。粘性、しまりともに強い。
	5	褐色土	7.5YR4/4	1mm程の白色粒子を少量含む、暗褐色ブロックを多く含む。粘性、しまりともに強い。
	6	暗褐色土	7.5YR3/4	3cm程のアカヤブロックを少量含む。粘性、しまりともに強い。
	7	褐色土	7.5YR4/4	1mm程の白色粒子を少量含む。粘性はやや強く、しまりは強い。
	8	褐色土	7.5YR4/3	1mm程の白色粒子をわずかに含む。粘性、しまりともに強い。
	9	ぶい褐色土	7.5YR5/4	1~5mm程の褐色粒子を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	10	暗褐色土	7.5YR3/3	1mm程の白色粒子、3mm程の礫を少量含む。粘性、しまりともに強い。(水の上)

SC 7



第 42 図 土坑実測図 (SC 5、SC 6、SC 7)

第13表 集石遺構一覧表

遺構 No.	検出層	Gr	長		幅	張り込み	総重量	総積数	平面形態	観察所見
			(m)	(m)						
SI 1	VI層	F10	1.00	1.00	0.25	35,170.9	89	円・密	VI層上部より検出。破砕礫および円礫で構成され、赤化が激しい。	

第14表 縄文時代早期土坑一覧表

遺構 No.	検出層	Gr	長		幅	張り込み	平面形態	観察所見
			(m)	(m)				
SC 2	VI層	K20	1.00	0.60	0.60	楕円	底面は凹凸があり、平坦ではない。	
SC 5	VI層	K19	1.10	0.60	0.45	隅丸長方	底面は凹凸がありません。平坦。	
SC 6	VI層	K19	0.80	0.70	0.30	円	底面は凹凸がありません。平坦。	
SC 7	VI層	J20	1.15	0.60	0.50	隅丸長方	底面は水穴の擾乱を受け、凹凸がある。	

3 縄文時代早期の遺物

(1) 土器

本遺跡では縄文時代早期の土器が少量ながら出土したが、完形の土器はなく、ほとんどが小片であった。出土地点としては、IV層上面(K-Ah)、下位のV層およびVI層より出土した(第43図)。その時期は縄文時代早期の中葉に属するものが多い。

本遺跡から出土した縄文時代早期の土器片を分類すると、I「押型文系土器」、II「貝殻文系土器」、III「無文系土器」に分類される。また押型文系土器についてはさらに二つのパターンに細分を行った。

I 押型文系土器

押型文系土器の細分はA類「凹線文および刺突文を施すもの」、B類「その他押型文を施すもの」とする。A類「凹線文および刺突文を施すもの」(第44図)

A類は主に凹線を施し、刺突文を持つものをまとめ、刺突文が施されていないものも同一形態を持つものはこの中に分類した。

165、166は口縁部で、わずかに外反する。口縁部はナデ調整で、平坦に調整されている。165の外表面は口縁部から胴部にかけて貼付突帯をもち、突帯部分は波打つような形態を成す。上部の施文は斜めに、その下は弧を描くように凹線文が施文されている。また弧を描く凹線文の部分には、刺突文が施されている。内面は横ナデの調整が施されており、胴部には指跡および粘土紐の痕跡が認められる。166の外表面は口縁部には山形の凹線文、胴部には横向きに凹線文が施され、胴部は165と同様刺突文も施されている。内面は横ナデの調整が施され、粘土紐の痕跡が認められる。

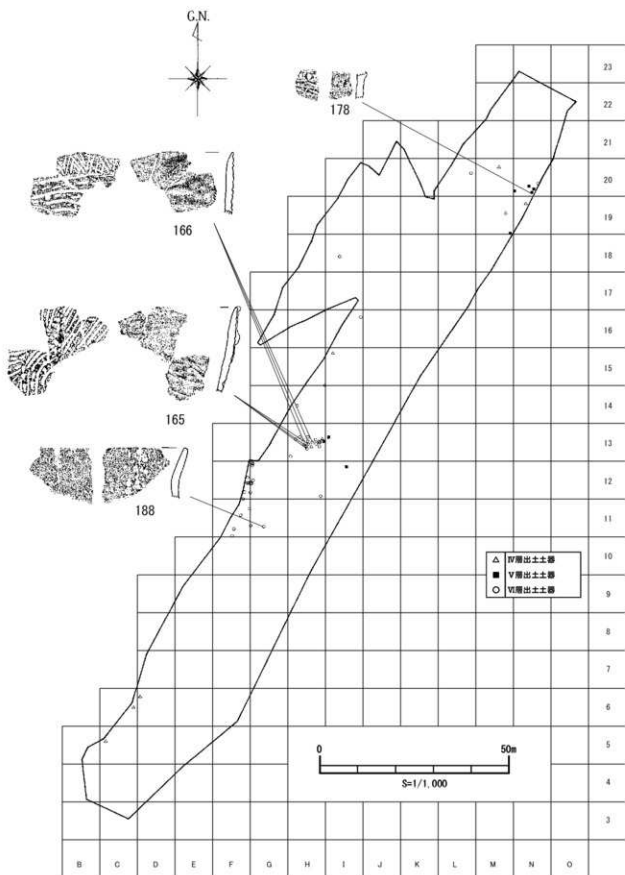
167～176は胴部である。斜めまたは横方向に凹線文を施している。167～169、173は貼付突帯をもつ。167の外表面は165同様弧を描く凹線文と刺突文の組み合わせで文様構成である。内面は横ナデおよび指跡の痕跡が認められる。168の外表面は165の口縁部と同様に斜め方向の凹線文だが、貼付突帯部分は斜めに沈線が施されている。内面は横ナデの調整と粘土紐の痕跡が認められる。169の外表面は斜め方向の凹線文と貼付突帯の組み合わせだが、突帯部分に刺突文が施されている。内面は横ナデ調整が施されている。

170の外表面は斜め方向と弧を組み合わせた凹線文が施されている。内面は横ナデ調整が施されている。171の外表面は斜めおよび横方向の凹線文が施され、内面はナデ調整である。172の外表面は横方向と斜め方向の凹線文が施されている。内面は横ナデ調整である。

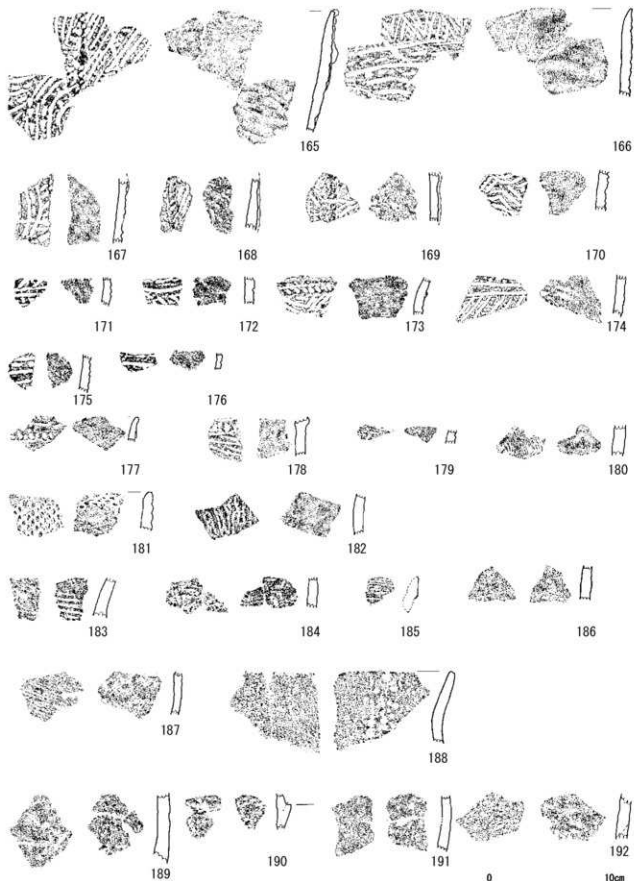
173の外表面は横方向に貼付突帯があり、斜め方向の凹線文と刺突文が施され、緩やかに外反する。内面は横ナデ調整が施されている。174の外表面は横方向と斜め方向の凹線文があり、それぞれの間には刺突文が施されている。内面はナデ調整が施されている。

175の外表面は横方向の凹線文と刺突文が施されている。内面はナデ調整が施されている。176の外表面は横方向の凹線文と浅い刺突文が施されている。内面はナデ調整で粘土紐の痕跡が認められる。

A類の土器に関しては、器形および、刻目突帯や沈線文、刺突文などの文様構成から手向山式に続く平塚式に先行する妙見・天道ヶ尾式土器と考えられる。



第43図 縄文土器分布図



第 44 図 縄文時代早期土器実測図

B類「その他押型文を施すもの」(第44図)

B類はA類以外の押型文を施すものがごく僅かであったため、それらをまとめた状態で分類を行った。

177は口縁部で、横方向の貼付突帯をもつ。口縁部はやや外反しているが、形状が165や166と異なり、丸みを帯びた口縁部となっている。内面はナデ調整が施されている。178は口縁部付近である。外面は横方向の凹線文と同方向の貼付突帯をもち、突帯には縦方向に凹線が入る。内面は横ナデで粘土紐の痕跡が認められる。179は178と同一個体とみられる胴部である。横方向に凹線、縦方向に刺突文が施されている。内面はナデ調整が施されている。178、179はA類と施文されている文様は同一だが、器壁の厚さ、文様の構成などからA類とは異なるため、B類としている。

180は山形押型文土器である。外面に浅い山形の押型文が施される。内面はナデ調整で指跡の痕跡が認められる。181は楕円押型文土器の口縁部である。外面と口縁部内側に楕円の押型文が施され、口縁部は直口する。内面は縦方向にナデ調整が施されている。182は縦方向に蚯蚓睡れ突帯を持つ胴部である。内面は横ナデ調整が施されている。

II 貝殻文系土器(第44図)

貝殻文系土器は今回出土した縄文土器の中では最も数量が少ない種類である。文様についても条痕が浅いものが多い。また口縁部は188のみで、それ以外は全て胴部のみの出土である。

183の外面は摩耗し調整は不明であるが、口縁部に向かい外反している。内面は横方向の貝殻条痕文が施されている。184の外面は横方向の貝殻条痕文が施されている。内面は横ナデ調整が施されている。185の外面は横方向の貝殻条痕文が施されている。条痕が確認される部分以外は摩耗し、内面ともに調整は不明である。186は摩耗しているが、僅かに横方向の貝殻条痕文が確認できる。内面はナデ調整が施される。187の外面は横方向の貝殻条痕文が施されている。内面は風化しているが僅かにナデ調整が確認できる。188は口縁部で、外面に斜め方向の貝殻条痕文が施されている。口縁部分は外反している。内面はナデ調整が施される。

III 無文系土器(第44図)

本遺跡で出土した無文系土器は小片が多く、今回はその中でも比較的大きいものを報告する。

189の外面、内面ともに摩耗しているが、部分的に横ナデ調整が確認できる。190の外面は突帯と刺突文が施されている。内面は斜め方向にナデ調整が施される。191の外面、内面ともに横ナデ調整が施されている。192の外面は横ナデ調整が施されている。内面はナデ調整と指跡が確認できる。

(2) 石器

本遺跡から出土した縄文時代の石器は、IV層上面、V層およびVI層から出土している。V層は1区から4-2区まで堆積が確認できた。遺物は石鏃や石斧などの製品から石核、剥片、砕片が多く出土している。VI層遺物についてはVI層上部より出土したものの、縄文時代と判断されるものを中心に報告する。

1. V層遺物分布

V層より出土した石器は、堆積が確認されている1区、2-2区、3区に集中する分布が認められる。

流紋岩

流紋岩は1区、3区に多く遺物が出土している。主な遺物としては石核や剥片、砕片が多く、製品は認められなかった。

硅質頁岩

硅質頁岩は1区と2-2区に集中が認められる。1区は流紋岩同様に石核や剥片、砕片が多く出土しており、製品は認められなかった。2-2区では石核や剥片、砕片も出土しているが、製品として石斧が1点出土した。

黒曜石

黒曜石の分布は遺物の集中が認められる1区、2-2区、3区より出土しているが、全体的にまばらな分布を示している。遺物も剥片、砕片が多く、製品は3区で出土した石鏃1点となっている。

その他の石材

その他の石材として、チャートや砂岩、尾鈴山酸性岩類が出土している。これらは1区、2-2区、3区に分布し、石核や剥片、砕片を中心としている。製品としては、チャート製の石鏃、砂岩製の敲石などが出土している。

第15表 縄文土器観察表

掲載 番号	種別	部位	文様		胎土	色調		備考
			内面	外面		内面	外面	
165	深鉢	口縁～胴部	ナデ	沈線文 刺突文	7mm以下の橙色粒。2mm以下の灰色粒。透明光沢粒。1mm以下の黒色光沢粒を含む。	橙色	橙色	
166	深鉢	口縁～胴部	ナデ	沈線文 刺突文	3mm以下の浅黄橙色粒。灰白色粒。黒褐色粒を多く含む。	橙色	橙色	
167	深鉢	胴部	ナデ	沈線文 刺突文	4mm以下の赤色粒。2mm以下の浅黄褐色粒。灰白色粒。黒色光沢粒。透明光沢粒を含む。	橙色	橙色	
168	深鉢	胴部	ナデ	沈線文 刺突文	4mm以下の灰白色粒。2mm以下の浅黄褐色粒。透明光沢粒を少し含む。	橙色	橙色	
169	深鉢	口縁付近	ナデ	沈線文 刺突文	3mm以下の明赤褐色粒。2mm以下の浅黄褐色粒。1mm以下の黒色光沢粒。透明光沢粒を含む。	橙色	橙色	
170	深鉢	胴部	ナデ	沈線文	5mm以下の灰白色粒。2mm以下の明赤褐色粒。1mm以下の透明光沢粒を含む。	にぶい 黄褐色	橙色	
171	深鉢	胴部	ナデ	沈線文	2mm以下の透明光沢粒。灰褐色粒を少量含む。5mm程度のにぶい黄褐色粒をごく僅かに含む。	明赤褐色	明赤褐色	
172	深鉢	胴部	ナデ	沈線文	2mm以下の透明光沢粒。灰褐色粒を少量含む。3mm程度の赤褐色粒をごく僅かに含む。	明褐色	明褐色	
173	深鉢	胴部	ナデ	刺突文 ナデ	2mm以下の灰白色粒。明赤褐色粒。透明光沢粒を含む。	にぶい 黄褐色	橙色	
174	深鉢	胴部	ナデ	沈線文 刺突文	2mm以下の黒色光沢粒を多く。透明光沢粒。1mm以下の灰白色。黒色光沢粒を含む。	橙色	橙色	
175	深鉢	胴部	ナデ	沈線文 刺突文	2mm以下の透明光沢粒。灰白色粒を多く含む。4mm程度の灰白色粒をごく僅かに含む。	明赤褐色	橙色	
176	深鉢	胴部	ナデ	沈線文	2mm以下の灰白色粒。黒褐色粒を含む。	橙色	橙色	
177	深鉢	口縁	ナデ	刺突文 ナデ	2mm以下の透明光沢粒を多く。1mm以下の灰白色粒。黒色光沢粒を少し含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
178	深鉢	口縁付近	ナデ	貝殻条痕文	2mm以下の黒色光沢粒を多く。透明光沢粒を少し含む。	にぶい 黄褐色	灰黄褐色	
179	深鉢	胴部	ナデ	沈線文	2mm以下の灰白色粒。黒色粒を多く含む。	にぶい 黄褐色	灰黄褐色	
180	深鉢	胴部	ナデ	山形押型文	4mm以下の灰白色粒。1mmの橙色粒。黒色光沢粒。透明光沢粒を含む。	浅黄褐色	橙色	
181	深鉢	口縁	ナデ	楕円押型文	2mm以下の暗褐色粒。黒色粒。橙色粒を少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色	
182	深鉢	胴部	ナデ	微隆起線文	2mm以下のにぶい赤褐色粒。黒褐色粒を含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
183	深鉢	胴部	貝殻条痕文	調整不明	2mm以下の浅黄褐色粒。赤色粒。1mm以下の透明光沢粒を含む。	にぶい 橙色	橙色	
184	深鉢	胴部	ナデ	貝殻条痕文	2mm以下の灰白色粒。黒色粒を含む。	橙色	橙色	
185	深鉢	胴部	調整不明	貝殻条痕文	2mm以下の透明光沢粒。灰褐色粒。灰白色粒を多く含む。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	
186	深鉢	胴部	ナデ	貝殻条痕文	2mm以下の灰白色粒。にぶい黄褐色粒。黒色光沢粒を少し含む。	にぶい 黄褐色	橙色	
187	深鉢	胴部	ナデ	貝殻条痕文	4mm以下の灰白色粒。灰褐色粒。橙色粒。2mm以下の黒褐色粒。黒色光沢粒。1mm以下の透明光沢粒を含む。	にぶい 黄褐色	明黄褐色	
188	深鉢	口縁	ナデ	調整不明	4mm以下の浅黄褐色粒。黒色光沢粒。3mm以下の黒色粒。1.5mm以下の透明光沢粒を多く含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
189	深鉢	胴部	ナデ	調整不明	8×5mmの灰褐色粒。2mm以下の灰白色粒。1mm以下の黒色光沢粒を少し含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
190	深鉢	胴部	ナデ	貝殻条痕文 ナデ	1mm以下の灰褐色粒。灰白色粒。透明光沢粒を含む。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	
191	深鉢	胴部	ナデ	ミガキ ナデ	1mm以下の黄褐色粒。灰白色粒。透明光沢粒を少し含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
192	深鉢	胴部	ナデ	貝殻条痕文	3mm以下の灰白色粒。1mm以下の浅黄褐色粒。黒色光沢粒。透明光沢粒を含む。	橙色	橙色	

1. V層遺物

石鏃について本遺跡より出土した石鏃は以下の通り
に分類を行った（第16表）。

A類は凹基無茎鏃で外形が二等辺三角形かつ基部の
挟りが深いものをA1類、二等辺三角形かつ基部の挟
りが浅いものをA2類、外形が正三角形に近く挟りが
浅いものをA3類、外形が正三角形で基部の挟りが深
いものをA4類、A4類に形状は酷似するが、基部の
先端が丸みを帯びているものをA5類とした。

B類は平基無茎鏃でB1類は外形が正三角形かつ基
部の挟りがないもの、B2類は外形が正三角形で基部
の両端が外側に開くものとした。

C類は円基無茎鏃でC1類は基部が緩やかに弧を描
くものとした。

打製石鏃（第47図193～196）

193、194、196はチャート製、195は黒曜石製の打
製石鏃である。193は挟りが浅く、外形が正三角形に
近い形状をしている。194は挟りが無く、外形が外に
膨らむ形状をしている。195は右半分が欠損している
が、残存している部分の形状は挟りが深く、外形が二
等辺三角形をしている。196は上部が欠損しているが、
残存部分の形状から194に類似した形状といえる。石
鏃の分類で行くと193の形状、194、196の形状、195
の形状というグループに分類できる。形状分類でいう
と193はB2類、194、196はC1類、195はB3類となる。

石斧（第47図197）

197は硅質頁岩製の石斧で、背面には稜面を残す。
第3次調査においても同様の形態の石斧（第77図
57）が出土しているが、197の方は厚みがある。側面
は背面から剥離調整を施す。

敲石（第47図198）

198は砂岩製の敲石で下部が欠損している。上部に
は使用痕剥離がみられる。左側縁には2つの小さな剥
離がみられる。

石核（第47図199、200）









199は流紋岩、200は硅質頁岩の石核である。199
は上部以外の5面に作業面があり、剥離状況から各面
ごとに縦長剥片素材を剥離させている。200は裏面
には自然面を残し、表面と上面で作業を行っている。表
面は横長剥片素材、上面は縦長剥片素材を取ってとみ

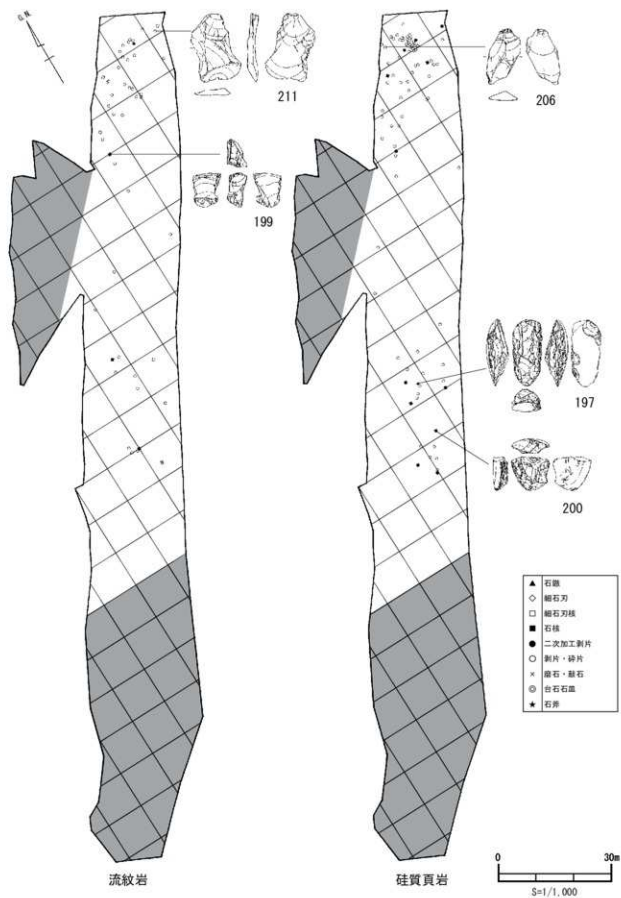
られる。

剥片（第47図201～205、第48図206～214）

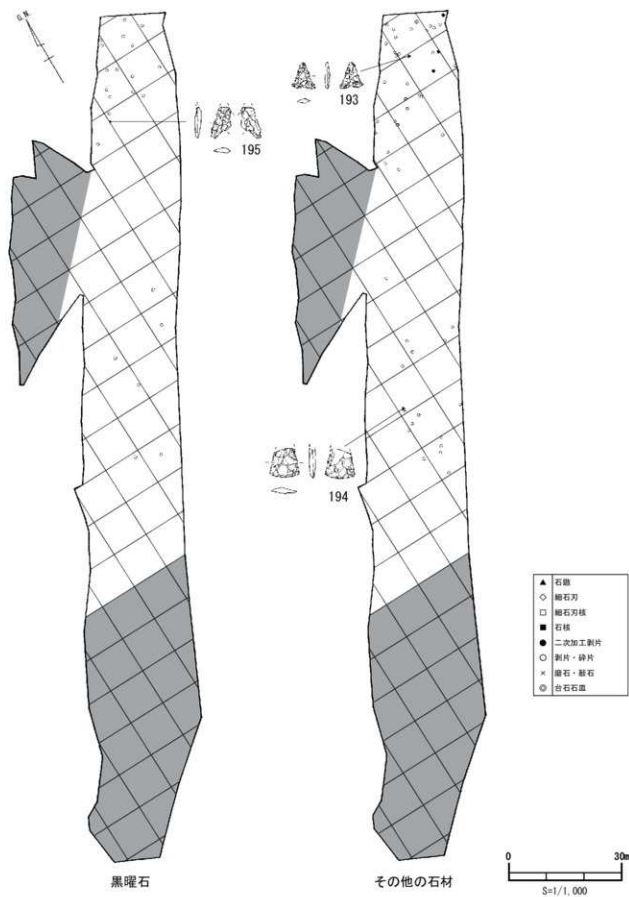
201～208は硅質頁岩、209～213は流紋岩、214
は尾鈴山酸性岩類の剥片である。201は背面に自然面
を残す縦長剥片である。上面、背面の剥離も縦長剥片
を取った作業面がみられる。202は縦長剥片である。
縦長剥片を複数回剥離させた作業面を残す表面と、1
面の剥離面による上下面、背面がみられる。203は縦
長剥片である。表面には数回の縦長剥片を取った作業
面を残し、背面は1面のみの剥離面である。204は縦
長剥片で上部、下部は欠損している。下部の右側縁に
は微細な剥離がみられる。205は縦長剥片で上部と下
部は欠損している。206～208、210は縦長剥片である。
表面には数回の剥離面がみられる。208には自然面が
残る。209は縦長剥片で、表裏面は1面の剥離面であ
る。右側面に数回の剥離がみられる。211は縦長剥片
である。表面には横長剥片を取った剥離面が見られる。
背面には小さな剥離面がある。212は縦長剥片で右側
面に自然面を残す。213は縦長剥片で下部は節理によ
り欠損している。214は接合資料の剥片である。中央
部分で折れている。

第16表 石鏃分類表

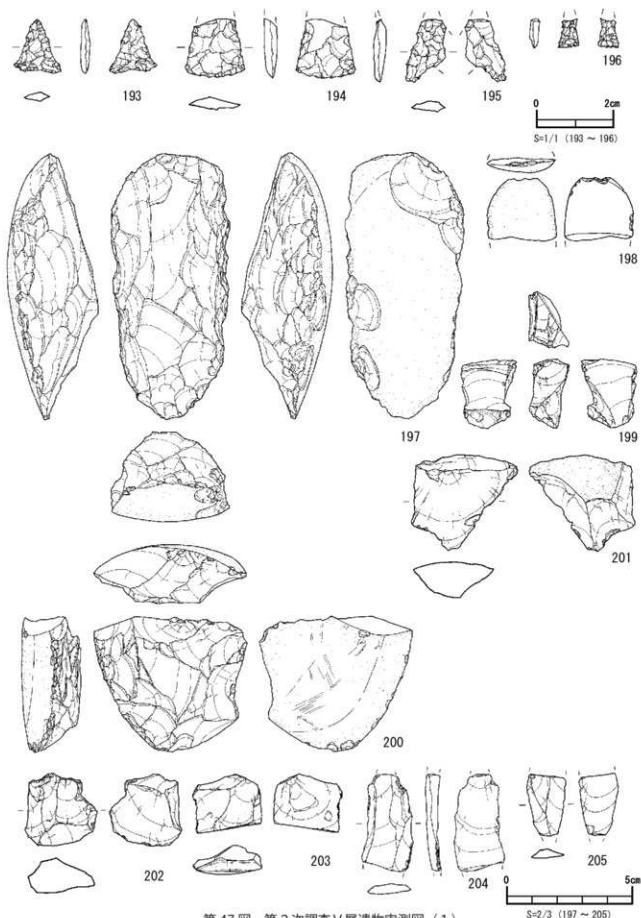
	A類 凹基無茎鏃	B類 平基無茎鏃	C類 円基無茎鏃
1			
2			
3			
4			
5			



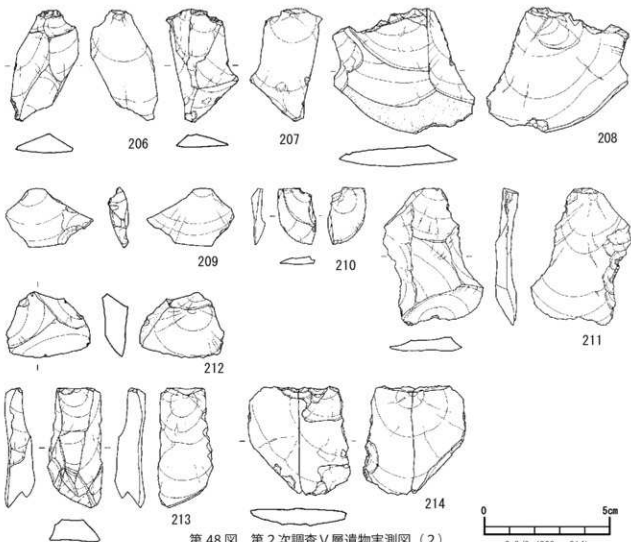
第 45 圖 第 2 次調査 V 層遺物分布図 (流紋岩・硅質頁岩)



第 46 図 第 2 次調査 V 層遺物分布図 (黒曜石・その他の石材)



第47图 第2次調査V層遺物実測図(1)



第48図 第2次調査V層遺物実測図(2)

第17表 V層遺物計測表

掲載番号	遺物番号	器種	石材	計測				備考
				長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	
193	17	石鏃	Ch	1.40	1.30	0.30	0.30	狭りが浅く、外形は正三角形。
194	51	石鏃	Ch	1.60	1.60	0.40	0.90	狭りが無く、基部は弧を描く。
195	849	石鏃	Ob6	1.70	1.00	0.30	0.40	狭りが浅く、外形は二等辺三角形。
196	419	石鏃	Ch	0.80	0.50	0.30	0.08	石鏃基部、上部は欠損。
197	68	石斧	SH	3.20	2.50	1.10	7.30	背面は自然面の石斧、両側面から調整。
198	50	敲石	Sn	5.10	5.40	1.20	40.20	下部、背面は欠損、上部に敲打痕。
199	863	石核	Ryu	2.70	1.60	2.20	7.80	縦長剥片素材を剥離。
200	122	石核	SH	5.40	6.10	2.40	81.30	縦長剥片素材、横長剥片素材を剥離。
201	117	剥片	SH	3.80	4.20	1.40	18.70	幅広剥片。
202	52	剥片	SH	2.90	2.80	1.40	11.00	縦長剥片。
203	86	剥片	SH	2.30	2.80	1.00	6.10	幅広剥片。
204	319	剥片	SH	3.90	2.00	0.40	4.00	縦長剥片。
205	803	剥片	SH	2.50	1.50	0.40	1.50	縦長剥片。
206	471	剥片	SH	4.40	2.70	0.80	7.40	縦長剥片。
207	833	剥片	SH	4.50	2.90	0.50	7.20	縦長剥片。
208	34	剥片	SH	5.00	5.70	1.30	26.30	幅広剥片。
209	317	剥片	Ryu	2.40	3.50	0.80	4.80	横長剥片。
210	309	剥片	Ryu	2.20	1.50	0.60	1.30	縦長剥片。
211	428	剥片	Ryu	5.50	4.00	0.90	12.20	縦長剥片。
212	114	剥片	Ryu	2.60	3.40	1.20	8.30	幅広剥片。
213	336	剥片	Ryu	4.80	2.20	1.20	11.80	縦長剥片。
214	138	剥片	Os	4.30	4.10	0.90	14.20	縦長剥片。

2. VI層遺物

石鏃 (第49図 215 ~ 225)

215は砂岩製、216、221は硅質頁岩製、217 ~ 218、224は黒曜石製、219、222、223はチャート製、220、225は流紋岩製の石鏃である。石鏃のタイプでは215、216、218、219は袈りが深く、外形は二等辺三角形の形状でありA1類である。217、220は袈りが浅く外形は正三角形の形状でありA2類である。221 ~ 223は袈りが無く基部は平坦でありB1類である。224は下部が欠損している石鏃未製品である。225は表裏面が調整途中の石鏃未製品で、刃部がまだ成形されていない。225は形状からA2類である。

石皿 (第49図 226)

226は尾鈴山酸性岩類の石皿である。表裏面に磨面、表面に敲打痕がみられる。

異形石器 (第49図 227)

228は砂岩製の異形石器である。分銅様くびれは背面までV字状の袈りが入る。

敲石 (第50図 228 ~ 230)

229 ~ 231は砂岩製の敲石である。229は上部に敲打痕がある。上部下部ともに剥離面があり、敲石を石核として使用したとみられる。230は下部に敲打痕があり、上部は欠損している。また表面にも敲打痕がみられる。231は背面が欠損している。上部に敲打痕があり、使用中に割れたものとみられる。

磨石 (第50図 231 ~ 232)

232 ~ 233は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。232は磨石として表面を使用しているが、僅かに敲打痕もみられ、磨石、敲石の併用とみられる。233は表面を磨面とした磨石である。

剥片 (第51図 233 ~ 237)

233、235、237は尾鈴山酸性岩類、234は砂岩、236はチャートの剥片である。233、237は縦長剥片である。234 ~ 236は縦長剥片である。

台石 (第51図 238 ~ 241、第52図 242 ~ 248、第53図 249 ~ 251)

台石はいずれも尾鈴山酸性岩類である。238は右側面が欠損しているが、表裏面に使用面がみられる。

239は上部が欠損しているが、表面に使用面がみられる。240は上下部が欠損しているが、表面に使用面

がみられる。241は中央部で割れていたものを接合した資料で、下部が欠損し、表面に浅い敲打痕がみられる。242は表裏面に使用面、下部には剥離面がみられる。243は右側面が欠損しているが、表面に使用面がみられる。244は表面に敲打痕、上部に剥離面がみられる。245は表面に使用面がみられる。246は右側面が欠損しているが、表面に使用面がみられる。247は表面に使用面がみられる。248は上部が欠損しているが、表面に使用面がみられる。249は右側面が欠損しているが、表裏面に使用面がみられる。

250は左側面が欠損しているが、表裏面に使用面、下部に剥離面がみられる。251は表裏面に使用面、上部左側縁に剥離面がみられる。

3. IV層遺物

石鏃 (第55図 252)

252は黒曜石製の石鏃で、袈りが深く、外形は二等辺三角形の形状をしているため、分類はA1類である。

石核 (第55図 254、258、第56図 263)

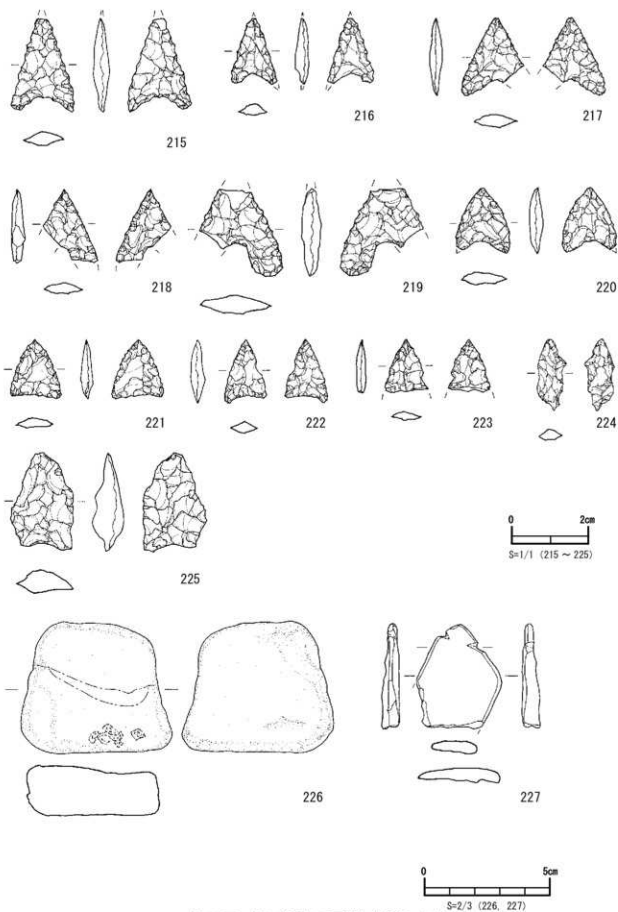
254、263は硅質頁岩、258は黒曜石製の石核である。254は主に縦長剥片素材を取ったものとみられる。263は背面に自然面を残し、背面以外に縦長剥片、横長剥片を取った作業面を残す。258は縦長剥片素材を取った作業面があり、表面上部に一部自然面を残す。

剥片 (第55図 253、255 ~ 257、260 ~ 262)

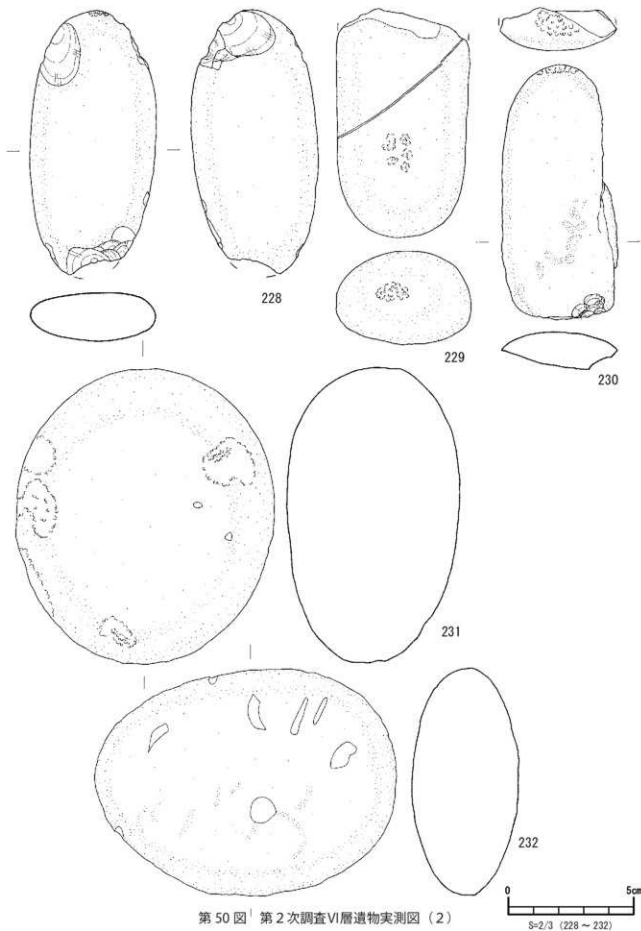
253は硅質頁岩、255、256は砂岩、257はチャート、260 ~ 261は尾鈴山酸性岩類、262は流紋岩の剥片である。253は横長剥片であり、下部に小さな二次加工と思われる剥離が見られる。255・256は縦長剥片であり、表面に自然面を残す。また表面には小さな剥離が見られる。257は縦長剥片である。260は横長剥片で、表面に自然面を残す。261は縦長剥片で、中央部で割れていたものを接合した資料である。両側縁部に中央に向かい調整をしており、二次加工剥片とみられる。262は縦長剥片であり、表面には3箇所縦長剥片素材を取った作業面がみられる。

台石 (第56図 264)

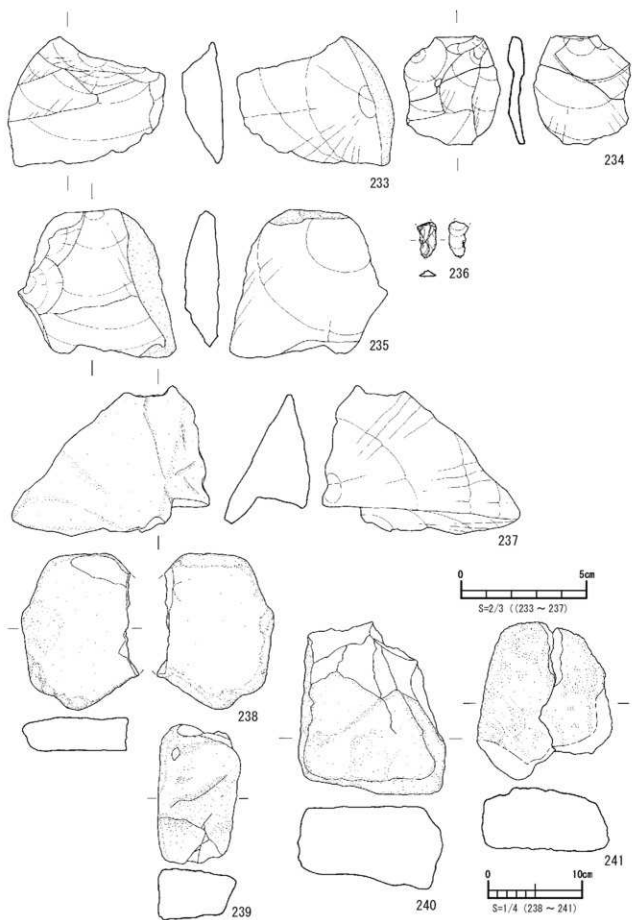
264は尾鈴山酸性岩類の台石である。表面には磨面がみられる。



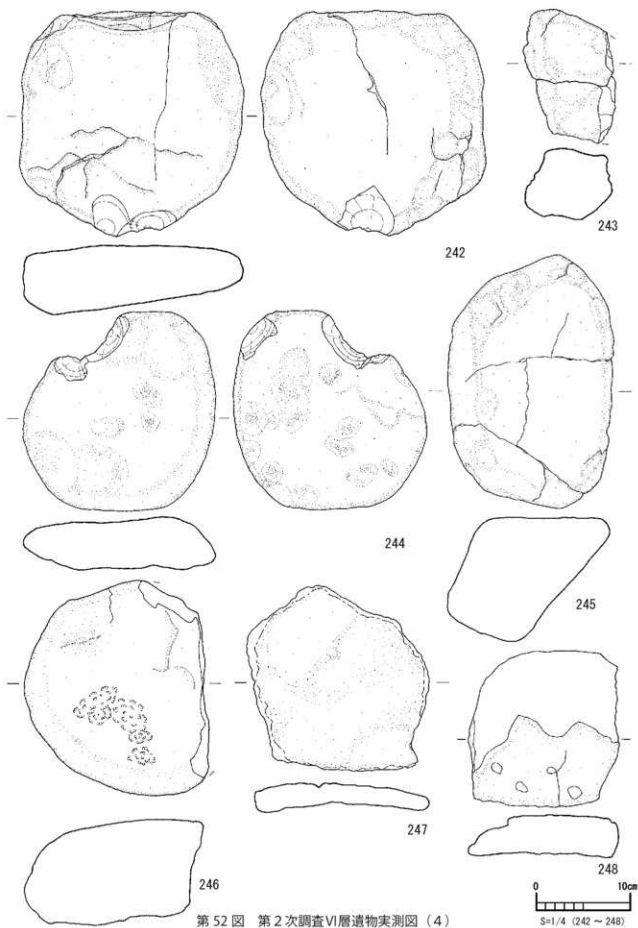
第49図 第2次調査VI層遺物実測図(1)



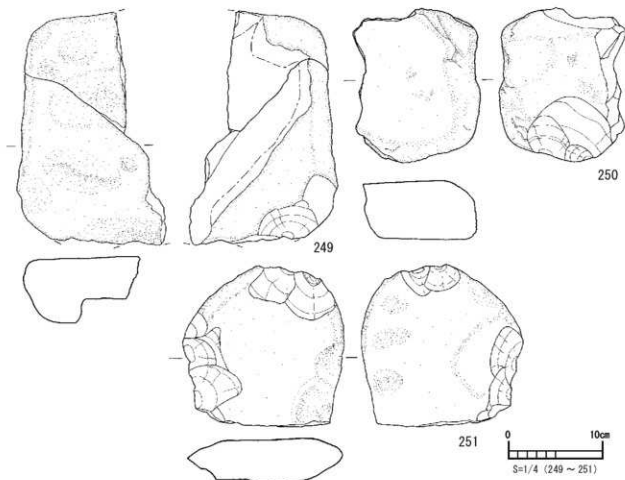
第 50 図 第 2 次調査VI層遺物実測図 (2)



第51図 第2次調査VI層遺物実測図(3)



第 52 図 第 2 次調査 VI 層遺物実測図 (4)



第53図 第2次調査VI層遺物実測図(5)

石鏃 (第57図265～268)

265～268はいずれもチャート製の石鏃である。265、266は挟りが浅く、外形が二等辺三角形に成形されており、A2類となる。266は右側縁の調整が少なく、上部が欠損している。このため、未製品と考えられる。267・268は基部がほぼ平坦であり、上部が欠損しているが、基部形状からB1類とする。左右の刃部は調整が施されており、欠損したため廃棄されたものとみられる。

細石刃核 (第57図269、270)

269は硅質頁岩製、270はチャート製の細石刃核である。269は表面に6筋の細石刃剥離作業面がみられる。270は表面、右側面、背面にそれぞれ細石刃の剥離作業面がみられる。下部は平坦に剥離したままの状態である。船野型細石刃核とみられる。

剥片尖頭器 (第57図271、274)

271は硅質頁岩製の縦長剥片素材を用いた剥片尖頭器である。上部は欠損している。両側縁を調整し成形している。274は砂岩製の縦長剥片素材を利用した剥

片尖頭器である。風化しているが、基部は打点部分を基に成形されている。また刃部に施された調整がみられる。この形の剥片尖頭器は本遺跡ではこの遺物が唯一の出土である。

ナイフ形石器 (第57図272)

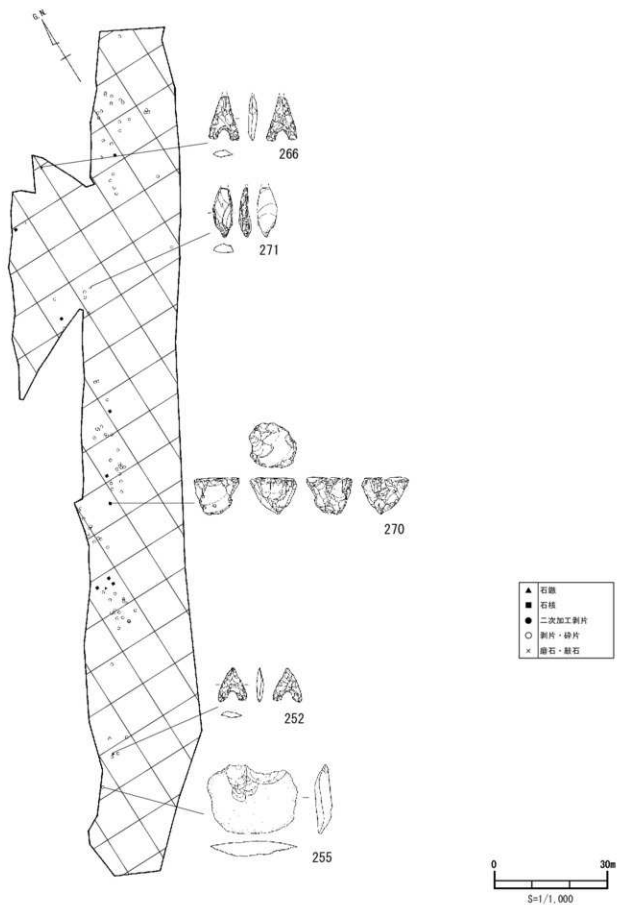
272は流紋岩製の縦長剥片素材を用いたナイフ形石器である。加工は打点部分を基部とし、左右両側縁と刃部に一部調整がみられる二側縁加工のナイフ形石器である。

石匙 (第57図273)

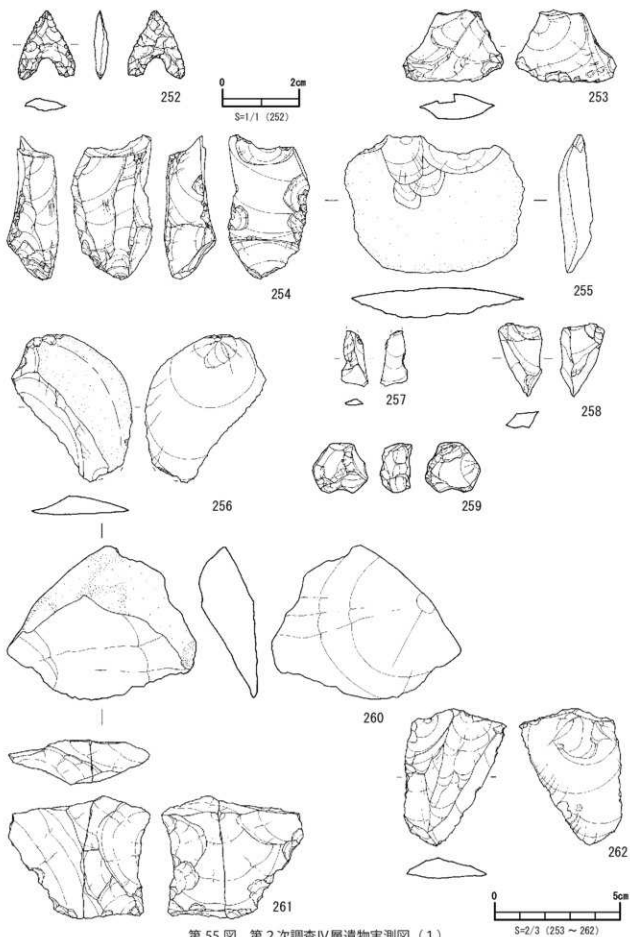
273はチャート製の石匙である。本遺跡で出土した石匙はこの1点のみとなっている。縦長剥片素材を利用しており、基部にくびれをもち、両側縁に細かな調整が施され刃部を成形している。

スクレイパー (第57図275)

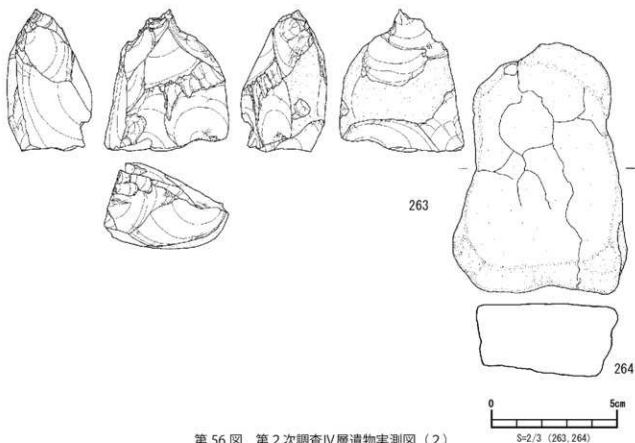
275は縦長剥片素材を利用した硅質頁岩製のスクレイパーである。両側縁に背面より小さな剥離調整が施され刃部を成形している。



第 54 圖 第 2 次調査IV層遺物分布圖



第 55 図 第 2 次調査IV層遺物実測図 (1)



第56図 第2次調査IV層遺物実測図(2)

剥片 (第57図276～278、第58図279、282、283)

276は流紋岩、277、283はチャート、278は硅質頁岩、279、282は尾鈴山酸性岩類の剥片である。276は縦長剥片素材を利用した石刃で、右側縁には小さな剝離がみられる。277～279および282、283は縦長剥片である。278、279の表面には自然面が残る。

敲石 (第58図280、288)

280、288は尾鈴山酸性岩類製の敲石である。280は上下ともに敲打痕がみられる。288は背面および上下が欠損しているが、第50図の230と同様の形状から敲石とみられる。

砥石 (第58図281)

281はホルンフェルス製の砥石である。側面部分には自然面を残しており、表裏面に縦横に複数の研ぎ跡がみられる。

磨石 (第58図284、287)

284、287は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。ともに表面に磨面がみられる。

凹石 (第58図286)

286は尾鈴山酸性岩類製の凹石である。表面に敲打

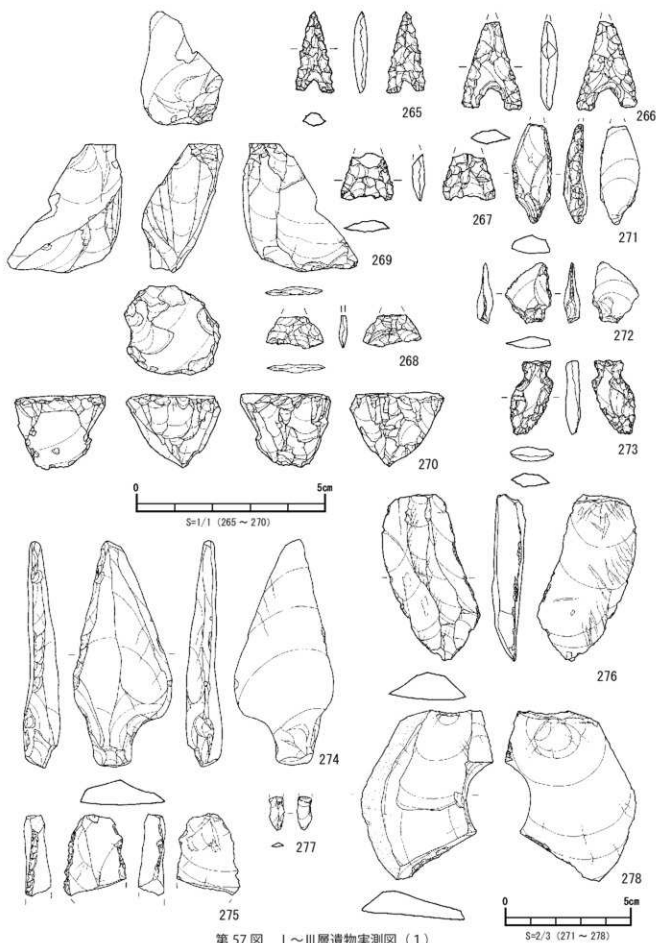
痕がみられ、背面には磨面がみられる。

台石 (第58図285、289～290、第59図291～294)

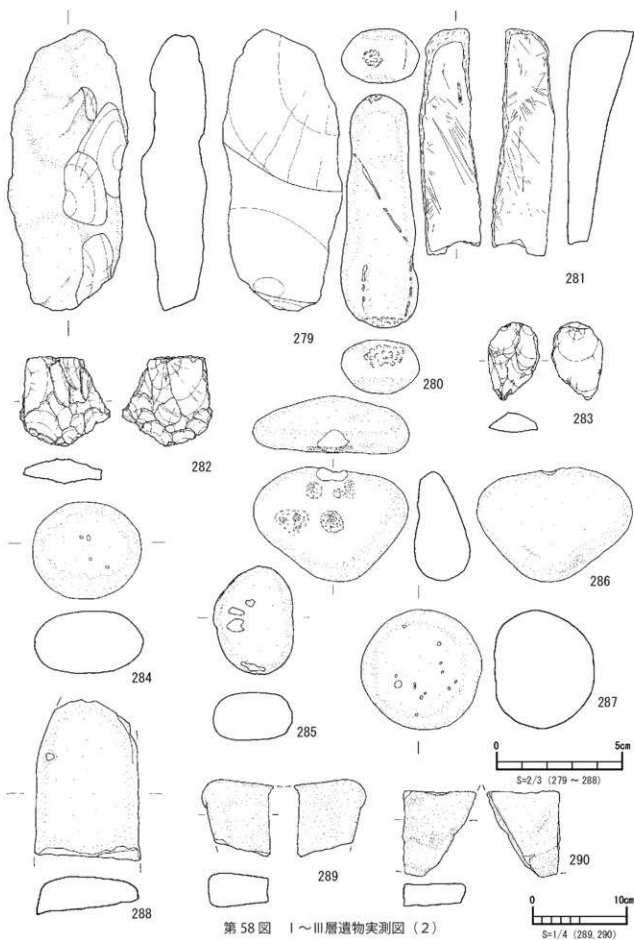
285、289～294の台石は全て尾鈴山酸性岩類の台石である。285は表面に磨面がみられる。289、290は表裏面に磨面がみられる。291は本遺跡出土の台石で最大のものである。表裏面、右側面それぞれに敲打痕がみられる。292は表面に大小の敲打痕がみられる。293は表裏面に敲打痕がみられる。294は表面に磨面がみられる。

縄文土器 (第60図)

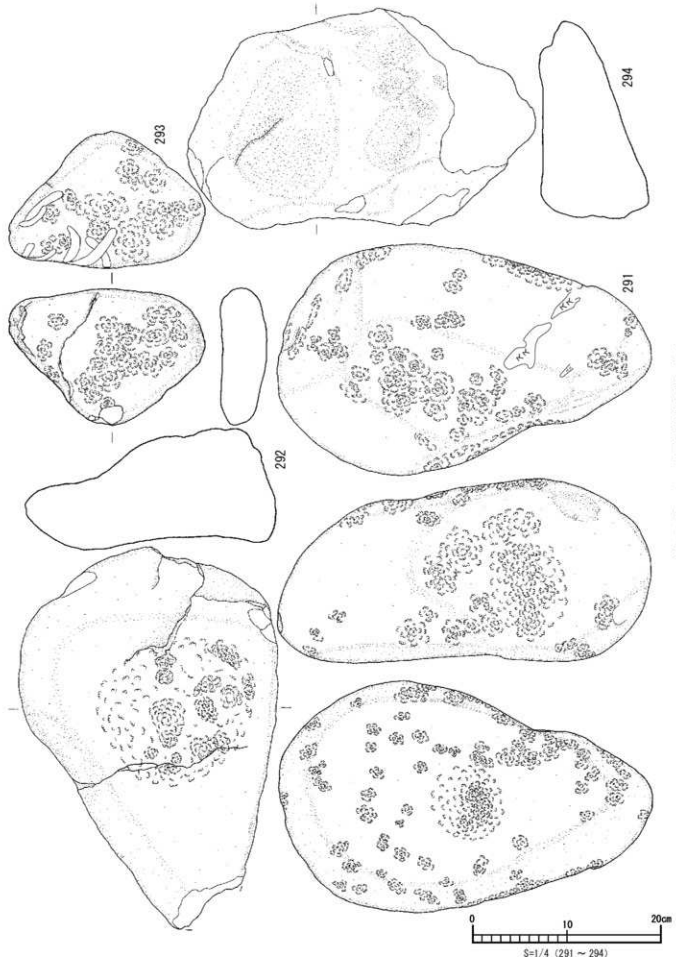
295は縄文土器B類、296は縄文土器C類に属する口縁部である。295の外縁は斜め方向に貝殻条痕文が施される。内縁は横から斜めの貝殻条痕文が施されている。口縁部にかけて大きく外反する。また粘土紐の部分で割れている。296の外縁は横および斜め方向のナデ調整が施されている。口縁部は大きく外反している。内縁は横ナデ調整が施されている。外面、内面ともに指跡が確認できる。



第 57 图 I ~ III 層遺物実測図 (1)



第58图 I~III層遺物実測図(2)



第59図 | ~III層遺物発掘図(3)

第18表 VI層遺物計測表

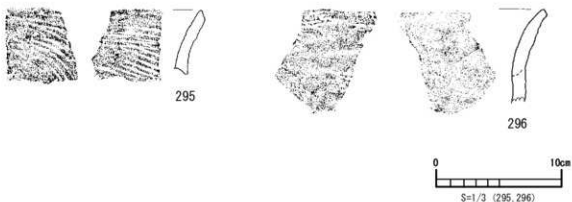
掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
215	1002	石鏃	Sn	2.50	1.70	0.40	1.20	挟りが狭く、外形は二等辺三角形。
216	1638	石鏃	SH	1.70	1.20	0.40	0.60	挟りが狭く、外形は二等辺三角形。
217	729	石鏃	Ob7	2.10	1.70	0.40	0.80	挟りが狭く、外形は二等辺三角形。
218	868	石鏃	Ob1	2.00	1.40	0.40	0.60	挟りが狭く、外形は二等辺三角形。
219	856	石鏃	Ch	2.30	2.20	0.50	1.90	挟りが狭く、外形は二等辺三角形。
220	739	石鏃	Ryu	1.70	1.50	0.40	0.70	挟りが狭く、外形は正三角形に近い。
221	620	石鏃	SH	1.60	1.30	0.30	0.50	挟りが狭く、外形は正三角形。
222	861	石鏃	Ch	1.70	1.10	0.40	0.50	挟りが狭く、外形は二等辺三角形。
223	880	石鏃	Ch	1.40	1.00	0.30	0.30	挟りが狭く、外形は二等辺三角形。
224	691	石鏃	Ob6	2.00	2.10	0.20	1.60	基部が欠損している。外形は細長い菱形。
225	1013	石鏃	Ryu	2.60	1.70	0.80	2.20	背面および刃部が未調整の石鏃未製品。
226	1137	石皿	Os	10.60	12.00	4.00	800.50	表面に使用痕。
227	1180	翼形石器	Sn	4.15	3.35	0.55	9.50	上部に溝を持つ。下部は欠損。
228	694	釵石	Sn	14.05	5.00	1.90	147.90	上部に釵打痕。下部は欠損。
229	1601	釵石	Sn	6.15	5.30	3.55	253.30	下部。表面に釵打痕。上部は欠損。
230	734	釵石	Sn	10.20	4.60	1.70	87.90	上部に釵打痕。
231	289	磨石	Os	10.25	11.80	6.80	1149.90	表面に磨面。
232	1301	磨石	Os	12.10	9.00	4.30	641.20	表面に磨面。
233	1360	剥片	Os	5.20	6.30	1.70	54.30	縦長剥片。
234	1358+1491	剥片	Sn	4.40	3.80	0.60	10.70	縦長剥片。
235	1602	剥片	Os	5.90	6.30	1.70	62.80	幅広剥片。
236	767	剥片	Ch	1.40	0.80	0.30	0.20	縦長剥片。
237	1401	剥片	Os	6.00	7.90	3.40	88.90	縦長剥片。
238	949	台石	Os	16.50	12.50	3.60	1225.00	表裏面に使用痕。
239	1098	台石	Os	13.90	11.70	6.60	1432.50	表面に使用痕。
240	1097	台石	Os	14.75	8.80	5.40	1089.00	表面に使用痕。
241	1106	台石	Os	12.60	10.90	5.10	771.20	表面に使用痕。
242	-	台石	Os	24.00	23.80	7.30	6000.00	表面に使用痕。
243	1316+1317	台石	Os	10.60	7.40	5.60	430.40	表面に使用痕。
244	-	台石	Os	24.00	20.50	5.50	3400.00	表裏面に使用痕。
245	-	台石	Os	23.00	13.20	10.00	3000.00	表面に使用痕。
246	1125	台石	Os	22.90	19.80	11.30	7750.00	表面に使用痕。
247	1230	台石	Os	14.90	14.50	2.30	544.70	表面に使用痕。
248	951	台石	Os	16.65	16.00	4.55	1890.00	表面に使用痕。
249	-	台石	Os	24.90	15.60	7.00	3100.00	表裏面に使用痕。
250	-	台石	Os	16.50	13.60	6.30	2250.00	表裏面に使用痕。
251	566	台石	Os	12.90	12.90	3.45	888.80	表裏面に使用痕。

第19表 IV層遺物計測表

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
252	1621	石鏃	Ob7	1.80	1.50	0.40	0.70	挟りが深く、外形は二等辺三角形。
253	866	刮片	SH	2.80	4.00	1.20	10.30	幅広刮片。
254	731	石核	SH	5.70	3.20	2.00	37.20	縦長刮片素材を剥離。
255	1626	刮片	Sn	5.50	7.10	1.30	48.40	幅広刮片。自然面を一部残す。
256	1617	刮片	Sn	5.90	4.90	1.20	22.50	縦長刮片。
257	561	刮片	Ch	2.20	1.10	0.30	0.40	縦長刮片。
258	726	石核	Ob1	2.90	1.80	0.70	3.40	縦長刮片。
259	1627	原石	Ob6	2.00	2.30	1.30	6.40	縦長刮片。
260	1056	刮片	Os	6.10	7.50	2.00	81.80	縦長刮片。
261	595	刮片	Os	4.90	5.60	1.70	36.10	縦長刮片。
262	1622	刮片	Ryu	5.40	4.10	1.00	19.90	縦長刮片。
263	730	石核	SH	5.60	5.00	3.40	92.60	縦長刮片素材、幅広刮片素材を剥離。
264	503	台石	Os	26.90	18.40	7.70	6500.00	表面に使用痕。

第20表 I～III層遺物計測表(1)

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
265	-	石鏃	Ch	2.20	1.00	0.40	0.70	挟りが浅い、外形は二等辺三角形。
266	970	石鏃	Ch	2.40	1.60	0.40	1.10	挟りが浅い、外形は二等辺三角形。
267	-	石鏃	Ch	1.30	1.40	0.40	0.60	挟りが無く、上部は欠損。
268	-	石鏃	Ch	0.95	1.50	0.20	0.25	挟りが無く、上部は欠損。
269	637	細石刀核	Ch	2.00	2.50	2.40	12.70	縦長刮片素材の細石刀を複数剥離。
270	-	細石刀核	SH	1.70	2.40	1.20	4.30	底部は一面の剥離面。縁辺を縦長の細石刀を剥離。
271	753	刮片尖頭器	SH	3.90	1.60	1.00	5.40	縦長刮片素材、二側縁加工。
272	-	ナイフ形石器	Ryu	2.40	1.80	0.60	1.90	縦長刮片素材、二側縁加工。
273	-	石匙	Ch	2.90	1.70	0.60	2.80	基部に挟り、刃部を加工。
274	-	刮片尖頭器	Sn	9.00	4.00	1.40	35.00	縦長刮片素材の打点を基部に成形。
275	-	スクレイパー	SH	3.20	2.50	1.10	7.30	縦長刮片素材、左右側縁に刃部加工。
276	-	刮片	Ryu	6.60	3.90	1.30	27.10	縦長刮片。
277	-	刮片	Ch	1.30	0.60	0.20	0.10	縦長刮片。
278	672	刮片	SH	6.80	5.20	1.10	39.50	縦長刮片。
279	668	刮片	Os	11.10	4.80	2.60	135.50	縦長刮片。
280	-	敲石	Os	9.30	3.10	2.20	84.80	上下部に敲打痕。
281	-	敲石	Hol	9.05	2.50	2.65	56.70	縁辺部は自然面を残す。
282	-	刮片	Os	3.60	3.60	1.20	12.90	縦長刮片素材。
283	-	刮片	Ch	3.10	2.00	0.80	4.80	縦長刮片素材。
284	-	磨石	Os	3.85	4.30	2.50	58.40	表面に使用痕。
285	-	台石	Os	11.60	8.60	5.10	702.50	表面に使用痕。



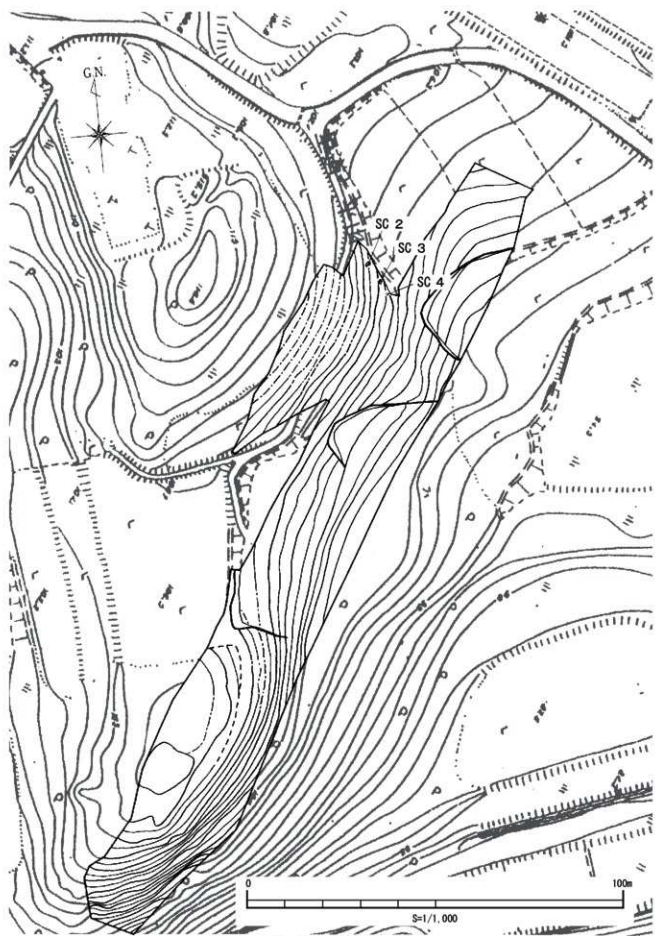
第60図 I～III層遺物実測図(4)

第21表 I～III層遺物計測表(2)

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長		幅		厚		重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(g)			
286	-	凹石	Sn	9.05	12.30	4.40	510.90	表面に使用痕。			
287	-	磨石	Os	4.80	4.75	3.95	131.90	表面に使用痕。			
288	688	砥石	Sn	6.45	4.20	1.50	46.50	上下部および背面は欠損。			
289	-	台石	Os	8.20	7.60	3.65	314.70	表裏面に使用痕。			
290	-	台石	Os	9.10	7.80	2.40	252.50	表裏面に使用痕。			
291	-	台石	Os	39.60	24.70	19.50	15000.00	表裏、側面に使用痕。煤が付着。			
292	-	台石	Os	40.90	27.70	12.70	15000.00	表面に使用痕。			
293	-	台石	Os	20.90	14.60	5.00	2400.00	表裏面に使用痕。			
294	-	台石	Os	36.70	23.50	11.30	13000.00	表面に使用痕。			

第22表 I～III層縄文土器観察表

掲載 番号	種別	部位	文様		胎土	色調		備考
			内面	外面		内面	外面	
295	深鉢	口縁	貝殻条痕文	貝殻条痕文	3mm以下の褐色粒、灰白色粒、2mm以下の赤褐色粒、透明光沢粒を含む。	にぶい 黄褐色	橙色	
296	深鉢	口縁	ナデ	刺突文ナデ	2mm以下の褐色粒、にぶい褐色粒、灰白色粒、1mm以下の淡黄褐色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒を多く含む。	にぶい 黄褐色	橙色	



第 61 図 その他の時代遺構分布図

第7節 その他の遺構と遺物

1. 概要

その他の時代の遺構として、IV層上面より土坑3基(第62図)、炭焼窯が1基検出された(第66図)。

遺物は弥生時代の磨製石鏃や弥生土器が出土している。また表土、造成土などから銭貨、煙管、近現代の陶磁器が出土している。

2. 遺構

土坑

土坑の検出箇所は、縄文時代早期の土坑の周囲より検出されている。しかし、土坑の切り合いは見られなかった。

SC1 (第63図)

SC1はK20aGrより検出された。検出面はV層上面である。この部分はIV層が攪乱を受けており、同層での遺構検出が出来ないためVI層上面での遺構検出を行った。規模は1.23m×0.78mで掘り込みは0.6mである。埋土にはIII層やIV層がブロック状に含まれて

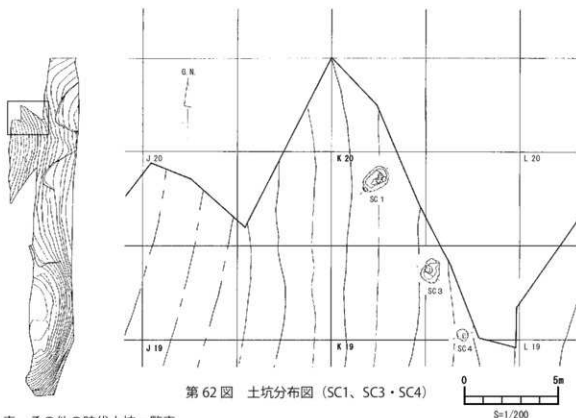
おり、アカホヤ火山灰降灰後に埋没したと考えられる。掘り込みは基本層序VIII層まで掘り込まれている状況であった。

SC3 (第64図)

SC3はK20cGrからK20dGrの境より検出された。検出面はVI層上面である。SC1同様にIV層では検出が出来ない状況のため、VI層での検出となった。SC3の規模は0.9m×0.7mで掘り込みは0.35mである。埋土は斜面堆積を成し、アカホヤ火山灰がブロック状に含まれている。また基本層序VIII層を含む。掘り込みは基本層序X層まで掘り込まれている状況であった。

SC4 (第64図)

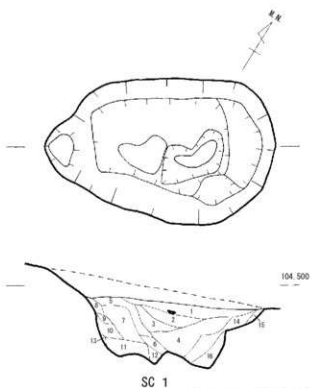
SC4はK20dGr境より検出された。検出面はVI層上面である。SC4の規模は0.45m×0.5mで掘り込みの深さは0.4mである。埋土はSC3と同様の堆積を成す。掘り込みは基本層序VI層まで掘り込まれている状況であった。



第62図 土坑分布図 (SC1、SC3・SC4)

第23表 その他の時代土坑一覧表

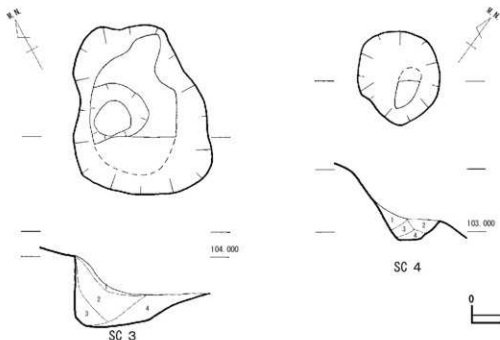
遺構 No.	検出層	Gr	長 (m)	幅 (m)	掘り込み (m)	平面形態	観察所見
SC 1	VI層	L20	1.23	0.78	0.60	横円	底面は水穴の攪乱を受け、凹凸がある。
SC 3	VI層	K19	0.90	0.70	0.35	横円	底面は凹凸があまりなく、平坦。
SC 4	VI層	K19	0.45	0.50	0.40	円	底面は凹凸があまりなく、平坦。



SC 1

第 63 図 土坑実測図 (SC 1)

遺構名	層序	土色	色調	注記
SC 1	1	黒褐色土	7.5YR2/2	5mm 程のアカホヤ粒子を少量含む。粘性は弱く、しまりは強い。
	2	黒褐色土	7.5YR2/2	10cm 程のアカホヤブロックを少量含む。粘性はやや強く、しまりは強い。
	3	黒褐色土	7.5YR2/2	1cm 程のアカホヤ粒子を少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	4	黒褐色土	7.5YR2/2	0.5mm 程のアカホヤ粒子、白色粒子を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	5	黒褐色土	7.5YR3/2	1~2 cm 程のアカホヤ粒子を多く含む。粘性、しまりともにやや強い。
	6	黒褐色土	7.5YR3/2	2~3 cm 程のアカホヤ粒子を少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	7	暗褐色土	7.5YR3/4	5~20 cm 程のアカホヤブロックが密に含まれる。粘性は弱く、しまりは強い。
	8	暗褐色土	7.5YR3/4	0.5mm 程の褐色、白色粒子を少量含む。粘性、しまりともに強い。
	9	暗褐色土	7.5YR3/3	1~2 cm 程のアカホヤ粒子を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	10	褐色土	7.5YR4/6	0.5mm 程のアカホヤ粒子を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	11	黒褐色土	7.5YR3/1	2~5 cm 程の暗褐色ブロックを多く含む。粘性、しまりともに強い。
	12	黒褐色土	7.5YR3/2	0.5mm 程の白色粒子を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	13	暗褐色土	7.5YR3/3	1mm 程の褐色、白色粒子を密に含む。粘性、しまりともにやや強い。
	14	黒褐色土	7.5YR3/2	1~5 cm 程のアカホヤブロックを少量含む。クワボクが多く含まれる。粘性、しまりともにやや強い。
	15	褐色土	7.5YR4/3	1 cm 程の灰色粒子、黒色粒子を少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	16	暗褐色土	7.5YR3/3	2~5 cm 程の暗褐色ブロックを多く含む。粘性はやや強く、しまりは強い。



SC 3

SC 4

S=1/30

遺構名	層序	土色	色調	注記
SC 3	1	褐色土	7.5YR4/3	1 cm 程度の褐色粒を多く含む。粘性やや強く、しまりは強い。
	2	褐色土	7.5YR4/3	0.5 cm ~ 1 cm 程のアカホヤ・褐色粒を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	3	褐色土	7.5YR4/3	5 cm 程のアカホヤブロックを少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	4	褐色土	7.5YR4/6	1mm 程の褐色・白色粒子を少量含む。粘性はやや強く、しまりは強い。

遺構名	層序	土色	色調	注記
SC 4	1	褐色土	7.5YR4/3	1 cm 程度 of 褐色粒を多く含む。粘性やや強く、しまりは強い。
	2	褐色土	7.5YR4/3	0.5 cm ~ 1 cm 程のアカホヤ・褐色粒を多く含む。粘性、しまりともに強い。
	3	褐色土	7.5YR4/3	5 cm 程のアカホヤブロックを少量含む。粘性、しまりともにやや強い。
	4	褐色土	7.5YR4/3	1mm 程の褐色・白色粒子を少量含む。粘性はやや強く、しまりは強い。

第 64 図 土坑実測図 (SC 3、SC 4)

ドーム型炭窯（第65図）

位置 2-1区の北東側に位置し、窯口の標高は100.106mである。緩やかな斜面地に立地する。窯から南東方向に約20m離れた所に心見川があり、窯との比高差は約10mである。窯の主軸は南東方向で、窯口は南東方向に開き、S-142°-Eをとる。

平面形 窯の平面形は三角形で、焚口の部分に頂点の一つがくるように作られている。窯口からみると煙道はほぼ正面に位置する。

平面規模・容量 窯内の長軸長2.8m、最大幅3.1m、窯底から天井材下面までの高さ0.75mである。

窯底 平坦で、傾斜はつけられていない。床面には厚さ10cmの粘土が貼り付けられており、その下部に亜角礫が敷き詰められている。亜角礫を設置したのち、その隙間に小礫を詰め込んである。その上に、厚さ約10cmの粘土を敷き詰め床面としている。

窯壁構造 壁体は円礫と亜円礫を用いて、一段積み上げるごとに粘土で目張りを施している。礫を約90cm積み上げたところで、壁体内面に厚さ約5cmの粘土を貼り付けている。壁体は煙道部分のスペースを空けて円礫と亜円礫を積み上げ、煙道を作ったのち、粘土で礫を覆っている。壁体の粘土はざらつきのある粘土で丁寧に整形したような痕跡は残っていない。

煙道 煙道は壁体に用いられたような円礫ではなく、角礫をもちいて構築されている。煙道内部は四角形、内壁は厚さ約6cmの粘土をもちいて丁寧に整形されている。側面には角礫の長軸方向を縦置きに設置し、奥壁は角礫の長軸を横方向に設置し積み上げる工法が取られている。煙道奥壁の背面には黒色化した底面から円礫が積み上げられている。

天井材 天井材はそのほとんどが窯内に埋没した状態で検出した。天井材は一気に押し込まれたような状態での検出であった。おそらく窯を廃棄する段階で、天井は取り壊され、そのまま窯の中に埋められたと考えられる。

焚口 焚口は煙道の向い側にある。検出当初、焚口には円礫や亜角礫を詰め込まれており、意図的にふさがれた状態であった。焚口の高さは約90cmで壁体の高さと同じである。幅は約50cmで、成人男性の肩幅よりやや狭い。焚口は壁体とは異なり、角礫を用い、

直線的に配置されている。

踊り場 踊り場は焚口から約50cm低い位置に作られており、焚口から外側に向かって「八」の字に広がる。外から見て右側には石垣状に円礫や角礫が積み上げられてあるが、左側は地山の削り出しによって造成されている。

遺物 遺物実測図については、踊り場の床面より約20cm上の攪乱土層から化粧品用の瓶が1点、踊り場の埋土の上部から磨製石織が1点出土した。

化粧瓶については昭和20年代ごろに流行した製品の瓶である。

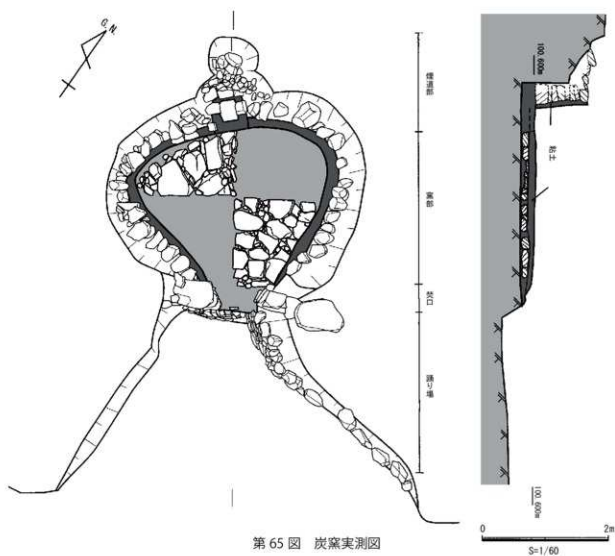
時期 炭窯の時期を知る手がかりは踊り場の床面近くから出土した昭和20年代の化粧品の瓶であるが、土地の旧地権者の方に聞き取り調査をおこなったところ、炭窯の存在については知らなかったとのことであった。加えて、昭和の初期から炭窯のすぐ近くに民家が作られており、その段階ですでに炭窯は存在しなかったとのことであった。

以上のことから、炭窯の使用時期については明確な答えはだせないものの、少なくとも昭和20年以前に炭窯は廃棄されていたということはわかる。

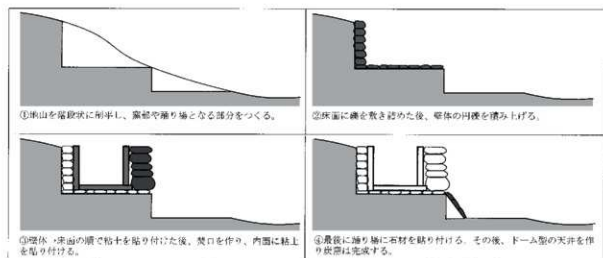
炭窯構築過程の復元（第66図）

最後に炭窯の構築過程を復元してみたい。まず、地山を削りだすことから始まる。地山を削り出し、煙道、壁面、窯底、踊り場となる部分を造成する。その後、石材を床面に敷き、壁体に積み、粘土を貼り付け窯底と壁体を作る。次に、焚口を作り、壁面に粘土を貼り付ける。そして、踊り場に石垣状の壁体を作る。最後にドーム型の天井を取り付けて炭窯は完成する。

なお、炭窯全体を覆う小屋の痕跡は検出できなかった。



第 65 図 炭窯実測図



第 66 図 炭窯構築過程の復元図

3 遺物

弥生土器 (第 67 図 297 ~ 299)

本遺跡で出土した弥生土器はこの 3 点のみである。297、298 は口縁部、299 は胴部である。297 は外面、内面ともに横ナデ調整が施される。器壁は厚く、大きく外反している。298 の外面は横ナデ調整が施されている。内面は欠損部分があるが、横ナデ調整が施されている。口縁部はやや外反する。299 の外面は工具による横ナデ調整が施され、内面も同様である。

磨製石鏃 (第 67 図 300)

300 は前述した炭焼窯の埋土中より出土した頁岩製の無茎磨製石鏃である。両面に磨研調整が施されている。表面は裏面と異なり、若干凹凸が残る。このため、製作過程の未製品と考えられる。

銭貨、煙管 (第 67 図 301 ~ 302)

銭貨 1 枚と煙管が 1 点確認された。ともに表土中よりの出土である。301 は寛永通宝であり、素材は鉄とみられる。よって新寛永通宝と考えられる。裏面には文様が無く、私鑄銭で無いと思われる。

302 は煙管の雁首の部分であり、灰を落とした際に出来たと思われる凹みが残る。羅字との接合部には目釘穴と見られる穿孔が認められる。よってこの煙管に用いられた羅字は鉄製ではなく、竹製のものを使用していたと考えられる。

近現代陶磁器 (第 67 図 303 ~ 311)

303 ~ 310、313 は近現代の陶磁器である。主に 2-2 区周辺より出土している。303 ~ 305 は口縁部で、308 は胴部、306 ~ 310 は底部である。309 の外面は底部付近に二重界線、見込みは露胎で蛇ノ目回み形高台である。内面は文様が施されている。残存率は約 1/2 である。310 は底部である。外面は界線を含む文様が施され、内面にも界線と文様が施されている。311 は甕の口縁部から胴部である。残存率は約 1/4 である。

播鉢 (第 67 図 312 ~ 313)

播鉢は 2 点出土している。312 は播鉢の口縁部で、外面の施軸は薄いが、播鉢自体に凹凸があり、凹部には軸葉が溜まっている。内面は一単位 12 条以上の播目が認められる。313 の外面は施軸が均一にされている。内面は一単位 15 条以上の播目が認められる。

統制陶器 (第 68 図 316 ~ 319)

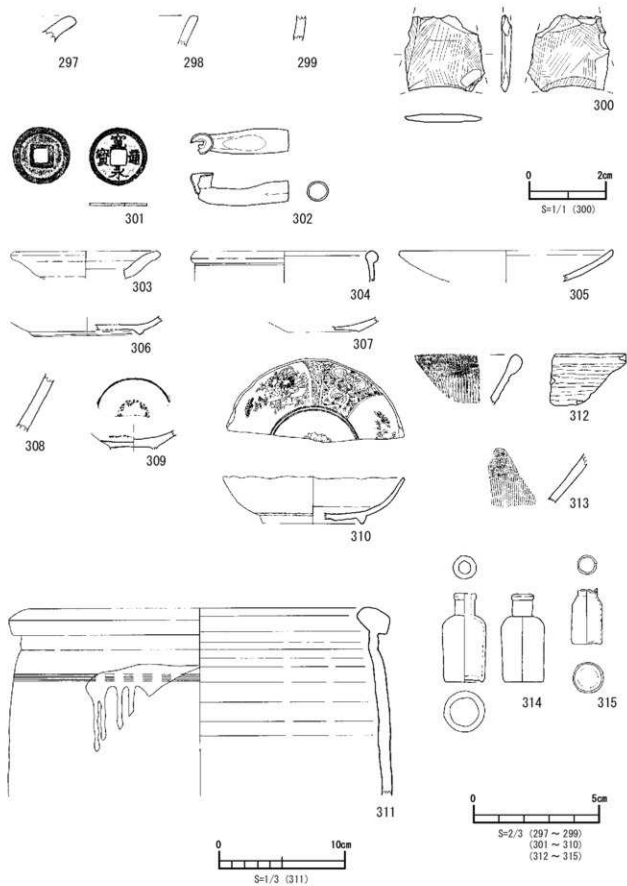
316、317 は統制陶器の軍用陶器である。口縁部から底部までが残存し、胴部中央には星章が刻印、もしくは押印で入れられている。316 はほぼ完形に近く残存している。外面に星章がゴム印されている。見込み部分には「肥」の文字が、半分欠損しているが 28 とみられる数字がクロム印で施されている。残存率は約 1/2 である。317 は同じく軍用陶器で胴部の星章は下半分が残存している。見込みには「有 80」の文字が陰刻されている。残存率は口縁部が約 1/4、底部が約 1/2 である。

318、319 は統制陶器である。318 の外面には一部コバルトの文様が残る。見込みに「岐 35」と凸印されている。残存率は底部で 1/4 である。319 は文様が無く、見込みに 318 同様「岐 35」の凸印が施されている。残存率はほぼ完形のものである。

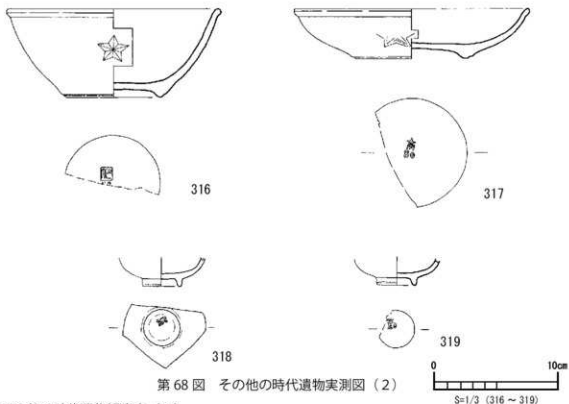
これらは戦時中に生産地が統制され、製作されたものであり、不明瞭なものもあるが、見込み部分に残されている統制番号を確認した。統制陶器は製作された窯跡や旧日本軍が駐留していた箇所で見られるものであり、都農町における戦時中の状況を知る資料となる。

第 69 図は都農町史を改編したものである。第二次世界大戦末期の当地域は、本土決戦に備え川南に上陸する敵への防御、宮崎平野に上陸する敵の側面を撃つ目的のため、川南町から都農町にかけて多くの部隊が配備されていた。都農町には第 212 連隊が配備され、本遺跡周辺では歩兵 516 連隊の作戦区域内にあり、心見川対岸に位置する牧内山を中心に、第 221 山砲兵隊が配備されている。また準備期間にあつては司令部があつたとされる。

316、317 のように陸軍章の入る軍用陶器などは部隊駐留跡以外では窯跡より見つかるもの、戦後周辺住民が廃棄されたものを再利用した程度である。よってこの軍用陶器については肥前や有田のものであり、窯跡という選択肢は無く、少なくともこの部隊で使用されていたものの可能性が高いと考えられる。



第 67 図 その他の時代遺物実測図 (1)



第 68 図 その他の時代遺物実測図 (2)

第 24 表 その他の時代遺物観察表 (1)

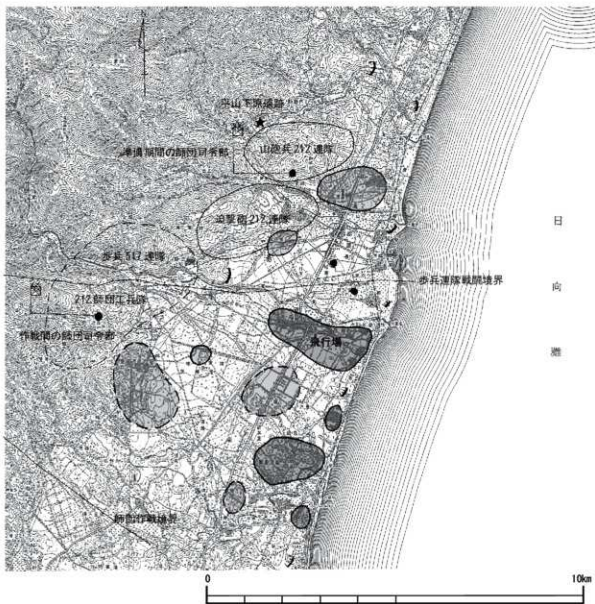
掲載 番号	種別	部位	文様		胎土	色調		備考
			内面	外面		内面	外面	
297	壺	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	2mmの褐色粒、1mm以下の灰白色粒、透明光沢粒を少し含む。	褐色	褐色	
298	壺	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	2mm以下の淡黄褐色粒、1mm以下の透明光沢粒を少し含む。淡黄褐色	淡黄褐色	褐色	
299	壺	胴部	工具による ヨコナデ	工具による ヨコナデ	1mm以下の灰白色粒、黒色光沢粒を少し含む。	淡黄褐色	褐色	

第 25 表 その他の時代遺物計測表

掲載 番号	遺物 番号	器種	石材	長	幅	厚	重	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
300	-	磨製石匙	SH	2.05	2.17	0.25	1.66	上部が欠損。磨製石匙未製品。

第 26 表 その他の時代遺物観察表 (2)

掲載 番号	種別	部位	法量			手法・調整・文様ほか		胎土	焼成	色調		備考
			口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面	外面			内面	外面	
301	貫水湯宝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
302	種管	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
303	皿	口縁～胴部	12.00	-	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	灰オリーブ	灰オリーブ	
304	壺	口縁～胴部	13.90	-	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	淡黄色	淡黄色	口縁付近に2mm幅の釉はぎがめぐる。
305	皿	口縁～胴部	16.90	-	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	淡黄色	淡黄色	
306	皿	胴部～底部	-	8.20	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	良好	灰白色	灰白色	
307	皿	底部	-	5.40	-	施釉 回転ナデ	回転ナデ	精良	堅緻	淡黄色	淡黄色	
308	壺	胴部	-	-	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	淡黄色	淡黄色	
309	皿	口縁～底部	14.30	8.00	3.60	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	灰白色	灰白色	底部付近に二重界線
310	碗	胴部	-	-	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	灰白色	灰白色	胴部に文様。界線
311	壺	口縁～胴部	36.10	-	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	
312	碟鉢	口縁	-	-	-	磨面	施釉	精良	堅緻	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	内面に1単位15以上の襷目
313	碟鉢	口縁付近～ 胴部	-	-	-	磨面	施釉	精良	堅緻	暗褐色	黒色	内面に1単位15以上の襷目
314	ガラス瓶	口縁部～ 底部	1.85	3.30	7.05	-	-	-	-	-	-	瓶全体に気泡が多い。やや緑がかった色調。
315	ガラス瓶	胴部～底部	-	2.40	-	-	-	-	-	-	-	口縁部は欠損。
316	壺 (軍用陶器)	口縁～底部	16.70	7.40	7.00	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	灰白色	灰白色	胴部にゴム印・星章、高台内にクロム印 (肥28か?)
317	壺 (軍用陶器)	口縁～底部	18.40	8.30	3.90	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	灰白色	灰白色	胴部に星章 (落刺)、高台内に凸印 (有80)
318	碗 (統制陶器)	胴部～底部	-	2.90	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	灰白色	灰白色	胴部に一部文様あり、高台内に凸印 (有35)
319	碗 (統制陶器)	胴部～底部	-	3.00	-	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	精良	堅緻	灰白色	灰白色	高台内に凸印 (有35)



第 69 図 都農町における旧日本軍作戦配備図

S=1/100,000



写真 4 昭和 22 年 米軍撮影空中写真(都農町上空)

第8節 小結

第1次調査、第2次調査においては、後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物が確認された。しかしながら後期旧石器時代の指標となるAT層の堆積が認められず、その位置付けが困難であった。本遺跡で確認された遺物集中層序は、後期旧石器時代ではIX a層、VIII b層、VI層下部の3枚、縄文時代早期ではVI層上部、V層の2枚である。各時代の遺物集中層序のVI層については同層位であるが、遺物混在層として調査区のほぼ全域に渡り堆積している。

今節では、各時代に相当する遺物集中層序を通して、考察を行う。

1. 後期旧石器時代

IX a層より出土した石器では、ナイフ形石器含まれるが、石器の特徴からナイフ形石器でも終末期のものと考えられる。VIII b層ではナイフ形石器と共に細石刃が出土していることから細石刃を含まないIX a層に関しては細石刃文化層以前の層と考えられる。

VIII b層については、ナイフ形石器と共に細石刃が出土している。しかし、この細石刃に関しては数量も少なく、斜面堆積による上位層からの混入の可能性がある。よってVIII b層の主体は細石刃よりもナイフ形石器にあると考えられる。よって、VIII b層は細石刃文化層以前の層と考えられる。

VI層については、VIII b層と同様にナイフ形石器と細石刃がともに出土している。しかし、VIII b層と比較すると細石刃の出土数が増加し、ナイフ形石器が減少するため、この層の主体は細石刃と考えられるため細石刃文化層と考えられる。

よって、VI層とVIII b層・IX a層には細石刃の出現前、出現後という時期差があると考えられる。

遺構

本遺跡の遺構としては礫群が3基検出されている。これらの礫群は、大きく2種類のタイプに分類される。

1類：平面形は円形で、礫は密集し、直径が1 m前後の規模のもの。

2類：平面形が細長い楕円形で礫は拡散し、直径が3 mを越えるものである。

1類はS I 2、S I 4がこれにあたる。礫は密集し、

赤化礫を多く含む。2類はS I 3がこれにあたり、赤化礫はわずかに含む程度である。全てVI層より検出され、分布も3基ともに1グリッド内に収まるほどの距離に存在する。このためこのタイプの違いが時期差になるとは考えにくい。

礫群のこのような形態は本遺跡のみならず、同じ都農町内の尾立第2遺跡や俵石第1遺跡などからも同様の礫群が検出されている。

2. 縄文時代早期

第1次・第2次調査における縄文時代早期の土器は前述したとおり大きく3つに分類できる。その中でI A類としたものは文様の構成、器形から熊本県の天道ヶ尾式に類するものと想定される。同調査より出土した縄文土器の大半がこの部類にあたると考えられ、B類とした楕円押型文、山形押型文、蚯蚓腫れ突帯を持つものなどは、掲載した3点のみの出土であった。II類の貝殻条痕土器は数量として少数であり、文様を伴う土器の割合はI A類：I B：II類となる。無文土器は厚手のものが多く、小片であるため器形の復元が困難である。

石器に関しては、石鏃や石斧、磨石や敲石、台石など狩りや調整に用いられるものが多く出土した。石鏃に関しては狭りが浅く二等辺三角形を成す形態のものが多く出土している。石材では黒曜石やチャートといった石材が多く使われ、石鏃の一部や石斧などには頁岩などが用いられている。磨石や敲石、台石などは尾鈴山酸性岩類のものがほとんどである。

縄文時代および旧石器時代に用いられる黒曜石の産地については、肉眼での同定を行い分類しているが、姫島産黒曜石を除く黒曜石全てが桑ノ木津留産、日東産といった南九州系の黒曜石であるのが特徴としてあげられる。

本遺跡の特徴として、前述した天道ヶ尾式と考えられる縄文時代早期の土器形式、石器に用いられる黒曜石の産地などから県内に位置する遺跡であるが、北部九州との繋がりが見えるのは姫島産黒曜石のみであり、南九州との繋がりが強い遺跡といえる。

第 27 表 第 1 次・第 2 次調査石器出土数・重量一覧表

石材	略称	石核	剥片	碎片	製品	計
流紋岩	Ryu	20	173	18	26	237
珩質頁岩	SH	37	198	163	17	415
ホルンフェルス	Ho1	17	75	17	1	110
黒曜石	Ob1	5	7	17	13	42
	Ob2	5	9	10	3	27
	Ob3	2	3	3	1	9
	Ob6	2	4	3	2	11
	Ob7	0	2	1	2	5
チャート	Ch	7	45	38	18	108
尾鈔山酸性岩類	Os	8	101	4	38	151
砂岩	Sn	5	26	4	13	48
水晶	Cry	1	1	12	0	14
計		109	644	290	134	1,177

器種	石材	数量	掲載数	重量 (g)	総重量 (g)
細石刃	Ryu	13	13	2.75	5.85
	SH	2	2	0.14	
	Ob1	10	10	1.82	
	Ch	2	2	0.88	
	Sn	1	1	0.26	
細石刃核	SH	1	1	4.30	30.30
	Ob2	1	1	13.30	
	Ch	1	1	12.70	
ナイフ形石器	Ryu	7	7	26.20	55.50
	SH	4	4	25.50	
	Ob1	1	1	0.90	
	Ch	1	1	2.90	
剥片尖頭器	SH	2	2	20.20	94.00
	Ho1	1	1	15.30	
	Sn	2	2	58.50	
尖頭器	Ob2	1	1	3.10	3.10
角錐状石器	Ryu	1	1	7.60	7.60
剛器	Ryu	1	1	47.20	250.20
	SH	3	3	50.70	
	Sn	1	1	152.30	
スクレイパー	Ryu	1	1	44.30	51.60
	SH	1	1	7.30	
彫器	Ryu	1	1	7.20	7.20
石器	Ryu	2	2	2.90	16.89
	SH	3	3	2.76	
	Ob1	1	1	0.60	
	Ob6	2	2	2.00	
	Ob7	2	2	1.50	
	Ch	13	11	7.13	
石斧	SH	1	1	40.20	40.20
石匙	Ch	1	1	2.80	2.80
隕石	Os	3	3	636.00	1,260.00
	Sn	7	6	624.00	
磨石	Os	6	6	2,018.80	2,300.80
	Sn	1	1	282.00	
石皿・凹石	Os	4	4	1,782.30	2,293.20
	Sn	1	1	510.90	
台石	Os	25	25	94,019.90	94,019.90
計		131	128		100,439.14

第V章 第3次調査の記録

第1節 調査の概要

平山原遺跡第3次調査は、道路や河川等により便宜上、調査区をA・B・C・Dの4区に分け南のA区から順に調査を実施した。B区については、B区上段と下段に分けた。

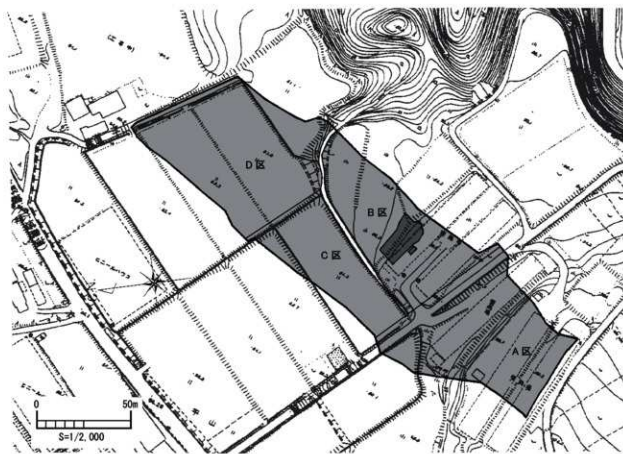
A区は本来、鶏舎跡地でコンクリートが一面に覆われていた。そこに、トレンチを7箇所設定し、重機にて掘削を行った。コンクリート直下は、造成土がみられその下からは明黄褐色の地山を確認した。A区は鶏舎建設の際に大部分を削平後、盛土造成がなされたと考えられる。

B区上段は、本来、鶏舎跡地でコンクリートが二面、東西に延びている。北側については、表土直下でII層

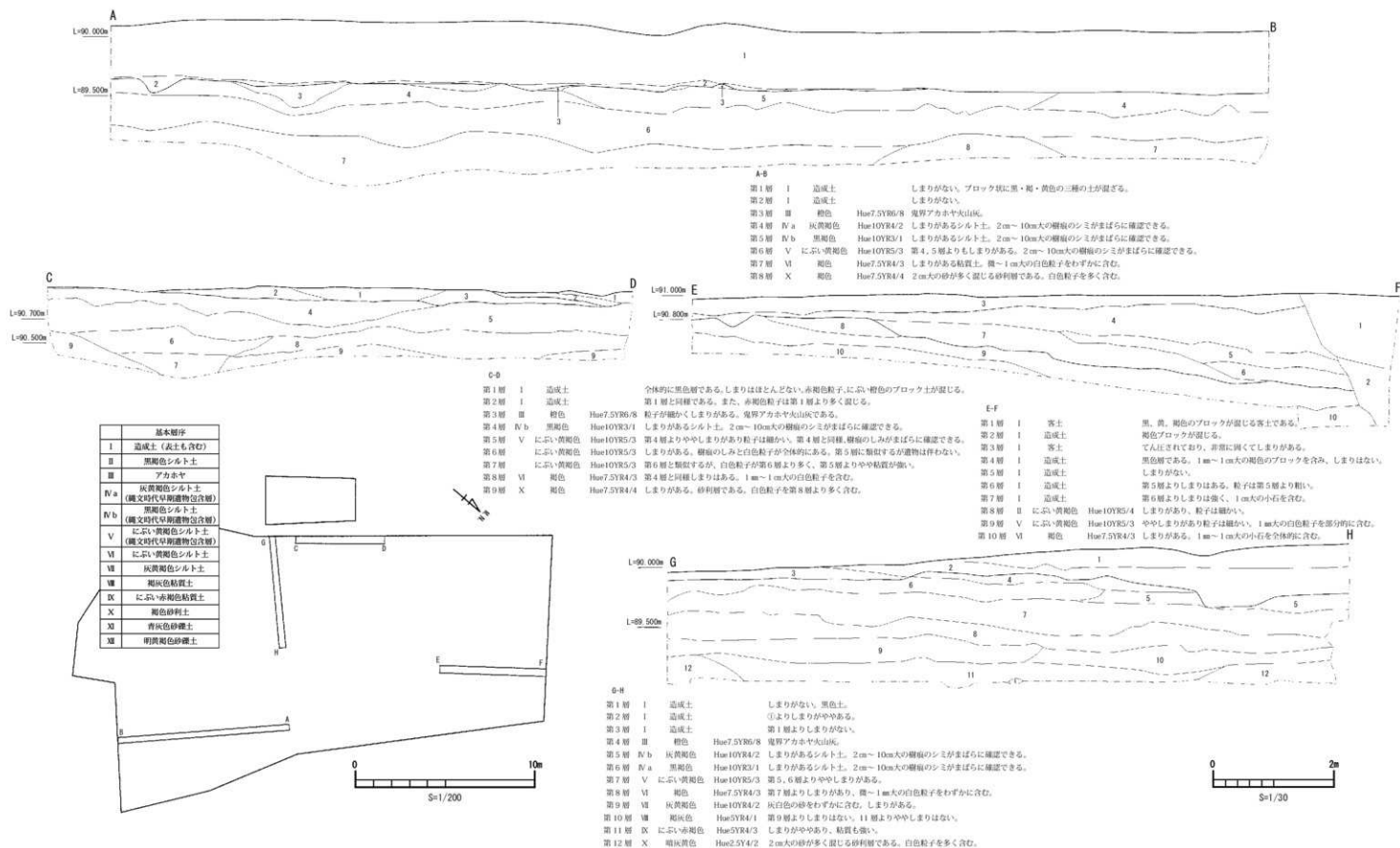
を確認できたので、重機により全面的にコンクリート・表土除去後、人力による掘削を行った。掘削の結果、アカホヤ層を確認し、IV・V層からは縄文時代早期の無文土器片、チャートや黒曜石製の剥片、碎片等を確認した。また、B区上段は、遺物包含層が良好な状態で残存しており、本遺跡における基本層序の基礎となる。

B区下段は本来、水田であった。北西側は、用水路に挟まれている。8箇所の特レンチを設定した。その結果、表土及び造成土直下よりXI層を確認した。

C・D区は昭和58年の基盤整備で盛土造成を行い、水田に改変している。トレンチをC区に3箇所、D区に15箇所設定し、重機にて掘削をおこなった。両区とも表土及び造成土の下は地山であったり、3m以上掘削を行っても造成土であったため、C・D区の旧地形は、北から下る谷地形であると考えられる。



第70図 第3次調査区調査範囲



第71図 第3次調査土層断面図

第2節 基本層序

- I層 : 表土、造成土
- II層 : 黒褐色シルト土 (Hue10YR5/4)
層厚およそ15 cmを測る。しまりがややあり、粒子が細かい。
- III層 : 橙色土 (Hue7.5YR6/8)
層厚およそ5～10 cmを測る。鬼界アカホヤ火山灰。
- IV a層 : 灰黄褐色シルト土 (Hue10YR4/2)
しまりがあり、2～10 cmの樹痕がまばらに含まれる。層厚はおよそ10 cmを測る。遺物包含層。
- IV b層 : 黒褐色シルト土 (Hue10YR3/1)
しまりがある。IV a層と同様、2～10 cmの樹痕がまばらに含まれる。層厚はおよそ10～20 cmを測る。遺物包含層。
- V層 : にぶい黄褐色シルト土 (Hue10YR6/4)
IV層よりしまりが強い。また、IV層同様、樹痕がまばらに含まれる。層厚は、10～20 cmを測る。遺物包含層。
- VI層 : にぶい黄褐色シルト土 (Hue10YR7/4)
層厚は、およそ20 cmを測る。しまりはある。1 cm程の礫を全体的に含む。
- VII層 : 灰黄褐色シルト土 (Hue10YR4/2)
層厚は、およそ20 cmを測る。しまりがある。灰白色粒子をわずかに含む。
- VIII層 : 褐色土 (Hue5YR5/4)
層厚はおよそ20 cmを測る。しまりはあり、粘りはややある。
- IX層 : にぶい赤褐色粘質土 (Hue 5 YR4/3)
層厚はおよそ20 cmを測る。しまりがあり、粘りが強い。
- X層 : 褐色砂礫土 (Hue7.5YR4/4)
層厚はおよそ20 cmを測る。白色粒子を全体に含む。砂利層。
- XI層 : 明青灰色粘質土 (Hue10BG7/1)
しまり、粘質強い。
- XII層 : 明黄褐色砂礫土 (Hue10YR7/6)

巨礫を含む。しまりが強い。

第3節 遺物包含層の認識

本遺跡の調査中及び調査後の遺物の認識は以下のとおりである。

IV a層 : 縄文土器、石鏃、剥片、碎片など。

IV b層 : 縄文土器、石鏃、剥片、碎片、台石など。

V層 : 縄文土器、石鏃、蔽石、碎片など。

今回、報告書作成において、調査中および調査後の遺物の検討などから、以下のことを考慮して報告する。

① 調査区のA区～D区までトレンチによる掘削をおこなったが、A区・B区下段・C区・D区については、遺物包含層を確認できなかったため、良好な遺物包含層が残存していたB区上段北側を中心に報告する。

② IV a層、IV b層は色調、土質で区別しているが、遺物の時期差を示すものではない。

③ IV層～V層にかけても同じくIV層とV層とが接合関係にある遺物も含むため、遺物の時期差を示す層位ではない。

④ 出土遺物数は828点であるが、遺物が小片で図化するのが困難なため、本報告書では56点を抽出し報告する。

⑤ 遺物包含層中の遺物は、平板とレベルにより位置を記録し取り上げた。

第4節 石材の分類基準

石器石材は、色調、手触り、自然面の特徴などを重視して分類を行なった(第IV章第3節)。

安山岩とサヌカイトの分類は、無斑晶質安山岩をサヌカイト、剥離面が薄く透過しているものを姫島産安山岩、その他を安山岩とした。

黒曜石については、透過性が低いもの、全く透過しないもの、灰白色を呈しているものと分類した。

また、剥片、碎片の便宜上、区別するために、長・幅・厚が1 cm四方内に収まるものを碎片、収まらないものを剥片と区別した。

第5節 縄文時代早期の遺物

縄文土器 (第73図)

本書で掲載した縄文土器は1～17である。取り上げをおこなった土器のほとんどは薄手の無文土器であり、その他2点だけ無文土器と異なる土器の小片が出土している。

390点の土器の取り上げを行ったが、そのほとんどは小片であるために接合が難しく、土器の口縁部から底部までの完全復元が困難であった。しかし、接合不可能であった土器の1点1点を観察すると、胎土や調整から同一個体の可能性があるものも確認できた。

無文土器 (第73図1～15)

1、2の器壁は約6mmである。1は、内外面ともに板状工具による斜め方向のナデ調整を行なっている。口唇部に関しては、縦方向にナデ調整を行なっている。

2の外表面は、斜め方向に板状工具によるナデ調整、内面はナデ調整をおこなっている。また、口縁部下およそ1.6cmの位置に、径6mmの円形の穿孔が2箇所みられる。3、4は内外面ともに横方向のナデ調整を行なっている。

5は1、2同様ナデ調整をおこなっているが、口唇部の形状が違う。1、2が丸く仕上げているのに対して5は平坦である。また、1～4の胎土に2mm大の小石がまばらに含まれるのに対し、5は2mm大の小石が全体的に見受けられない。器壁は約5mm程である。

6の器壁は約5mmで、やや内湾する。7の器壁は約5.5mmである。一定の厚みでやや直口する。

8～10は風化が著しく内外ともに調整は確認できなかった。9は風化が激しいが、薄手で口縁部にかけて直口する。8は内外とも横方向にナデが行なわれていると思われる。また、10は胴部から底部付近にかけて残存しており、底部付近の状況から尖底の可能性がある。

11、12の器壁は約7mmである。11は胴部から底部付近まで残存しており、土器の傾き具合から底部は尖底の可能性はある。また、12の底部は厚みがなくやや広角気味の尖底である。

13、14は繊維土器である。繊維土器の器壁は約7mmで、内外ともナデ調整である。胎土には、繊維の混

和痕が認められる。

15は1～14の土器と異なり、器壁が1cm前後の口縁部の小破片である。やや直口するが、口縁部下の指頭痕による成形でややくびれが認められる。しかし、外面が風化していること、残存器高が約22mmの小破片であるため、詳細は不明である。

第3次調査で出土している無文土器は、胎土、色調、調整から大きく7個体になる。

1、2、3、4、10、11、12は、胎土、色調、調整から、ほぼ同一個体可能性が高い。しかし、1と2では、口縁～胴部にかけての形態が少々違う。1は少し膨らむのに対し、2は口縁部から胴部にかけて直行し、器壁の厚さが一定している。

9、10は風化が激しく、内外ともに調整は不明であるが、器壁の厚み、胎土、色調から同一個体の可能性がある。

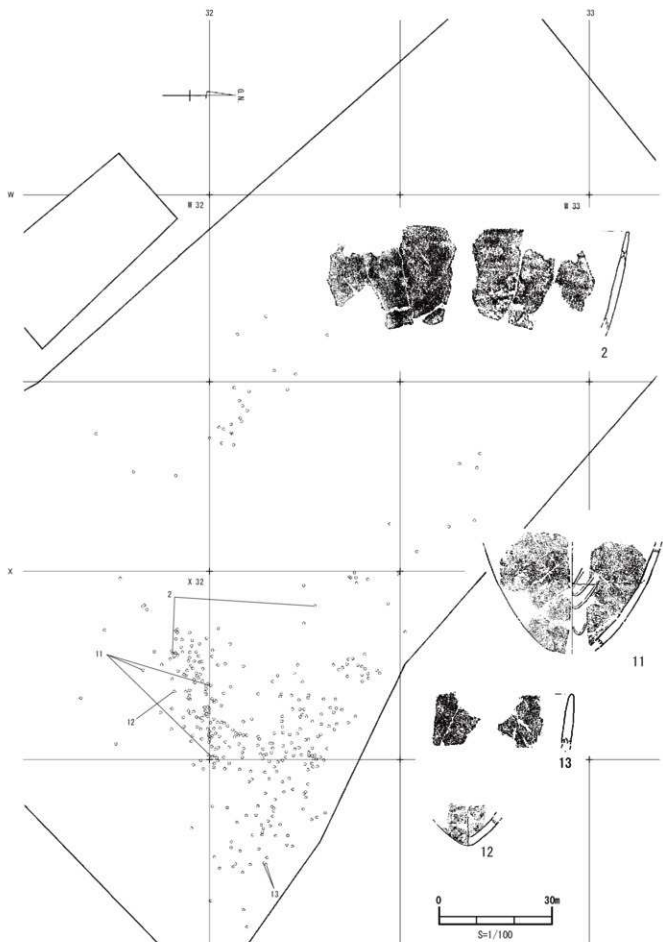
13、14は繊維土器である。本遺跡の25%がこの同一個体と考えられる繊維土器であったが、どれも小片で接合が困難であった。

その他の土器は、器形や胎土などから同一個体と認められない。

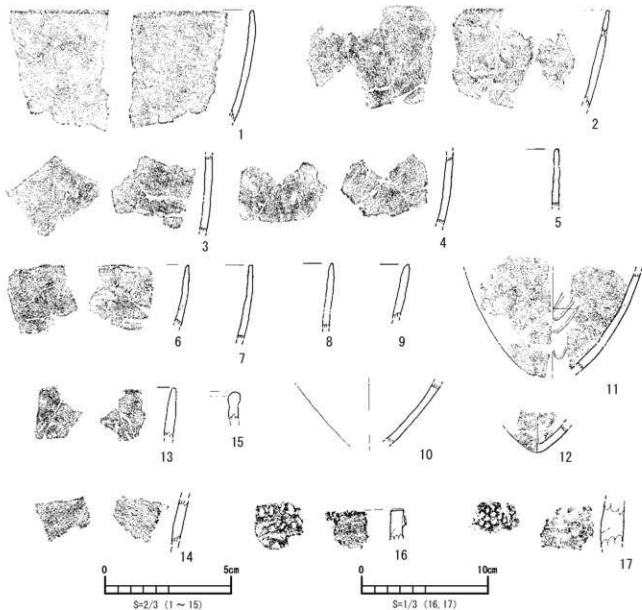
その他の土器 (第73図16～17)

16の器壁は約6.5mmで、口唇部に刻み目、口縁部下2.5mmの貼付上に刻みが施されている。

17は胴部である。器壁は8.5mmで菱形の模様を施した格子目の押型文土器である。



第 72 図 第 3 次調査縄文時代早期土器分布図



第 28 表 縄文土器観察表

掲載 番号	実測 番号	出土層位	種別	器種	部位	手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土	備考	同一個体 注記番号
						外周	内面		外周	内面			
1	1	V層	縄文土器	口縁	斜め方向の工具ナ 子、指環痕	ナ子	良好	紅土質 (10796.4)	紅土質 (10796.4)	3mm以下の白色、灰色、黄色、褐色、黒色などの点を多く含む。	口縁部に認められる。	○	760 V
2	2	IVb層、V層	縄文土器	深鉢	斜め方向の工具ナ 子	ナ子	良好	紅土質 (10798.4)	紅土質 (10798.4)	3mm以下の白色、灰色、黄色、褐色、黒色などの点を多く含む。	厚肉土器である。	○	4 V・104 IV b
3	5	IVb層	縄文土器	深鉢	縦方向にナ子	縦方向にナ子	良好	紅土質 (10796.4)	紅土質 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、白色、灰色、黄色、褐色、3mm程度の点を多く含む。		○	348 IV b
4	6	V層	縄文土器	深鉢	縦方向にナ子	縦方向にナ子	良好	紅土質 (10796.4)	紅土質 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、白色透明、灰色、黄色、褐色、3mm程度の灰色、褐色点を多く含む。		○	761 V・762 V
5	3	IVa層、V層	縄文土器	深鉢	縦・斜め方向にナ子	斜め方向にナ子	良好	紅土質 (10796.4)	紅土質 (10796.4)	2mm以下の白色、灰色、赤、褐色を多く含む。		△	477 IV a・724 V
6	4	V層	縄文土器	深鉢	斜め方向にナ子	縦方向にナ子	良好	紅土質 (10796.4)	紅土質 (10796.4)	2mm以下の白色、灰色、赤、褐色を多く含む。		○	228 V・240 V
7	10	V層	縄文土器	深鉢	縦方向にナ子	縦方向にナ子	良好	紅土質 (10796.4)	紅土質 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、白色透明、白色、灰色、褐色、褐色の点を多く含む。		▲	795 V
8	11	IVb層	縄文土器	深鉢	縦方向にナ子	縦方向にナ子	良好	焼 (3196.6)	焼 (3196.6)	4mm以下の黒皮状、灰色、白色の点を多く含む。	内外ともに黒化が著しい。	○	318 IV b
9	13	IVb層	縄文土器	深鉢	口縁	不明	良好	焼 (10794.6)	焼 (10794.6)	2mm以下の白色、黄色、褐色、褐色の点を多く含む。	内外ともに黒化が著しい。	■	472 IV a
10	12	IVa層、V層	縄文土器	深鉢	縦方向にナ子	不明	良好	焼 (10794.6)	焼 (10794.6)	2mm以下の黒皮状、白色、灰色、褐色の点を多く含む。	内外ともに黒化が著しい。	■	827 V・438 IV a
11	7	IVa層、V層	縄文土器	深鉢	斜め方向にナ子	斜め方向にナ子	良好	紅土質 (10796.4)	焼 (3196.6)	3mm以下の黒皮状、白色、灰色、褐色の点を多く含む。	灰土の可能性が高い。	○	70 IV a・81 V・227 IV b
12	9	IVb層	縄文土器	深鉢	底部	ナ子	良好	明赤焼 (10796.4)	明赤焼 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、白色透明、灰色、黄色、褐色、黒皮状の点を多く含む。	灰土	○	73 IV a・118 IV b
13	14	IVb層	縄文土器	深鉢	縦方向にナ子	縦方向にナ子、指環痕	良好	明赤焼 (10796.4)	明赤焼 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、白色透明、灰色、黄色、褐色、黒皮状の点を多く含む。	縁部土器	○	276 IV b・287 IV b
14	15	V層	縄文土器	深鉢	斜め方向にナ子	斜め方向にナ子	良好	明赤焼 (10796.4)	明赤焼 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、紅土質、白色、灰色、褐色、黒皮状の点を多く含む。	縁部土器	○	340 V
15	18	V層	縄文土器	深鉢	口縁	不明	良好	明赤焼 (10796.4)	明赤焼 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、紅土質、白色透明、灰色、黄色、褐色、黒皮状の点を多く含む。		○	620 V
16	16	IVb層	—	深鉢	斜め、ナ子	縦方向にナ子	良好	紅土質 (10796.4)	紅土質 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、白色、灰色、褐色の点を多く含む。	口縁部、口縁部に認められる。	▽	488 IV b
17	17	IVb層	縄文土器	深鉢	脚部	脚部	良好	明赤焼 (10796.4)	明赤焼 (10796.4)	特徴的な黒色皮状、白色、黄色、褐色の点を多く含む。	格子目文	○	122 IV b

石器（第75図～第77図）

本遺跡で出土した石器は18～58である。打製石鏃は未製品・破損を含め9点、敲石、石斧、台石がそれぞれ1点ずつ出土している。その他、剥片、砕片等が大量に出土しており、石材としては、チャート、西北九州産黒曜石、阿蘇象ヶ鼻産溶結凝灰岩、姫島産黒曜石、姫島産安山岩、安山岩、サヌカイト、ホルンフェルス、砂岩、尾鈴山酸性岩類等が挙げられる。

以下、製品、剥片等は石材ごとに説明していく。

打製石鏃（第75図18～26）

18～26は打製石鏃である。18は姫島産黒曜石製で平面形態が二等辺三角形で基部の挟りが浅く弧を描く。全面押圧剥離による整形である。

19～21はチャート製である。20は両基部中央から打って石を整形後、両端部から押圧剥離による整形である。背面左側は大きく剥離がされている。21は平面形態が二等辺三角形である。挟りが浅い。22～26はチャート製打製石鏃の未製品・欠損品である。22は基部両側が折れている。23は打製石鏃の未製品である。26は基部であると思われる。

剥片（第75図27～35 第76図36～49）

27、28はホルンフェルス製の横長剥片である。2点とも風化している。29は砂岩製の横長剥片である。27～29は礫面を一部残し剥離を行なっている。30は尾鈴山酸性岩類製の横長剥片である。31は流紋岩製の小剥片である。風化が進み白色に変化している。流紋岩は本遺跡では、1点だけの出土である。

32はサヌカイト製の砕片である。33・34は安山岩製の小剥片である。34は横長剥片であるが、明瞭な打点は確認されない。35は姫島産安山岩製の幅広小剥片である。

36～44はチャート製の剥片である。36は縦長剥片である。押圧剥離により器面調整がされている。37～40は、灰緑チャート製の小剥片である。41は白チャートの縦長小剥片である。下部が折れている。

42は上面に一部礫面を残す黒チャートの横長小剥片である。43は打面・打点が明瞭に残る赤チャートの横長剥片である。折れ面が小剥片と接合する。

44は2次加工剥片である。表面の両側面に2次加工痕がみられる。

45～48は腰岳産黒曜石製の剥片である。45は横長剥片である。打点と打面が明瞭に確認できる。46は縦長剥片である。押圧剥離により表面が調整されており、表面右上縁には、微細剥離が認められる。

47は縦長小剥片であり、左側面は礫面が残っている。背面下部には微細剥離が認められる。48は横長剥片である。押圧剥離により調整されている。

49は阿蘇象ヶ鼻産溶結凝灰岩製の幅広剥片である。風化が激しい。

石核（第76図50～52）

50～52はチャート製の小石核である。50は打点を移動させ、横長に剥片を剥離している。51は表面と裏面を主に剥離作業面としており、小剥離が認められる。52は阿蘇象ヶ鼻産溶結凝灰岩製の石核である。風化が激しいが打点を移動させながら5つの剥片の剥離が確認できる。

接合資料（第76図53～55）

55は53と54の剥片同士の接合資料である。石材は、針尾産黒曜石である。いずれもIV層からの出土である。また、2点とも2m内に出土している。

敲石（第77図56）

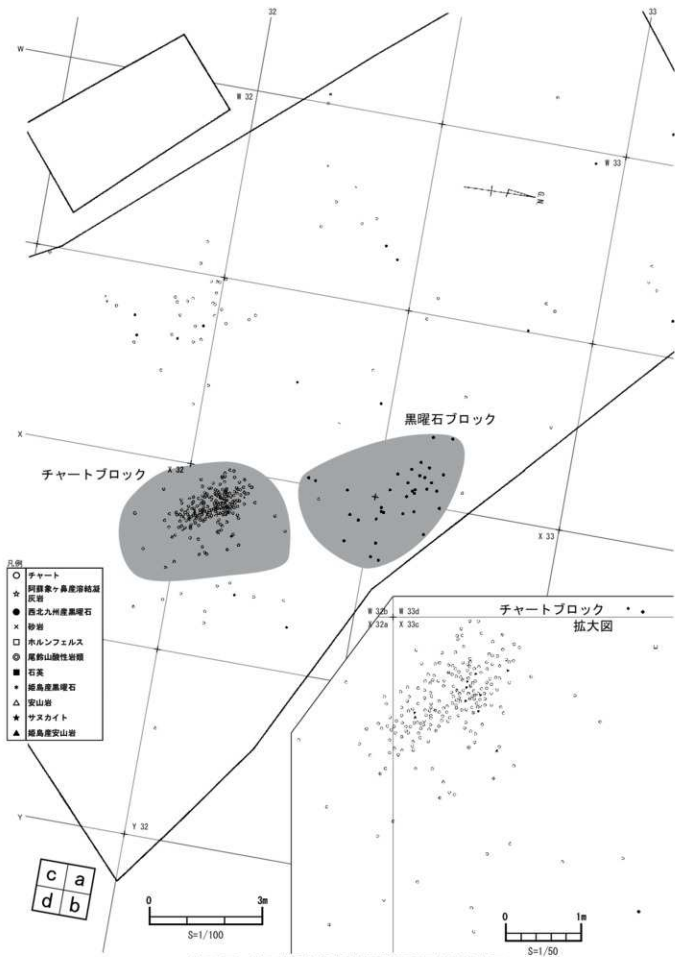
56は尾鈴山酸性岩類製の敲石である。底部に敲打痕が見られる。また、横方向の亀裂が底部にみられる。

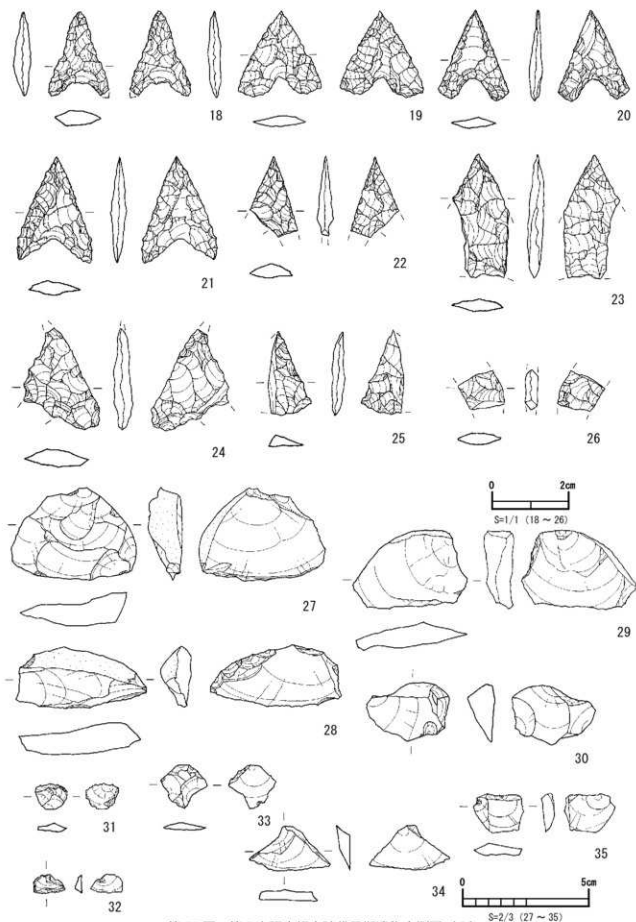
石斧（第77図57）

57は風化をしているが、ホルンフェルス製の石斧である。本来、剥離面が、背面になるのが一般的である。しかし、57の石斧は刃部の形からして逆であると思われる。そのため、この石斧は、礫面をうまく利用し、礫面を背面としている。腹面は両側面から剥離をおこない整形している。

台石（第77図58）

58は尾鈴山酸性岩類製の台石である。表面に磨痕がある。大きさは人頭大以上の大型の台石である。また、磨面を下にした状態で出土した。

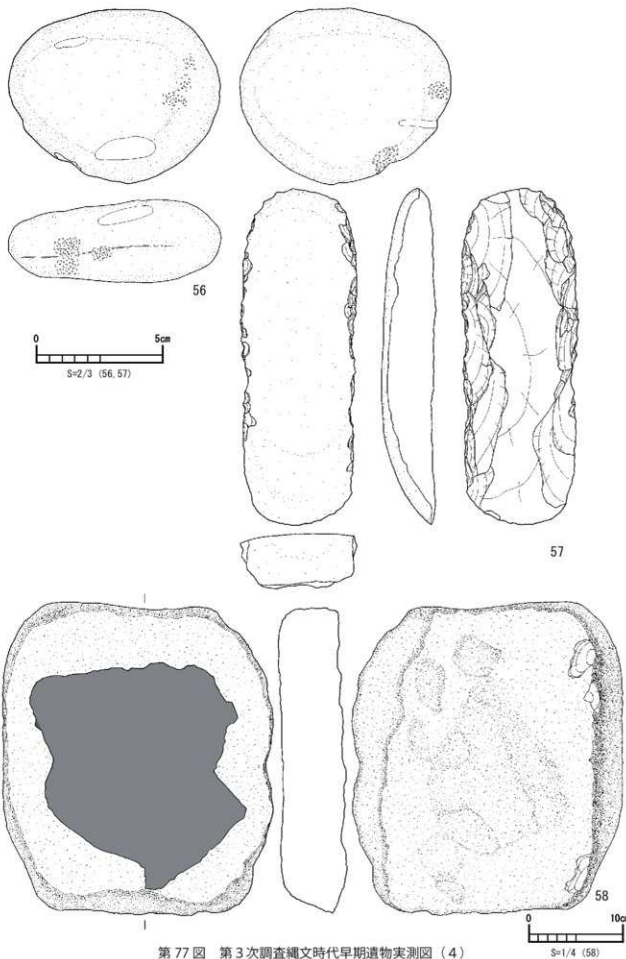




第 75 図 第 3 次調査縄文時代早期遺物実測図 (2)



第 76 図 第 3 次調査縄文時代早期遺物実測図 (3)



第 77 図 第 3 次調査縄文時代早期遺物実測図 (4)

第29表 石器計測表

掲載 番号	実測 番号	出土 部位	器種	石材	長	幅	厚	重	観察所見
					(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
18	4	V	石鏃	Ob6	2.3	1.6	0.45	0.95	製品
19	1	IV b	石鏃	Ch	2.3	2.2	0.35	1.17	製品
20	2	V	石鏃	Ch	2.4	1.8	0.35	0.89	製品
21	3	V	石鏃	Ch	2.8	2.0	0.4	1.42	製品
22	7	V	石鏃	Ch	2.1	1.3	0.4	0.75	基部欠損
23	8	IV a	石鏃	Ch	3.3	1.4	0.4	2.03	左側部欠損、石鏃未製品か。
24	5	IV a	石鏃	Ch	2.7	2.0	0.5	1.88	左側基部、左側部欠損。
25	6	IV b	石鏃	Ch	2.2	1.1	0.3	0.59	平部欠損、石鏃未製品か。
26	9	V	石鏃	Ch	1.1	1.2	0.35	0.50	基部残存、折れ。
27	37	V	削片	Ho	3.7	5.0	1.3	20.9	
28	36	V	削片	Ho	2.4	5.2	1.2	15.3	
29	35	IV-V	削片	Sn	4.4	3.3	1.0	16.6	
30	38	IV b	削片	Os	2.4	4.4	1.2	6.0	
31	34	V	削片	Ry	1.0	1.3	0.35	0.3	
32	32	V	砕片	An3	0.75	1.25	0.25	0.27	
33	31	V	削片	An1	1.7	1.9	0.2	0.7	
34	33	IV b	削片	An1	1.8	3.2	0.7	2.2	
35	29	V	削片	An2	1.55	2.0	0.55	1.4	
36	13	V	削片	Ch	4.9	2.6	0.65	4.9	反縁チャート
37	15	IV b	削片	Ch	1.95	2.6	0.4	1.8	反縁チャート
38	14	IV b	削片	Ch	1.35	1.95	0.35	0.7	反縁チャート
39	16	V	削片	Ch	2.0	1.55	0.35	0.96	反縁チャート
40	17	IV b	削片	Ch	1.35	1.7	0.15	0.3	反縁チャート
41	18	V	砕片	Ch	1.15	0.7	0.15	0.15	白チャート
42	21	V	削片	Ch	1.65	1	0.45	0.4	黒チャート
43	20	V	削片	Ch	2.1	3.0	0.55	4.54	赤チャート
44	12	IV b	二次加工削片	Ch	3.0	1.5	0.35	1.34	両側縁に二次加工痕あり。反縁チャート
45	23	IV b	削片	Ob4	1.7	3.3	0.9	4.3	
46	24	V	削片	Ob4	2.95	1.2	0.25	0.8	
47	25	V	削片	Ob4	1.9	0.8	0.45	0.4	
48	26	IV b	削片	Ob4	1.25	2.55	0.45	1.2	
49	30	IV a	削片	Aso-Iu	1.9	2.55	0.45	1.7	
50	19	V	石核	Ch	1.85	1.2	0.8	2.1	白チャート
51	22	V	石核	Ch	2.95	2.7	1.2	8.1	赤チャート
52	28	IV a	石核	Aso-Iu	2.0	1.75	0.8	2.5	
53	27	IV b	削片	Ob5	2.1	2.15	0.9	3.7	54と接合
54	27	IV b	削片	Ob5	1.9	2.3	1.05	3.5	53と接合
55	27	IV b	削片	Ob5	2.1	3.3	1.05	7.2	53・54接合資料
56	10	IV b	融石	Os	6.9	8.2	3.4	233.2	底部に融行痕、横方向の亀裂、製品
57	11	I	石斧	Ho1	13.4	4.6	2.2	194.8	製品
58	39	IV b	台石	Os	28.55	33.3	7.25	12500	磨痕有り

第30表 第3次調査石器出土数・重量一覧表

点数	石核	削片	砕片	製品	計	
チャート	2	80	191	8	281	
ホルンフェルス	0	2	2	1	5	
砂岩	0	1	0	0	1	
流紋岩	0	1	0	0	1	
尾崎山酸性岩類	0	2	0	2	4	
サスカイト	0	0	3	0	3	
安山岩	0	2	3	0	5	
	地島産	0	1	11	0	12
黒曜石	針尾産	0	2	0	0	2
	藤田産	0	9	29	0	38
	地島産	0	0	0	1	1
阿蘇産<>鼻産溶結凝灰岩	1	10	5	0	16	
計	3	110	244	12	369	
重さ(g)	石核	削片	砕片	製品	計	
チャート	10.2	74.96	13.87	9.32	108.35	
ホルンフェルス	0	36.3	0.56	194.8	231.66	
砂岩	0	16.6	0	0	16.6	
流紋岩	0	0.3	0	0	0.3	
尾崎山酸性岩類	0	33.0	0	13733.2	13766.2	
サスカイト	0	0	1.82	0	1.82	
安山岩	0	2.9	0.43	0	3.33	
	地島産	0	1.4	1.7	0	3.1
黒曜石	針尾産	0	7.2	0	7.2	
	藤田産	0	9.38	2.47	0	11.85
	地島産	0	0	0	0.95	0.95
阿蘇産<>鼻産溶結凝灰岩	2.5	4.7	0.6	0	7.8	
計	12.7	186.74	21.45	13938.27	14159.16	

第6節 小結

平山下原遺跡第3次調査では、Ⅲ層アカホヤ上面での遺構・遺物は確認できず、また、下位においても遺物のみの出土であったが、縄文時代早期の良好な遺物包含層が確認することができた。そこで第3次調査について若干の考察を行う。

第3次調査で出土した土器は、有文土器2点を除く388点すべてがナデ調整の薄手尖底無文土器であった。また、小片のため図化ができなかった中には、有文土器の無文部のものかは不明であるが、器壁1cmほどの厚手の無文片も数点出土した。また、全体点数の約19%は暗黄褐色の内外面共にナデ調整、約25%は繊維痕を含む内外面共にナデ調整が施されている土器である。その他は、風化、小片であった。

本遺跡の出土した無文土器の特徴として、器壁が約5～7mmの薄手であり、丁寧なナデ調整をおこなっている。また、胎土には角閃石や白色粒子や大きくて2mm～5mm大の小石が含まれている。器形は胴部から口縁部にかけて直口、或いはやや内湾する。底部は厚みがない幅広い尖底である。この無文土器に伴って、繊維を含む無文土器が出土している。口縁部の形状や胎土・調整などから第3次調査で確認できた個体数は7個体である。

それぞれの個体は、まとまって出土しているのではなく、土器の分布域に広く出土している。

本遺跡で出土した薄手の無文土器に類似したものは、縄文時代草創期末～早期前半の時期において、大分県や福岡県に多く分布している。また、大分・福岡県域において、薄手と厚手にわかれる。無文土器は初期押型文土器と器形、器壁、調整等が類似しており、押型文土器前段階もしくは併行しているものと考えられている。南九州において薄手の無文土器を主体とする遺跡は現時点での報告数は少ない。

また、本遺跡出土の無文土器の特徴から、口縁部が直口すること、胴部から底部にかけてすぼまり、底部は、胴部とやや厚さが一定な尖底であること、ナデ調整であることなどから二日市洞穴の第4文化層(下層)～第5文化層の段階に相当すると思われる。

また、押型文を施した小破片については、菱形に凹

部になす格子文である。破片からは詳しい時期については不明であるが、薄手の無文土器と伴い、格子文がある押型文であれば、おそらく川原田式～稲荷山式相当と考えられる。

刻目の突帯がある土器(16)については、隆帯文の可能性はある。しかし、隆帯文は草創期に位置づけられ、本遺跡の主な時期と異なるため紛れ込みの可能性はある。

一方、出土石器については、ほとんどが小ぶりの剥片・砕片等であった。また、石器石材については、産地が特定できる石器のすべてが西北九州産黒曜石や阿蘇象ヶ鼻産溶結凝灰岩、姫島産安山岩などの九州北半部のものであり、第1次・第2次で出土している日東産・牛鼻産・桑ノ木津留産などの南九州の石材は1点も出土していない。姫島産黒曜石は遺跡内では1点しか出土しておらず、姫島産安山岩の剥片、砕片は姫島産黒曜石に対して多く出土した。

姫島産安山岩の利用は、縄文時代早期前半に多く大分県域で利用されており、薄手の無文土器・姫島産安山岩の利用からみても、平山下原遺跡第3次調査の遺物は、縄文時代早期前葉に相当すると考えられる。

石器の分布状況は、黒曜石とチャートの2ブロックに分かれ、チャートブロックについては、出土したチャート製石鏃に対応すると考えられる1cm前後の剥片・砕片が多く出土している。実際、ブロック内でチャート製の石鏃未製品も出土した。また、チャートブロックの中には、阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩や姫島産安山岩などのチャート以外の石材も含まれている。しかし、どの石器石材も1cm前後のものが大半である。

黒曜石ブロックはチャートブロックと同様、1cm前後の黒曜石の剥片・砕片で構成され他の石材を含まない。

石核の出土は、剥片・砕片が多く密集しているのに対して調査内で3点のみである。しかも石核の出土数が剥片・砕片に比べて数が少なく、大きさも親指程の残核である。

チャートブロックの中には、剥片・砕片だけではなく同一石材と考えられる石鏃の未製品が出土したことから第3次調査区は、狩猟途中の石器の再加工場で

あった可能性が考えられる。

平山下原遺跡第3次調査区は、石器ブロックから生活痕跡は確認することはできたが、遺構の検出はできなかった。しかし、これらの状況から調査区周辺に遺構がある可能性は十分に考えられる。

以上、本遺跡第3次調査区の特徴をまとめると、

①石鏃と同種の剥片や破片が集中することから狩猟途中の石器の再加工場であった可能性。

②本遺跡で出土した無文土器は大分・福岡県域で縄文時代早期に広く分布すること、本遺跡で出土した産地が特定できる石器の全てが九州北半部のものであることから大分県・福岡県域との関係性、食料確保などの広域な狩猟領域の可能性。

③薄手の無文土器、姫島産安山岩の利用から縄文時代早期前葉に位置づけられる。

〈参考文献〉

- 編賀俊一 1999「九州縄文時代早期前葉から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会
- 橘 昌臣 1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』
別府大学付属博物館
- 編賀俊一 1996「第4章 隅弓遺跡」『隅弓遺跡発掘調査報告書』大分県文化財調査報告第93集
- 九州縄文研究会 2007「第17回 九州縄文研究会福岡大会 九州における縄文時代早期前葉の土器相」

第VI章 自然科学分析の成果

バリノ・サーヴェイ株式会社

第1節 自然科学分析の目的

本遺跡ではおおまかにIV層上面・V層・VI層・VIII層・IX a層で遺物が出土、IV層上位に位置づけられる土坑3基、VI層上部で集石遺構1基、土坑4基、VI層下部にて礫群3基を検出している。

しかしながらAT層の堆積が確認できず、VI層下部で検出した礫群と、VI層下層で出土した後期旧石器時代の遺物における出土層位との対応や、他遺跡との比較検討を行う上で、自然科学分析を行い、遺跡内の石器群の年代を推定できるだけでなく、隣接遺跡の既調査で明らかにされた遺物等との関連性を解明する手がかかりとした。

また、都農町は宮崎平野の北端にあたり、東九州自動車道建設の伴う発掘調査で、共通認識として捉えている宮崎平野の基本層序（第6図）にそぐわない部分が多くなっている状況である。今回のテフラ分析による結果を踏まえ、今後の宮崎平野北部における基本層序の検討材料としても利用していく。

第2節 試料と分析方法

1 試料

今回の分析にあたり、本遺跡では4-2区のI15b

グリッド西壁（第7図Gトレンチ）より基本層序III層以下の土層サンプルを採取し、分析を実施した。サンプルは5cmごとに設定採取したのち、34点について、火山灰分析を行った。

2 分析方法

分析の手順は以下の通りである。

- 1) 試料約40gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 分析篩を用いて1/4-1/8mm以下の粒子を除去。
- 4) ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離。
- 5) 重鉱物：偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定。不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものみを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒及び変質等で同定不可な粒子をその他とする。
- 6) 火山ガラス比：重液分離した軽鉱物分を砂粒250粒数え、量比を求める。火山ガラスの形態によりバルブ型、中間型、軽石型の3タイプに分類。各形態は、バルブ型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状、軽石型は、小気泡を非常に多く持った塊状および、気泡の長く伸びた繊維束状である。

第3節 分析の結果

1 重鉍物分析

重鉍物はXIII層からX層までは、ほとんど不透明鉍物のみであり、IXc層から少量の斜方輝石が含まれ、V層まで上位に向かい斜方輝石が増加し、不透明鉍物は減少する。IXc層からは微量の単斜輝石も伴い、量は少ないが、斜方輝石と同様に上位に向かい増加傾向を示す。V層およびIV層では斜方輝石および単斜輝石は下位に比べ減少する。

2 火山ガラス比分析 (第78図)

火山ガラス比はX層以下ではほとんど火山ガラスは含まれないが、IXc層以上に少量のバルブ型および軽石型が含まれる。バルブ型は、IXc層からVIIIb層に向かい増加傾向が認められ、VIIIb層中ではほぼ一定量である。VIIIb層最上部では減少、V層およびIV層で急激な増加を示す。軽石型はVIIIb層に比較的多く含まれる傾向が認められる。V層およびIV層の火山ガラスには褐色を帯びたものも少量認められる。

3 屈折率測定 (第79図～第82図)

屈折率測定は、重鉍物組成および火山ガラス比結果に基づき、主に火山ガラスと斜方輝石を屈折率の測定対象とした。図79～80は火山ガラスの屈折率をヒストグラムに示し、図81～82は斜方輝石の屈折率をヒストグラムで示したものである。

火山ガラスは、概ね $n_{1.504} - 1.512$ 、モードが $n_{1.507} - 1.509$ だが、VIIIa層下部からIXc層にかけては $n_{1.499} - 1.500$ と非常に狭い値を示している。

斜方輝石は概ね $r_{1.704} - 1.709$ の値を示すが、VIIIb層上部からVIIIb層中部では $r_{1.725} - 1.730$ と高い値を示す。

VIIIb層最下部では $r_{1.709} - 1.712$ と $r_{1.724} - 1.730$ 、IXa層下部およびX層下部では、 $r_{1.706} - 1.710$ と $r_{1.725} - 1.731$ 、IXb層下部では $r_{1.705} - 1.711$ と $r_{1.717} - 1.720$ 、IXc層下部では $r_{1.700} - 1.705$ と $r_{1.723} - 1.729$ と異なるレンジが検出された。

4 考察

IV層およびV層には下位と比較すると火山ガラスが多く含まれている。この火山ガラスはバルブ型を主体とする形態と褐色を帯びた火山ガラスが混在するこ

と、およびその屈折率から鬼界アカホヤ火山灰 (k-Ah: 町田・新井, 1978) に由来するものと考えられる。

IV層からVIIIa層までの重鉍物組成は、斜方輝石の比較的多い組成であり、その屈折率はIV層からVIIIa層までほとんど変化はない。その値は町田・新井 (2003) などに示されているK-Ahの斜方輝石の屈折率に比べると、モードがやや低い方にずれている。これにより、K-Ahに由来する斜方輝石の他に、別のテフラに由来する斜方輝石も混在している可能性があると考えられる。

町田・新井 (2003) の記載から、K-Ahより下位で宮崎平野に分布し、今回の測定値にほぼ一致するテフラとしては、霧島小林テフラ (k-r-Kb) があるが、小丸川以北の宮崎平野北部ではほとんど確認できなくなるといわれている (宮崎県埋蔵文化財センター, 2003)。

VI層およびVIIIa層中には、軽石あるいは軽石型火山ガラスの濃集する層準が発掘調査の所見で認められないことから、今回の分析地点では、Kr-Kbの硬化堆積物は視覚的に確認できない可能性が高い。ただし、今回の分析結果より、Kr-Kbに由来する斜方輝石がVI層やVIIIa層に混在している可能性が高いと判断される。

VIIIb層は上述したIV層およびV層と同程度の火山ガラス比の高い層位である。火山ガラスの形態はバルブ型と軽石型が同程度であり、火山ガラスの屈折率は上述したK-Ahと明らかに異なることから、K-Ahとは異なるテフラに由来する火山ガラスである。K-Ahより下位であることと、その特徴的な屈折率により、VIIIb層のテフラは始良Tn火山灰 (AT: 町田・新井, 1976) に由来すると考えられる。また、同層位の斜方輝石の屈折率もVIIIa層以上のそれより高く、その値もATに由来することは明らかである。

今回の分析地点におけるATの降灰層準は、その濃集層準であるVIIIb層の下限すなわちVIIIb層最下部付近に推定することが出来る。よってVIIIa層およびVIIIb層より出土した石器群はAT降灰以降、IXa層より出土した石器はAT降灰以前の年代観が与えられる。

なお、VIIIb層最下部からX層までの斜方輝石の屈折率を見ると、ATに由来する斜方輝石とともにATとは

異なるテフラに由来すると考えられる斜方輝石が混在している。町田・新井(2003)の記載からAT下位で宮崎平野に分布し、かつ今回測定された測定値と酷似するテフラとして、霧島アワオコシテフラ(Kr-Aw)や霧島イワオコシ(Kr-Iw)があげられる。しかし、試料中にはこれらのテフラに由来するスコリアや軽石が認められないことから、その降灰層準は不明である。これらのテフラに由来する斜方輝石は、細粒の碎屑物として、本来の降灰層準から流水や風送によってこれらの土層中に含まれたものと考えられる

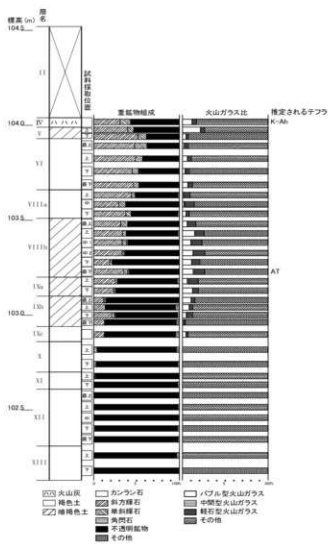
第4節 小結

平山原遺跡において採取した試料を対象にテフラ分析を行った。その結果、VI層からVIII層に霧島小林テフラ、VIII層最下部に始良Tn火山灰(AT、約2.6万年前～2.9万年前)が存在する可能性の高いことが確認された。

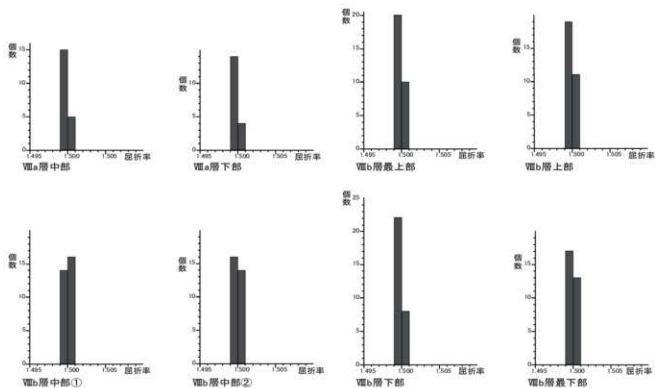
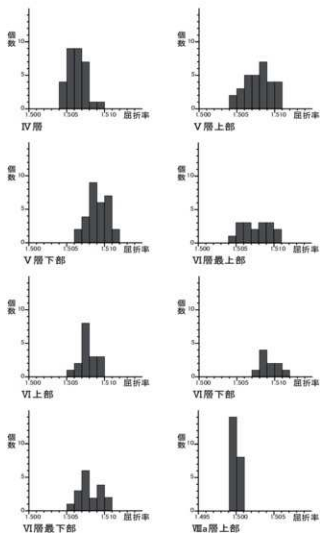
以上の結果から、今回の分析により、堆積の有無はあるが、各層における一定の年代観が確認された。この結果を基に本遺跡および周辺遺跡との遺物を比較検討する必要がある。しかしながら本遺跡の問題として本遺跡が斜面地に位置し、堆積状況も一定ではないことを考慮すると、層序内のテフラが降灰していることは確実であるが、明確な層として認識できないことから遺物実測図との比較検討を行う必要がある。

引用文献

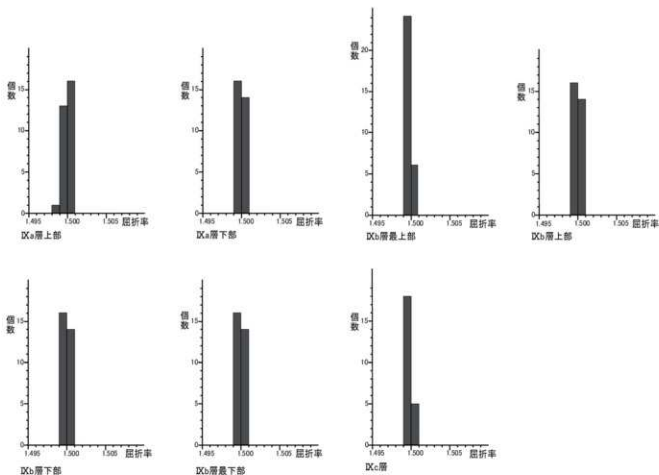
- 福沢仁之,1995,天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年輪堆積物, 第四紀研究, 34,135-149.
- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別, 地質学雑誌,101,123-133.
- 早津賢治,1988,テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフラクロノロジー-ATにまつる議論に際して-,考古学研究,34,18-32.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・岡井正明・小林哲夫,1995,南九州,始良カルデラ起源の大隅地下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14 C年代, 第四紀研究,34,377-379.
- 木村克己・巖谷敬光・三村弘二・佐藤喜男・佐藤信生・鈴木祐一郎・坂巻幸雄,1991,尾鈴山地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)地質調査所,137p.
- 町田 洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-,科学,46,339-347.
- 町田 洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰, 第四紀研究,17,14 3-163.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・太田陽子・河名俊男・森脇 広・長岡信治(編),2001,日本の地形7 九州・南西諸島,東京大学出版会,355p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗,1987,始良Tn火山灰の14 C年代, 第四紀研究,26,79-83.
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・藤岡一郎,2001,始良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック(演習),地球惑星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM),2001,Qm-010.
- 宮崎県埋蔵文化財センター,2003,宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第76集 平成14年度 東九州 自動車道(都農～西都農)関係埋蔵文化財発掘調査 概 要報告書Ⅲ,87p.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦,1993,四国沖ビストンコア試料を用いたA T 火山灰噴出年代の再検討-タンデロン加速器質量分析法による浮遊性有孔虫の14 C年代-,地質 学雑誌,99,787-798.



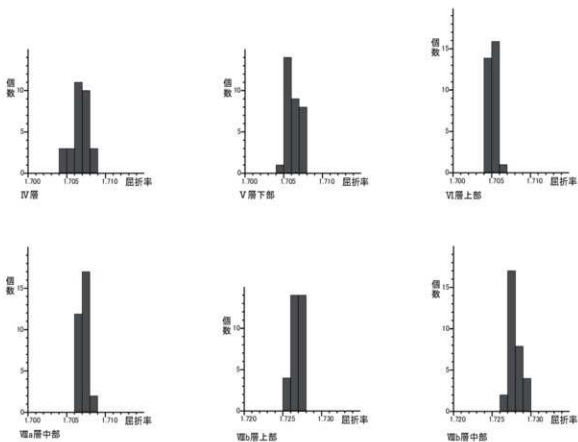
第 78 図 重鉱物組成および火山ガラス比



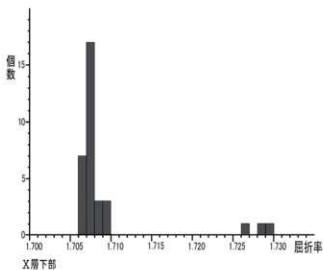
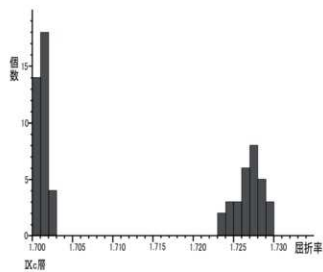
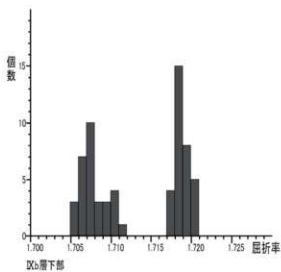
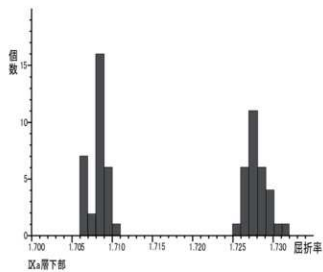
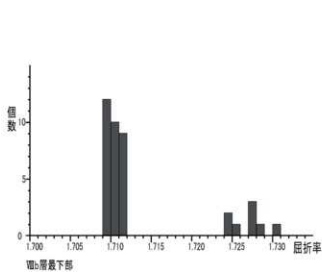
第 79 図 火山ガラスの屈折率 (1)



第80図 火山ガラスの屈折率(2)



第81図 斜方輝石の屈折率(1)



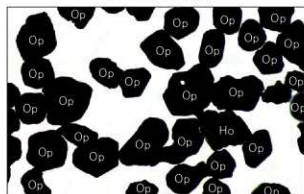
第 82 図 斜方輝石の屈折率 (2)



1. 重鉱物 IV層



2. 重鉱物 VIIIb層中部



3. 重鉱物 XII層中部



4. K-Ahの火山ガラス IV層



5. 軽鉱物 VIIa層中部



6. ATの火山ガラス VIIIb層中部

Opx:斜方輝石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Op:不透明鉱物, Vg:火山ガラス, Qz:石英,
Pl:斜長石.

0.5mm

写真5 軽鉱物・重鉱物・火山ガラス

第七章 総括

第1節 後期旧石器時代

第VI章で述べたとおり、本遺跡では後期旧石器時代の遺物における時代特定を行うため、火山灰分析を実施した。その結果は前章にあるとおりだが、この結果を踏まえ総括を行うこととする。

なお、自然科学分析から得られたテフラ降灰層は以下の通りである。

- ・IV層：鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)
- ・VI層～VIII a層：霧島小林テフラ
- ・VIII b層：始良 Tn 火山灰 (AT)

本遺跡の旧地形は第3次調査区を含め、4つの尾根、3つの谷から構成され、起伏の富んだ地形となっている。それぞれの尾根で堆積状況が変化し、同一層での調査が困難であった。しかしながらIV層、V層、VI層など全域に渡り堆積が確認された層があり、縄文時代早期以下の層序においては、一定の堆積状況のもと調査を行うことが可能となった。

1. 後期旧石器時代時期細分について

本遺跡の堆積状況や自然科学分析の結果より得た層位からの検討も含め、後期旧石器時代の各層において出土した細石刃やナイフ形石器などの各層において本県の10段階編年に照らしつつ、各時期の内容について考察を行う。

2. 各層の石器群の特徴と細分について

IX a層：本遺跡における後期旧石器時代最下層に位置するIX a層は、1点のみだがナイフ形石器が出土している。このナイフ形石器は縦長剥片素材を利用した3cm程の小型基部加工ナイフ形石器である。

自然科学分析結果ではIX a層はAT降灰前であるが、ナイフ形石器の特徴からナイフ終末期のものであり、上部からの落ち込みの可能性がある。

VIII b層：VIII b層から出土する石器は、ナイフ形石器に伴い、細石刃が出土している。ナイフ形石器は基部加工および二側縁加工のナイフ形石器で縦長剥片素材、横長剥片素材とともに使用されている。長さは5cm未満の小型なものである。細石刃は黒曜石やチャート、流紋岩製のものである。

自然科学分析では最下部がAT降灰層として位置付けられており、AT降灰後の年代観が与えられる。細石刃は数量的に少なく、上部からの混入の可能性がある。VIII a層まで霧島小林テフラの混在が指摘されていることから、その前段階の第5段階もしくは、第6段階に位置付けられると考えられる。

VI層：VI層より出土する石器は、基部加工および二側縁加工のナイフ形石器とともに、VIII b層同様に細石刃を伴う。しかし、VIII b層よりも細石刃の数量が増加し、細石刃核も出土し、尖頭器や剥片尖頭器がこの層では出土している。ナイフ形石器は1点のみ6cmを越えるものだが、その他は5cmに満たない小型のものである。

自然科学分析では、霧島小林テフラの混在が確認されており、ナイフ形石器とともに多くの細石刃を伴うことから、この層での主流はナイフ形石器から細石刃へ移行していると考えられ、第8段階以降の細石刃石器群と考えられる。

3. 後期旧石器時代の性格

後期旧石器時代の性格としては、各層で出土した遺物にはナイフ形石器や剥片尖頭器、細石刃など主に狩りで使う狩猟具を中心とした遺物が出土していることが挙げられる。またその周辺には石核や剥片、破片などといった石器製作に関連する遺物も多く出土している。しかしながらその数量に反比例し、接合できる遺物はごく少数であり、大がかりな石器製作としての場とは考えにくい。接合が可能な石器に関しても、剥片同士の接合はわずかで、割れたものの接合が多い。

このような出土傾向から本遺跡の後期旧石器時代の性格としては、石器を作り出す製作の場ではなく、狩猟の際に石器の調整を行う場、一時的調理を行うキャンプサイトのような場所であると考えられる。

第2節 縄文時代早期

1. 遺構

本遺跡から検出された遺構としては、第2次調査の集石遺構1基と土坑4基がある。集石遺構に関しては、その分布域が後期旧石器時代の礫群とほぼ同域にあり、石材の中には礫群との接合関係を持つものもある。礫群同様に尾鈴山酸性岩類を用いて作られており、本

遺跡から出土する石核や剥片などの遺物とともに、石材利用の一端を尾鈴山酸性岩類が担っていると考えられる。

土坑に関しては、4基が4-1区で検出された。この土坑に関しても、堆積状況から後世のものとしている他の土坑3基とともに同区域から検出されている。これらの土坑は等高線に直交しており、土坑自体の深度も浅いことから陥し穴状遺構の可能性は低い。

2. 出土遺物

本遺跡第1次・第2次調査における縄文時代早期の土器をみると遺物量としては無文土器の小片が多く、ついで妙見・天道ヶ尾式にあたる土器の割合が多い。楕円押型文や山形押型文は第IV章第6節で述べたように、掲載している1点ずつのみ出土している状況である。無文土器に関しては小片が多く、器壁も厚いものが多い。また、胎土中の砂は1mmから5mmまでのものが多く、脆いものが多い。このため型式による時期特定は困難である。よって次に多く出土している妙見・天道ヶ尾式の時期から想定される年代を基準に時期特定を行う。妙見・天道ヶ尾式に関しては、手向山式と平袴式の要素を併せ持ち、この両形式の間点として位置づけられている。この形式の間点という時期の位置付けから、本遺跡の縄文時代は縄文時代早期中葉と考えられる。

一方、第3次調査は、薄手の無文土器を主体とし、石器は小ぶりであるが、肉眼で産地特定できる石器石材のほとんどは西北九州産黒曜石、阿蘇象ヶ鼻産溶結凝灰岩、姫島産安山岩などの九州北半部のものであり、大分県・福岡県域で広く分布が認められる無文土器も含めると、第3次調査区の遺物は九州北部の特色が強い。そして、土器の時期については、前述したとおり、二日市洞穴第4文化層（下層）～第5文化層相当と考えられる。また、姫島産安山岩の出土からも縄文時代早期前葉に位置づけられる。

3. 無文土器について

無文土器については、大分県の川原田岩陰遺跡等でその存在が知られるようになり、その後、大分県域を中心に研究が進められてきた（賀川 1967）。

1975年～1978年の大分県九重町二日市洞穴の調査では、Ⅶ層～ⅩⅣ層で無文土器が出土した。橘氏は無

文土器出土層を6枚の文化層に分け、分類を行ない、編年案を提示した。そこで、底部形態が「平底→丸底→尖底」変遷すると指摘した（橘 1980）。

その後、大分県、福岡県域で無文土器の発掘事例が増え、綿貫氏は二日市洞穴の事例等を中心に、多縄文土器併行期から押型文直前までの底部形態を基に、8型式に分類し編年を提示した。その中で土器の底部形態とあわせて二日市洞穴の発掘成果により、各層の出土遺物の中で、器面調整が条痕調整とナデ調整の組成比率により、おおまかに器面調整手法が条痕調整無文土器からナデ調整無文土器に変化する。しかし、地域によって文様や調整手法に変動があったとした。また東北部九州において押型文土器の波及については、ナデ調整無文尖底土器成立後の存続期間中に流入すると指摘している（綿貫 1999、2003、2004）。

一方、このような大分県、福岡県域での研究が深まっている中で、宮崎県域では無文土器の出土数が少ないこともあり、研究が進んでおらず大分県域の編年に援用するところである。

しかし、近年東九州自動車道の発掘に伴い、本遺跡も含め宮崎県域で資料が急増している。そこで宮崎県内の無文土器出土遺跡の集成したものが第32表である。遺跡数は39遺跡であり、北は西臼杵郡高千穂町の古城遺跡から南は西諸県郡野尻町の東城原遺跡まで広く分布している。

集成の結果、以下のことが挙げられる。

①器面調整について、ナデもしくは条痕後ナデが多いが、集成では条痕後ナデよりナデ調整だけの土器が多く出土している。

②本遺跡も含め、宮崎県内で土器の混和剤として繊維が含まれている土器が多い。

③二日市第4文化層（下層）～第5文化層、陽弓式段階に相当する遺跡内の遺物には、姫島産安山岩（ガラス質安山岩）が含まれている例がある。

④二日市第4層文化（下層）～第5文化層、陽弓式が広く県域に分布している。

⑤厚手のコブ文土器は、県北に分布する。

宮崎県内で薄手の無文土器は、東九州自動車道関連で川南町から都農町までの範囲に早期の無文土器が多く出土している。その中でも都農町の立野第2遺跡、

尾第2遺跡、朝草原遺跡、俵石第1遺跡は同じ台地上に位置し、4遺跡とも無文土器が出土している。

朝草原遺跡は、きわめて焼成が良好で薄手のナデ調整実底無文土器が出土し、また、尾第2遺跡では、薄手のナデ調整実底無文土器と実底の貝殻線刺突文土器が出土しており、立野第2遺跡以外の無文土器に関してはほとんどの土器がナデ調整を施されている。立野第2遺跡では、条痕調整後丁寧なナデ調整が施されており、砲弾型の可能性がある実底土器が出土している。そして、無文土器には胎土に繊維が含まれているものが多い。

本遺跡については、無文土器のほとんどがナデ調整である。全体点数の25%については繊維痕土器であり、混和剤として植物や獣毛を使用していると考えられる。

都農町以外でも、宮崎県内では二日市第4文化層(下層)～第5文化層、陽弓式と位置づける土器から繊維痕が認められる土器が出土している。また、二日市第4文化層(下層)～第5文化層、陽弓式の段階から無文土器が宮崎県域に波及している傾向にある。

第32表 宮崎県内出土の早期無文土器集成表

No.	遺跡名	所在地	調整		実底土器	胎土	繊維痕	調整		調整方法	胎土	繊維痕	他の出土土器	報告書(報告書種別・出土層)	備考	調査年
			有	無				有	無							
1	島の上遺跡	日向市上津	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
2	古茂原遺跡	日向市古茂原	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
3	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
4	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
5	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
6	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
7	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
8	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
9	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
10	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
11	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
12	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
13	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
14	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
15	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
16	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
17	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
18	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
19	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
20	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
21	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
22	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
23	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
24	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
25	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
26	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
27	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
28	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
29	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
30	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
31	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
32	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
33	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
34	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
35	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
36	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
37	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
38	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	
39	早川遺跡	日向市早川	○	○	山口	なし	なし	なし	なし	神代文、無文文、段文文	なし	なし	早期調整	無	無	

注1 調整1年以上の土器を調査済み、以下を調査済みとした。
 注2 本遺跡の無文土器は調整1年以上の無文土器と調整1年以上の無文土器を区別して記した。
 注3 報告書に無文土器と調整1年以上の無文土器とを区別して記した。
 注4 本遺跡の無文土器は調整1年以上の無文土器と調整1年以上の無文土器を区別して記した。
 注5 本遺跡の無文土器は調整1年以上の無文土器と調整1年以上の無文土器を区別して記した。
 注6 報告書に無文土器と調整1年以上の無文土器とを区別して記した。

第3節 考察

後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての本遺跡の性格としては前述しているとおり、石器調整や一時的に生活を行うキャンプサイトの性格が強い。遺構に関しては礫群や集石遺構、土坑など遺構が確認されたが、共通点がいくつか確認されている。

(1) 遺構の位置関係

本遺跡で確認された遺構の特徴として、その位置関係が挙げられる。まず礫群と集石遺構は位置がほぼ重なるように検出された。

次に、土坑に関してもアカホヤ火火山灰の降灰前、降灰後に作られた土坑計7基に関してその位置関係は同区域に作られていることが確認された。

本遺跡で検出された3種類の遺構全てに当てはまる共通点として、全ての遺構が尾根の北側斜面に作られていることである。

(2) 使用石材

礫群や集石遺構に関しては、その石材が100%尾鈴山酸性岩類で構成されているという共通点がある。

この共通点の理由として考えられるのは、本遺跡の心見川左岸の斜面では尾鈴山酸性岩類を基にした岩盤があり、またX層以下の層からは同石材が多く含まれており、礫群や集石遺構の周辺はすぐ下から石材を得られる状況であったと考えられる。このため遺跡周辺で非常に手に入りやすい、かつ扱いやすい石材としてこの石材が使用されていたと考えられる。

(3) まとめ

本遺跡の最大の特徴として、石材および土器の搬入が挙げられる。まず土器では、第1次・第2次調査において出土した縄文時代早期の妙見・天道ヶ尾式土器、第3次調査において二日市洞穴第4層下～第5層、陽弓式に類似すると考えられる無文土器が出土した。双方は前述している通り、妙見・天道ヶ尾式は南九州系の土器であり、二日市洞穴第4文化層（下層）～第5文化層は東九州系の土器である。しかもそれぞれの調査区の出土率からそれらが少数のものではないことが分かる。また、土器のみならず石器石材に関しても黒曜石産地は第1次・第2次調査は南九州系、第3次調査は北九州系の様相を呈する。このように、それぞれ

の調査区において影響を強く受けた地域が異なることが明らかとなった。双方の時系列をみると、第1次・第2次調査区の後期旧石器時代が終了し縄文時代早期中葉の生活が始まるまでの間において第3次調査区では縄文時代早期前葉の生活を行っていたものと推測される。

【参考文献】

【論文】

- 秋成雅博 2005 「宮崎10段階編年の概要」『九州州石器』第9号 九州旧石器文化研究会
- 宮崎県農政水産部農業振興課編 1986 「東筑豊・美々津地域土地分類基本調査 郡版」
- 細貫俊一 1999 「九州縄紋時代早期前末から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会
- 細貫俊一 2003 「九州の縄紋時代早期前半の土器—岡田憲一氏の原稿を讀んだ感想—」『利根川』24・25 特集：押型文土器とその周辺
- 細貫俊一 2008 「西南日本の無文土器」『紀實 縄文土器』九州縄文研究会 2007 『第17回 九州縄文研究会 福岡大会 九州における縄文時代早期前葉の土器相』
- 大分県考古学会 1998 「特集 川原田岩窟遺跡」『おいたの考古』第9・10集 賀川光夫 1967 「大分県川原田跡」『日本の洞穴遺跡』
- 石器原産地研究会 2003 「石器原産地研究会誌 Stone Sources」No.3
- 水ノ江和司 1998 「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器—論究編—』九州縄文研究会
- 郡県史編纂委員会 1998 『郡県史 通史編』

【報告書】

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003 「布平遺跡・古城遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター第74集
- 宮崎県教育委員会 1995 「打石遺跡・早日渡遺跡・矢野原遺跡・蔵田遺跡」一般国道218号柳井橋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「古野第2遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター第155集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009 「赤木第8地点（第一次調査）」宮崎県埋蔵文化財センター第182集
- 日向市教育委員会 1986 「後陣遺跡・越ヶ尾遺跡」竜崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「尾立第2遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第169集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「朝草原遺跡 尾立第3遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第147集

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『立野第5遺跡 立野第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第156集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1997 『葛島遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第4集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『虚空蔵遺跡 赤石・天神木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第123集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『前ノ田村上第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第161集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009 『尾花 A 遺跡1 旧石器時代～縄文時代編』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第185集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『野宮第2遺跡 第一分掘』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第158集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『言明寺第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第102集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『言明寺第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第94集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『別府原遺跡 西ヶ道遺跡 別府原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第61集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003 『北牛牧第5遺跡・廻座第3A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『西ノ別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第124集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『南原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第119集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『永年田第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第134集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『国光原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第149集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『南年田遺跡第2次調査』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第152集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『森の上遺跡 野地久保遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第196集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『猿石第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第201集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『内野々遺跡・内野々第2・第3遺跡・内野々第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第202集
- 宮崎市教育委員会 2003 『垂水第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第58集
- 宮崎県教育委員会 1994 『野久首遺跡 平原遺跡 妙見遺跡』九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第2集
- 宮崎県教育委員会 1985 『蒲田遺跡・入科遺跡・堂地西遺跡・平架遺跡・堂地東遺跡・熊野原遺跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集
- 西都市教育委員会 1992 『新立遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- 清武町教育委員会 2008 『清武上第ノ原遺跡(3)』清武町埋蔵文化財調査報告書第25集
- 田野町教育委員会 2003 『鹿村野地区遺跡』田野町文化財調査報告書第44集
- 田野町教育委員会 1986 『芳ヶ道第1遺跡 芳ヶ道第2遺跡 芳ヶ道第3遺跡 礼ノ元遺跡』田野町文化財調査報告書第3集
- 田野町教育委員会 1992 『井ノノ尾遺跡』田野町文化財調査報告書第14集
- 宮崎県高碑町教育委員会 2004 『永道第1遺跡第2地点』田野調査文化財調査報告書第30集
- 宮崎県西諸郡別府町教育委員会 1990 『新村遺跡・高山遺跡・東城原第1・2・3遺跡・紙屋城址遺跡』野尻町文化財調査報告書第4集
- 小林市教育委員会 2002 『上旗遺跡・平瀬野遺跡・大平遺跡』小林市文化財調査報告書第14集
- 都農町教育委員会 1989 『新別府下原遺跡』都農町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 橘 昌信編 1980 『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館
- 細貫俊一編 2004 『大分県二日市洞穴 分析編』大分県九重町教育委員会
- 大分県教育委員会 1996 『横手遺跡群 発掘調査報告書』大分県文化財調査報告書第93集
- 大分県教育委員会 1970 『稲荷山遺跡緊急発掘調査』大分県文化財調査報告書第二十・二十一合編
- 臼杵市教育委員会、臼杵開発株式会社 1974 『東台遺跡』臼杵市吉小野所在の先土器・縄文早・後期遺跡の調査報告
- 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『大志戸B跡』遺構篇 中国横所自動車道尾道松江線建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書17
- 熊本県教育委員会 1990 『天置ヶ尾遺跡』熊本県文化財調査報告書第111集



2-1区土层断面



VI層遺物出土狀況①



VI層遺物出土状況②



VI層遺物出土状況③



SI2 検出状況



SI3 検出状況



SI4 検出状況



SI4 構成礫



SI4 構成礫接合状況



SI1 検出状況



SI1 半截状況



SI1 完掘状況

図版 4



SC 2 半截状況



SC 2 完掘状況



SC 5 半截状況



SC 5 完掘状況



SC 6 半截状況



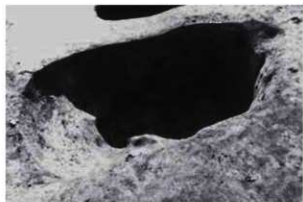
SC 6 完掘状況



SC 7 完掘状況



SC 1 半截状況



SC 1 完掘状況



SC 3 半截状況



SC 3 完掘状況



SC 4 半截状況



SC 4 完掘状況



炭窯検出状況



炭窯半截状況



炭窯完掘状況

図版 6



第 1 次調査遺物①



第 1 次調査遺物②



IX a 層遺物①



IX a 層遺物②



VII a 層・VII b 層遺物



VII b 層遺物



VII 層遺物



VI 層旧石器遺物①



VI層旧石器遺物②



VI層旧石器遺物③



VI層遺物 流紋岩



VI層遺物 硅質頁岩



VI層遺物 接合資料



接合資料①



接合資料②



接合資料③



VI層遺物 尾鈴山酸性岩類



VI層遺物 尾鈴山酸性岩類、黒曜石、チャート



V層旧石器遺物



縄文土器 I類



縄文土器 II類

第1次・第2次



縄文土器 III類



V層縄文時代遺物①



V層縄文時代遺物②



VI層縄文時代遺物①



VI層縄文時代遺物②



VI層縄文時代遺物③



VI層縄文時代遺物④



IV層縄文時代遺物①



IV層縄文時代遺物②



I層 - III層遺物①



I層 - III層遺物②



I層 - III層遺物③



I層 - III層遺物④



その他の時代① 土器・石器・鉄器



その他の時代② 陶磁器類・ガラス瓶



その他の時代③ 統制（軍用）陶器



調査前現地地形



チャートブロック



黒曜石ブロック

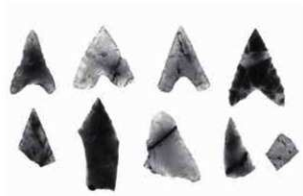


B区土層図



縄文土器

図版 12



石鏃



石斧・敲石・台石



ホルンフェルス、砂岩、流紋岩、尾鈴山酸性岩類遺物



安山岩系遺物



チャート遺物



西北九州産黒曜石遺物



石核



接合資料

第3次

報告書抄録

ふりがな	ひらやましもばるいせき							
書名	平山下原遺跡							
副書名	東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第201集							
編著者名	田中 達也、川俣 昭子、石貫 弘泰							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	2011年3月18日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ひらやましもばるいせき 平山下原遺跡	みやざまけんこゆるん 宮崎県児湯郡 つちようおおあぶくわきた 都農町大字川北 あざしもばるてらした 字下原、寺下	45406		32° 16' 56"	131° 32' 15"	20091125 ～ 20100726	7,990㎡	東九州自動車 道（日向～都 農間）建設に 伴う発掘調査
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
集落	後期旧石器時代 縄文時代早期 近世以降	竪群 3基 集石遺構 1基 土坑 4基 土坑 3基 炭窯 1基			剥片尖頭器・尖頭器・角錐状石器 ナイフ形石器・細石刃・細石刀核 縄文土器（貝殻・押型・無文） 石鏝・石斧・敲石・磨石・台石 銭貨、煙管、近代陶磁器			
要約	平山下原遺跡の特徴として、石材および土器の産地の相違が挙げられる。まず土器では、第1次・第2次調査において出土した縄文時代早期の天道ヶ尾・妙見式土器、第3次調査において二日市洞穴第4文化層（下層）～第5文化層、鬲弓式と類似する無文土器が出土した。天道ヶ尾・妙見式は南九州系の土器であり、二日市洞穴第4文化層（下層）～第5文化層、鬲弓式は大大分福岡県域に多く分布している土器である。また、石器石材に関しても黒曜石産地は第1次・第2次調査は南九州系、第3次調査は北部九州系の様相を呈する。このように、それぞれの調査区において影響を強く受けた地域が異なることが明らかとなった。							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 201 集

平山下原遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 2

2011年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社 都城印刷

〒 885-0055 宮崎県都城市早鈴町 1618 番地

TEL 0986(22)4392 FAX 0986(22)4891
